物語、彼女との約束

一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
物語、彼女との約束

【Ｎコード】
Ｎ３９５１Ｅ

【作者名】
一文字

【あらすじ】
中学時代の同級生である彼女は、世界が求めている聖女だった。彼女たちが眠りにつくことでこの世は救われると教会は言うが、僕はそれに反対する。一人で彼女を救おうとするが、その前にかつて親友だった彼が立ちふさがる―。僕がしたいこと、彼が目指すもの、彼女が望むもの。そのすべてを巻き込んで、聖女計画が動き出す。

００ー最後に（前書き）

数年前、ある映画を見ました。そのときに感じた『衝撃』が、この話を作る原動力になりました。登場人物や一部設定は、その映画がベースになっています。

この話は、映画に対する、私からの『回答』です。

００ー最後に

これから、彼女達が眠りに就く。この国にしてみれば記念すべき瞬間だ。
そして、僕にとっても、とても大切な瞬間となる。
だから、僕はこの数日を振り返っておこうと思う。僕が、彼が、そして彼女が、何がしたくて何をしたのか、それを書きとめようと思う。
だけど、それにはここ数日間だけの話じゃ駄目だと気が付いた。振り返るなら、もっと前。そう、僕たちが中学生だった頃から始めないといけない。
あの時は気が付かなかったけれど、僕たちの物語はあの時から始まっていたのだ。そしてたぶん、今この瞬間も続いている。
明日から、また新たな物語が始まる。そしてそのためには、これまで続いてきた物語を終わらせなければならない。だから僕は、ここに記しておこう。僕たち４人と、それを取り囲む大人や世界の話を。
僕の名前は、藤川ヒロキ。高校２年生だ。
始まりは、そう。僕たちが中学３年生になったばかりの春まで遡る。

０１―プロローグ

その部屋の壁は石で出来ており、窓は巨大なステンドグラスが聖書の教えを説いていた。入り口の扉は巨大な木製で外部の音が聞こえないほどの厚さを誇っており、扉と反対側の壁、部屋の一番奥には人を磔にできるほど大きな十字架がかかっていた。
外の天気は荒れていた。ステンドグラスを叩く雨音がその激しさを伝え、時々光る稲光はそこに描かれた物語を一瞬浮き上がらせる。
この部屋の灯りは、壁にかけられた無数の蝋燭だけ。１０や２０ではない、優に１００を超える蝋燭が静かに室内を照らしていた。
そんなオレンジの灯りの中、部屋の中央には巨大な机があり、そしてその周囲には１２人の人物の姿があった。
誰も口を開かない。部屋に落ちるのはバラバラとステンドグラスを叩く雨音と、時折響く雷鳴だけ。絶対的に光量がたりない部屋にあって、彼らがどのような顔をしているのかお互いにうかがい知ることはできない。だが、部屋に落ちる分厚い沈黙は彼らの心の内を完璧に代弁していた。
彼らは全員、老人だった。どの顔にも深いしわが刻まれている。それは、彼らが感じてきた苦悩をそのまま刻み込んだかのようでもあった。
「本国からは、何の通達もないのですか？」
入り口付近に座った老人が、ようやく沈黙を破る。
「進むべき方向は決めるが道は決めない。それが本国の方針だ」
別の老人が短く答えると、全体から軽いため息が漏れる。それは『やっぱりそうか』という類の諦観を含んだものだった。
「このままでは、我々の存続にかかわる問題に発展しかねない」
今度の発言は誰が言ったものか判らなかった。だがそれは誰もが思っている事で、誰が口にしてもおかしくない事だった。
「何か行動を起こさねばならない」

その言葉で彼らの間に静かな動揺が波紋のように広がる。
それを見て、壁にかけられた十字架の下に座っている老人が静かに口を開く。
「一番大切なことは」
その一言で静かになる室内。
話している老人の後ろの壁には十字架と共に最も多くの蝋燭がかけられており、逆光で顔は見えない。
「我々が今までどおり存続していくことだ。これから先も我々を必要とする人々のためにも。だから今権威を失うわけにはいかぬ。そのために必要な事は説教ではなく、行動だ」
静かに、威厳に満ちた声で語る。それはまるで、
「計画を、実行する」
十字架が彼の口を借りて語っているかのようだった。

０２ー似たもの同士だった

僕と彼は、結局似た者同士だったと思う。
少なくとも中学３年生だったあの時、僕はそう思っていた。
パシッ、パシッ、とバドミントンの羽ーシャトルを打つ音が体育館に響き渡る。コートの中に、僕ともう一人彼がいた。時刻は午後６時を過ぎようとしている。４月の後半、もうずいぶんと暖かくなった。桜は散り始めている。
バシッ、という一際高い音と共に、相手が気まぐれに打った鋭い一撃を必死に返す。ネットの向こう側に見える相手はそれを見て満足そうに笑った、気がした。
バシッ、と今度はこっちが打ち込んでやる。相手のコート端を狙った、なかなかいいコースだ。だが相手もそれを何とか返してくる。
そのとき僕の顔に浮かんだ表情も、やっぱり満足そうな笑顔だった。シャトルがコートに落ちる事なく、もう５分以上はこうして打ち合っている。時々お互いが鋭い一撃ースマッシュを打ち合うがそれも何とか返しながら、ラリーが続く。練習試合という形を取っているが、お互い本気で打ち合ってはいない。
だがそんな繋がりは、相手のミスで突然終わる。
「あ」
という声と共に、対戦相手は豪快に空振りをした。コツンという音をたててシャトルはようやく地面に落ちる。
「あーあ、何やってるんだよ白沢」
試合である以上これは僕のポイントになるが、やったという気持ちよりこのラリーが終わってしまった事への不満を込めて僕は相手に文句を言う。
ネットの向こう側で悔しそうな顔をしているのは、友達の白沢タクヤ。中学に入学したばかりでまだ友達も少なかった時、たまたま席が隣になったのが彼だった。

最初の会話が何だったのかもう覚えていないが、互いの趣味や好みがよく似ていると気が付いた。偶然二人とも同じ部活を選んだけれど、それは決してどちらかにあわせた訳じゃなかった。
「汗でラケットが滑ったんだよ」
白沢はそういいながら大げさにラケットを振り回す。
ラリーが途切れて、白沢も僕もコートを出た。
「あ、ねぇ、コート空いたの？」
それを見ていたのだろう、僕達の後ろから声が聞こえた。この声の主は小笠原マキ、彼女も同じ3年生だが、クラスは違った。
「ああ、開いたよ」白沢が振り返らずにそっけなく答える。
「ひどい、もうちょっと丁寧な言い方できないの？ねぇ、サユリもそう思うでしょ？」
そこで僕と白沢は振り返る。
声をかけてきた小笠原と、その隣にサユリと呼ばれた二人の少女がラケットを手に立っていた。
サユリと呼ばれた彼女は、沢西サユリという。彼女と小笠原は幼馴染みで小さい頃からの知り合いらしい。そんな彼女たちだが、性格は正反対だ。小笠原が思った事、言いたい事をはっきりと口にするのに比べ、沢西はどちらかというと後ろで静かに微笑んでいるような印象を持っていた。
この時だって白沢の文句を言うのは小笠原で、沢西は文句を言い返す白沢と小笠原を微笑みながら見守っているだけだった。そんな彼女と、白沢と小笠原の言い争いを見ていた僕の目が一瞬合った、気がした。
小笠原は白沢の受け答えの素っ気無さがまだ気に入らないようで、文句を言いながらもコートへ入っていく。
「あいつらいちいちうるさいな、いいじゃないか俺がどうやって返事したって」
僕と白沢、二人で体育館の壁に背中を預けて座り込んでも、彼は文句を言い続けていた。口ではそういうが、そんな会話を白沢が楽し

みにしているのを僕は知っていた。でも、何も言わなかった。きっとそういったところで白沢は否定するだろうから。
「あいつらって、文句を言うのは小笠原だけじゃないか」そう言う僕に、
「あの二人はいつもあんな感じだからな。沢西ももう少し話せばいいのに、顔はわるくないんだから」
突然会話の流れが変わって、僕は何と答えていいのか悩んでしまう。返事が無いのに不安を覚えたのか、
「お前はそう思わないのか？」
意外そうな顔をした白沢に、そう聞かれた。
「そうだな、悪くはないと思うけど…」
これが、この時の僕の精一杯の答えだった。
「ふーん、まだお前の好みのタイプだけは分からないんだよ。どんな子がいいんだ？」
「どんなって、人をそんな物みたいに言うのはよくないと思うけど」
そうやんわりと話を逸らしながら僕は、コートでさっきの僕たちと同じように打ち合いを始めた小笠原と沢西を見ていた。

それから数日後。
その時も僕たちは体育館の壁に背中をもたれさせていた。何かを話していたはずだけど、内容は覚えていない。多分、ついさっきまでやっていた試合の内容を振り返っていたんだと思う。
「ねぇ、ちょっときたいんだけどさ。昨日配られた進路の希望表あるでしょ。あれなんか書いた？」
小笠原は突然話しかけてくる事が多くて、この時もそうだった。だけどそれを嫌に感じさせない、そういう魅力も持ち合わせていた。
白沢の正面に小笠原が座り、無言でその横に沢西が座る。ちょうど僕たち４人で輪を描くような形になった。
進路希望表。それは自分の意思を示す紙で、まだ４月だから内容はそれほど具体的ではない。進学か、就職か。進学ならば普通高校か

工業高校か商業高校か。その程度の質問だった。
そしてそれは、今年は特別な年だという事を感じさせる序章のようなものだった。今年で義務教育は終わる事や、初めて自分で自分の進む道を考えなければいけない事や、そして今までの友達との別れがもうすぐそこに迫っている事を、その紙切れは告げている、そんな気がした。
「私はまだ何も考えられないんだけど。藤川は？」
突然話を振られて戸惑った。あの時の僕は、未来の自分の姿が想像できないという漠然とした不安を抱えていたように思う。それでも無理に想像すると、未来の僕はドラマのエキストラのような『その他大勢』の中に紛れ込んでしまった。きっと来年の僕はどこにでもいる高校生になっている。そんな予感がしていた。
「俺もまだ書いていないよ」
「やっぱりそうだよね、みんなまだ進路とか分からないよね」
それに小さく西沢はうなずき、僕はまぁね、と答えた。
白沢もそれに続いてうなずく―かと思ったが、彼の返事が無い。僕達3人の視線が、彼に集まる。
「なに、白沢は何か考えがあるの？もしかして中学卒業してから職人に弟子入りでもするつもり？」
からかう口調で小笠原がそう言うが白沢は反論しない。それは、何かを言うか迷っている様子だった。
そして彼の口から出てきたのは
「俺は、神学校へ進もうかと思ってるんだ」
という言葉だった。
「はぁ、なんだそれ！初めて聞いたぞ！」
「えー、そうなの！？初めて聞いた！」
と声を上げ驚く二人と、声は出さずに目を開いて驚いた顔をする沢西。
「当然だ、俺も初めて言ったからな」
そう言った時の白沢の、少し照れたような誇らしいような、その笑

顔を僕は忘れられない。
そしてそれがきっと、僕と彼との決定的な違いとなった。

今、この全世界でほとんどの人が信じている宗教がある。この世界を創造し、全ての生き物を生み出し、深い慈悲と愛をもって世界を見守る大いなる父を唯一神とした教え。
町内には必ず一箇所以上は教会がある。図書館の場所を知らない同級生も教会の場所は知っているし、結婚から葬式、悩み事の相談まで、色々な事で人は教会を利用している。そして、教会の管理をし、人々に神の道を説き、悩みを聞いて助言を与え、結婚や葬儀も執り行う者―それが神父で、その神父になるために行く学校が神学校だった。
全寮制、完全男女別学の学校はその実、内部でどんな授業が行われているのかあまり公にされていない。世間も内部でどんな事をやっているかあまり気にしてはいないようだ。彼らは内部の教育がどうなっていても、自分の近所の教会の神父が立派な者ならばそれでいいのだろう。神学校はかなりレベルが高く、各学校の成績トップの者が行くような所だった。
そして白沢は、その神学校へ行きたいと言った。
「へぇ、すごいね。もう自分の進路決めてるんだ」素直に感心する小笠原に白沢は、
「まだ考えているだけだって。大体、言い出したお前はどうなんだよ、少しは将来の事、考えているんだろ？」と小笠原に切り返す。
「私？私はまだだなぁ。とりあえず普通に進学しようかなって思っているけど」
小さな声で私も、と答える沢西。そこに合わせるように僕も
「そうだな、俺もとりあえず普通の高校に進学することになると思うよ」と言った。
それを聞いて、
「せっかく義務教育が終わるんだから、自分だけの道を進みたいっ

て思わないのか！？」と言う白沢に対し、
「白沢みたいなのが神父になるなんて考えられないわ。もし自分の近くの教会にあんたが神父として来たら、私は次の日から悪魔崇拝者になるわ」
小笠原は薄笑いを浮かべて、
「俺は悪魔崇拝はしないけど。白沢が神父になれるなら、俺はきっと神になれるんだろうな」
僕はまじめな顔でそう言ってやった。
そして大笑いをする3人に白沢は落ちていたシャトルを投げつけながら
「お前ら覚えておけよ！俺が神父になってもお前らは救わないからな！」
と神父の卵としては問題発言をしたのだった。

この時は、あと1年後にはこんな話ができなくなることが、とても信じられなかった。
確実にやってくる別れに、まだあまり実感が持てなかった頃だ。

０３ー彼女との約束

その日、どうしてその時間まで学校に残っていたのか覚えていない。空は分厚い雲に覆われていて薄暗く、いつ雨が降り始めてもおかしくない。時刻は午後６時を回っていた。すでに日も暮れていることもあって、外はどんどん暗くなっていった。

いつもならこの時間は、校庭ではサッカー部が、体育館ではバスケットボール部が活動をしているはずだが、この日は両方の顧問が不在で部活は中止だった。不気味に静まり返った校舎の中を、僕はラケットを取りに体育館へ向かっていた。

体育館は校舎とは別の建物になる。２つは屋根の付いた渡り廊下で繋がっていて、その廊下を歩いているときにパッと音がした。雨が降ってきたようだ。激しくは無い、だが容赦なく体温を奪う冷たい雨が地面をうっすらと濡らしていく。

「天気予報では曇りだったのに…」

誰に言うわけでもなくぼやく。その日の朝の天気予報では雨は降らないだろうと言っていて、それを信じた僕は傘を持ってきていなかった。

これくらいの雨なら走って帰れる、と思った瞬間、雨が少し強くなる。それはまるで、天気が、天気を司っている神様が僕を帰させないという意思表示にも思えた。

天気予報では曇りだった。少しすれば止むかもしれない、そう思った僕は、ラケットを取ったあと体育館の中で少し待つ事にした。

建物に入るとすぐ、土足から上履きへ履き替えるスペースがある。そこから右へ行けば男子更衣室、左へ行けば女子更衣室で、正面の大きな鉄の扉が体育館への入り口だ。ラケットは体育館の中にある。僕は鉄の扉に手をかける。誰もいない体育館は電気もついていなくて、でも完全な暗闇ではない、ちょうど日が沈んでから夜になる間

のような、目の前の物の輪郭くらいならかろうじて分かるような暗さだった。
自分のラケットを取ってから、僕は入り口の右側に壁を背もたれにして座る。孤独を感じさせる暗く広い空間に、雨が当たる音が響く。まるで目の前の暗闇に体温を奪われる、そんな感じがした。
投げ出した足を縮めて、ヒザにあごを乗せる。考えたのは自分の進路の事だ。
配られた進路希望表に、まだ僕は何も書けないでいた。将来の自分が想像できず、将来の夢を持てないでいた。思えば、小さい頃から僕はそうだった。自分の夢というものを持てなかった。
―俺は、神学校へ進もうかと思ってるんだ
白沢の言葉がよみがえる。彼はもう自分の進む道を見つけていた。きっと自分の将来の姿も描けているんだろう。
自分と似ていると思っていた白沢の決意を聞いて、言いようの無い焦燥に駆られる。漠然とした将来のビジョンは僕に漠然とした不安を与えていた。自分がすべき事、できる事、したい事。それを自問し続けた。
そんな考えは、体育館に近づいてくる誰かの足音に打ち消される。その足音は入り口の左側、女子更衣室へと消えていく。誰かが忘れ物を取りに来たんだろうけど、アリーナの中には入ってこないと、考えていた。けれど更衣室から出てきた足音は出口へは向かわず、アリーナの扉の前で止まる。ゴロゴロと音を立てて扉が開き、外からの弱い光りと一緒に一人の女の子がゆっくりと入ってきた。
あたりを見渡して、扉のすぐ脇に座っている僕を見つけたらしい。それは少しはなれたところにいる僕からみても分かるほどビクッと肩を震わせた。きっと彼女は誰もいないと思っていたんだろう。そして
「だ、誰？」そう尋ねる声に、僕は聞き覚えがあった。
「沢西か、どうしたんだこんな時間に？」
あまり喋ったことのない彼女だが、一度も声を聞いたことがない訳

じゃない。部活中も小笠原と楽しそうにおしゃべりをする沢西だって、僕は見たことがあった。
彼女も僕の声で誰だか分かったらしい。安心したように大きく息を吐き出した。
「藤川君か、驚かさないでよ。こんなところで何をしてるの？」
「傘を持ってきてないから、雨がやむまで待ってるんだ」
そういう沢西こそどうしたんだ？という僕の問いに
「帰ろうとしたときに、忘れ物に気がついたの」
そういって沢西はカバンから一冊の文庫本を取り出す。カバーがかかっているから中は分からなかった。
僕は、沢西はすぐにアリーナを出て行くのかと思ったが、そんな予想に反して彼女は入り口の扉を挟んで僕と反対側へ座った。雨が降る夕刻。暗くて広い体育館の中に、二人だけが残った。

沢西は座ってから何も喋らず、僕は何か会話をしないといけないと思ったが、何を言っていいのかわからなかった。
沢西と1対1で話をしたのは数えるほどしかなくて、僕はあまり彼女のことを知らなかった。クラスは別だから、部活の方が印象が強い。
僕は小笠原と違い、よく喋るようなタイプの人間ではなくて、何か話さなければと思うほど何を言っていいのか分からなくなる。そんな時に限って、
―もう少し話せばいいのに、顔は悪くないんだから
白沢の余計な言葉が思い出された。
雨の音が響く、暗く広い空間の中で、正直に言うと僕は緊張していた。

「その本って、面白い？」
あまり本を読まない僕にとって、彼女がこの時間に取りに来た本が本当に面白いかどうかはたいした問題じゃなくて、このときは沈黙

に耐えられなかった。
「この本？うん、面白いよ。飛行機を作ってる男の子二人と、女の子のお話なんだけど」
普段はあまり話さない彼女からは想像できないくらい饒舌に、沢西はあらすじを僕に教えてくれた。それは、遠い所に行ってしまった女の子を、自分達の作った飛行機で迎えに行く話だった。
「あらすじは普通で目新しさはないんだけど、登場人物のセリフや言い回しがきれいで、詩の一節みたいな表現があってね」
そういって実際にそれを読み上げる。こんなに彼女が饒舌に話すのを見たことがないし、饒舌に話すとは思わなかった。
「ね、この表現きれいでしょ？」
暗い体育館の中なのに、どうしてだろう。このとき僕ははっきりと、僕のほうをみて微笑んでいる沢西の顔を見た。
そして、中学3年生の僕はすぐに「きれいだね」とは言えず、返事に詰まってしまう。だってそうだろう、そのときもし僕が「きれいだね」と言えば、それは文の表現だけの事ではなく、そしてそれを認められるほど、当時の僕は大人じゃなかった。
そんな僕の戸惑いは、彼女から饒舌さを奪ってしまう。少し恥ずかしそうにうつむいてしまい、体育館はまた雨の音で満たされる。
「ねぇ、」
それから少したって、沢西の消えそうな声が聞こえた。雨音にかき消されそうなほど小さいが、沈黙を破るには十分で、僕は神経を集中させて彼女の次の言葉を待った。
「進路希望表、もらったでしょ。あれ何か書いた？」
「まだ書いてないけど、普通高校へ行くよ。多分ね」僕は、前を向いたまま答える。
「そっか。高校を卒業した後、何かしたいこととかあるの？」
それはその時、一番聞かれたくないことだった。そんな心の動揺を表に出さず、
「いや。それは高校で見つけるよ」

そんな僕の答えにやっぱり彼女は、そう、とだけ答えた。
これで会話が終わってしまう、そんな感じの答え方だった。そして僕は、ここで会話を終わらせたくない、そう思った。
「白沢は、あいつはもう自分の進む道をみつけてるんだよな」
「神学校へ行くって言ってたね。すごいなぁ、確かに白沢君、あたまいいしね。私は藤川君と同じ、普通高校に進学かな」
その言葉を聞いて僕は、自分の心が少し乱れていることに気がついた。
「なんか進路希望票って、義務教育が終わったらあとは知らないから今のうちから覚悟しておけ、みたいな感じがしていやなんだよね」
そういう僕に、
「うん、わかる。今まで散々校則とか決まりごとで縛り付ける事を教育、って言ってきたのに」
沢西は笑いながらそう答えた。そして
「将来の道を選ぶのに、そんな教育は役に立たないよね。必要なのは、決められる事じゃなくて自分で決める事なんだから」
最後は独り言のようにつぶやいた。
「沢西は本が好きなんだ？」
僕のその問いかけに少し恥ずかしそうにうつむきながら
「うん、小さい頃にお母さんがよく読んでくれたからかな」
小さい声でそう答える。
「藤川君はあんまり本を読まないの？」
「そうだね。夏休みの宿題で読書感想文が出されると仕方なく読むくらいかな」
「そうなんだ。ごめんね、さっきは」
さっきの会話の事を言っているのだろう。だけど元は僕が本のことを聞いたからだ。
「謝ることじゃないよ。でも、そんなに本が好きなら将来はそういう仕事をしてみたいとか思わない？」
「作家になるの？うーん、どうだろう。私にちゃんとしたお話が書

けるかな」
「ちゃんとしたかどうかは分からないけれど、いい話ができそうだと思うな」
その言葉を聞いて沢西は少し驚くような気配があったし、僕自身、自分の言葉に驚いていた。
「ありがとう。…じゃあ、今度書いてみようかな。うん、いつ出来上がるか分からないけれど、お話を書いてみるよ」
もうほとんど完全な闇の中、その時の彼女はきっと笑顔を浮かべていたんだと思う。
そうして体育館は再び沈黙に包まれた。それで僕は気が付く。
「―雨の音がしない？」
立ち上がり体育館を出ると、雲が切れ始めた夜空にはきれいな三日月と、数少ない星が瞬いて見えた。
「雨、あがったね」
沢西が僕のすぐとなりで、空を見上げながらそう言った。

二人で体育館を出て、校門まで歩く。その間、体育館の会話が嘘のように僕たちは無言だった。でもそれは、居心地のいい、安心できる沈黙だった。
「さっきの話だけど」
もうすぐ校門というところで、突然沢西が言う。
「もし、だよ。私が物語を書くとしたら、読んでみたい？」
並んで歩いているため、彼女の顔は見えない。
「そうだな。ちょっと読んでみたいな」
誰か顔見知りが書いた物語を読んだことは無いからね、という僕の言い訳を可笑しそうに、嬉しそうに聞いた後。
「じゃあ、もしいつか物語を書いたら、藤川君に見せるから。約束ね」
「いいよ。もし沢西が物語を作ってきたら絶対に読むよ」
そうして僕たちは校門をくぐり、学校を出る。

「私はこっちだから。藤川君はむこうでしょ」
門の外で立ち止まって、僕たちはようやく向かい合った。沢西の家は僕の家とは正反対にあるから、ここで彼女とは別れることになる。
「帰り、気をつけろよ」
「うん、ありがとう。それじゃあまた明日ね」
そうして僕と沢西は反対方向へ歩き出す。
少し歩いた僕の背中に、
「約束、がんばってみるよ」
かけられたその声に振り返ってみると、彼女は校門から少し離れた所で手を振っていた。
物語を期待しているぞ。その思いを伝えたくて僕も手を振り返す。
その意思が伝わったのか、それともただ手を振ったからか。彼女は僕に背を向けて歩き出した。

きっとこの日、僕と沢西の関係は変わったと思う。
中学校生活で一番の思いでは、この雨の体育館になった。今でも、あの時僕たちの間に流れた心地よい沈黙を時々思い出す。
けれどその日以来、僕たちが進路を決めて受験をして、無事みんな第一志望に合格して。卒業式が終わって、友達と最後のお別れをした僕と、目を赤く腫らせて泣きじゃくる小笠原とそれをなだめながらも涙目になっている沢西と、神学校へ進学を決めて先生たちに囲まれていた白沢と「またいつか、この４人で会おう」と言いながら写真を撮って僕たちが別れても、沢西とは物語の話しをしなかった。だから僕は、あの約束を沢西は忘れてしまったのだと思っていた。
そうして、果たされない約束を抱えたまま中学を卒業し、僕たち４人は別々の道を歩み始める事になった。

１年前には想像すらできなかった、僕たち４人が顔をあわせない毎日は、ごく自然にこうして始まった。それはそれなりに悲しかったけれど、それに憤るほど僕たちは幼くもないし純情でもなかった。

世の中の仕組みだと割り切ってしまった、割り切れる程度には大人になっていた。
それでも、このときの４人で撮った写真を、泣きそうな沢西と、泣いている小笠原と、心から笑顔を見せている白沢と、少し寂しそうに笑っている僕の顔を見るたびに思う。この仲間と出会えたのだから、とてもいい中学生活だったのではないだろうか、と。

０４ー動き始めた計画

ふと、目が覚めた。
といっても部屋で寝ていたわけじゃない。場所は学校、時間は数学。
黒板には簡単な微分方程式が書かれている。
窓の外は薄く曇っている。その中で教室の蛍光灯だけがやけに明るく光っていた。
昼食後の最初の授業だった。
「気をつけろよ、ここはテストに出すからな。じゃあ８５ページの練習問題、２０分後に解いてもらうからな」そういいながら黒板から振り向いた教師が見た景色は、ほとんどの生徒が寝ている惨状だった。
さっきまで寝ていた僕には、黒板に書かれた数式の意味が分からなかった。半分寝ぼけた頭で、その問題をとく意味に付いて考える。
将来僕が生きていく中で、微分ができることは本当に役に立つのだろうか？
きっと役に立つのは将来じゃなくて、もうすぐ行われるテストだ。
そうわかっていても、僕は眠気に勝つことはできなかった。解けない問題を子守唄に、もう一度眠りに身を任せた。

僕は、平均的なレベルの高校へ進学した。そこで普通の成績をとっていれば国立は無理でもそこそこの大学へは進学できるし、一浪する覚悟があれば国立だって狙える。
けれど僕は大学へ行く目的が、大学の先にある就職した自分のビジョンが、自分の夢が、高校２年が始まってからも見つけられないでいた。
幼稚園にいた頃は、そんな事は考えなかった。
小学生の頃は、きっと中学生になれば見つかると考えていた。
中学生の時は、高校に入って見つける、と考えていた。

そして、高校生の今。大学に入れば何とかなる—とは考えられなくなっていた。
毎日が嫌なわけでも、楽しい事がないわけでもない。ただ、将来のイメージがつかめない事には、すでに慣れていた。きっとこのまま、普通のサラリーマンになるのだろう。
中学3年の時に感じた、恐ろしいまでの脅迫観念を僕はいつの間にか飼いならし、緩やかな諦めを抱いて高校生活を送っていた。だけどそれははっきりと意識しているかいないかの違いで、誰でもある程度はそうやって生きているのだと思う。

学校が終わり、放課後になった。カバンに適当な筆記用具を詰めて帰ろうとしたとき
「おい藤川、今日これから暇か？」
背後から声がかかる。
「ああ、暇だけど。なんだ、予定でもあるのか？」
僕は振り返りながら声の主に問いかける。
声の主は一瀬という。僕の高校生活で一番親しい友人だ。雰囲気と言動が面白い男で、僕はよく彼と一緒にいた。二人とも部活はやっておらず、放課後が大抵暇だというのも僕たちが一緒にいる原因でもあった。中学を卒業してから、僕は一度もラケットを握っていない。
「欲しいＣＤがあってな、買いに行くから付き合えよ」
一瀬はすでに支度を終えていて、その口調は人に頼む時のものじゃない。だけど僕は彼のそんな言動に慣れていた。
「ＣＤ？駅前のあのお店か。いいよ、行こうぜ」
そうして僕たちは、放課後のけだるいざわめきが残る教室を抜けて、部活動でにぎわうグランドに背を向けて、学校を後にした。

そのお店は、学校の最寄り駅の駅前にある。本とＣＤを扱うお店で、品揃えはあまりよくないがその立地条件から僕の学校の生徒はよく

出入りしていた。ある意味、僕の学校に寄生しているようなものだった。学校がなくなるとこのお店もなくなるというのが僕たちの間では通説だった。
自動ドアを抜けて店内に入る。本やＣＤのにおいと、うっすらとかかった冷房と、流行の曲が僕たちを出迎えてくれた。スピーカーから流れる男の裏声が、夢を追うことの素晴らしさを語っていた。
壁に貼られた週間ランキングを一瀬と一緒に見る。一瀬は食い入るように、僕は流すように。
「……だめだ、やっぱりトップ２０にもランクインしていない」残念そうに一瀬はそうつぶやいた。
「欲しいＣＤはそんなにマイナーなのか？」僕は正直、音楽に興味がない。流行の曲はむしろ嫌いな部類にはいる。
「あのなぁ、世の中でどれだけ曲がリリースされていると思ってるんだ？トップ２０に入っていなければマイナーなんて考え方はやめたほうがいいぞ」そう言いながら、一瀬はアーティスト別にＣＤが並んでいる棚へ歩いていった。
そうしているうちに店内に流れる歌はサビへと入る。
怖がらないで夢を追いかけよう。信じていればきっと叶う。躓いても諦めるな―。店内が綺麗事で満ちていく。
夢を追いかけたり叶えたり、ましてや諦めるには、夢を持っていなければいけない。けれど僕には、自覚できるような夢が無い。元々持ち得ない者は、どうすればいいのだろうか。その答えを歌っている歌を、僕は未だに知らない。
「駄目だ、この店には置いてない」
がっかりしたように言う一瀬と、店を後にする。外に出ると太陽は傾きかけていた。僕と同じ学校の生徒が駅へと歩いていく。
「仕方ない、立岩まで行こう」どうしても諦めきれない様子の一瀬が口にした場所は、ここから電車で２０分ほどかかる繁華街だった。巨大なショッピングセンターが駅ビルの中に入っており、そこまで行けば大抵の物は手に入る。

「そんなに欲しいのか？別に今日じゃなくて土日でもいいだろう」
駅まで歩きながらそうは言うが、僕は立岩まで行く事に反対していない。この後、特に用事もないからだ。
僕も一瀬も電車通学をしていたから定期を持っていて、券売機には並ばずに直接改札に向かう。
電車に乗り、一瀬はドアのすぐ横にある席に座り、僕はドアの前に立つ。一瀬はどうして座らないんだ？という目をしていたが、口には出さなかった。
動き出した電車の外、夕焼けに照らされた街が目の前に現れては消えていく。
僕は小さい頃から、電車から外の景色を眺めるのが好きだった。だから電車では椅子に座ることよりも立っていることのほうが多かった。その癖が今も抜けず、通学の時も立っている。
外を眺めながら、ふとこの先のことを考える。大学を出て社会人になって、着ているものが制服からスーツに変わり向かう場所が学校から会社に変わり、最初は信じられなかった通勤ラッシュの満員電車にも慣れながらただ歳だけを重ねていくような、そんな生活を何十年も続けるのだろうか。

駅ビルは7階建てで、ＣＤ売り場は5階にあった。フロアが丸ごとＣＤ売り場という圧倒的な規模と物量を誇っていて、そこには他校の生徒やスーツを着た若いサラリーマンなどで混み合っていた。その中に一瀬は目的のＣＤを見つけ出すため飛び込んでいく。僕も最初は売り場にいたが、ここでも流れている曲が耳障りだったから他の階へ移動した。
向かう先はどこでもよかったのだが、気が付くとテレビ売り場に来ていた。暇をつぶすには最適の場所だった。壁一面には大型の液晶テレビがかけられていて、昔テレビアニメで見た秘密基地の司令室を連想させた。壁にかけられた一番大きな画面は、１００インチを超えていて、一体どんな家がこんなスクリーンのようなテレビを必

要としているのか、僕には分からなかった。テレビの前には大勢の人がいて、誰もが画面を注視していた。
そこで僕は違和感を覚えた。足を止める人が多すぎる気がしたのだ。壁にかけられたテレビを見て、その謎は解けた。色々な局を放送しているが、どれもニュースを流している。アナウンサーと、見たこともないようなコメンテーターがスタジオで難しい顔をしていた。
この時間はニュースとバラエティーを足して2で割ったようなワイドショーが中心のはずだ。よく見るとテロップには「緊急！」や「特別構成」という文字が見える。
何か起きたんだ、という事はわかった。一番大きな１００インチ超えのテレビに群がる人とは少し距離を置いた、４５インチ画面の前で立ち止まる。これでも十分大きな画面だ。
「…それでは東京大聖教会の第三特別礼拝堂から中継です」
アナウンサーがそういって画面はスタジオから切り替わり、どこか巨大な建物の中にいるアナウンサーを映し出した。
「はい、こちら第三特別礼拝堂です。もうすぐ大司教様本人の記者会見が行われる時間となります。今日午後1時に突然の記者会見開催を発表されてから、この東京大聖教会の第三特別礼拝堂はご覧ください、このように多くのマスコミが詰め掛けて混雑しています。大司教様本人が直接記者会見を開かれるのは極めて異例な事であり、今回の記者会見は…」
第三特別礼拝堂は一般人は入れない場所で、このとき初めて僕はその中を見た。
石造りで、広さは学校の体育館の2倍以上はあるだろう。正面には巨大な十字架がかけられていて、窓は少なく外からの光を光源として期待することはできなさそうだ。その代わりに天井には電気がつけられていて、やわらかい光が礼拝堂の中を照らしていた。中世の教会と映画館を足したような印象を受けた。
マスコミはその最後列に詰め込まれていた。カメラに向かって話すアナウンサーの後ろでは、他局のアナウンサーが原稿を読み上げる

様子や、その向こうで打ち合わせをしているまた別のアナウンサー、脚立を立ててその上で写真を撮ろうとしている人、それを邪魔だと注意する人の様子までもが写されていた。そんな慌しい様子が、どんな言葉よりもマスコミの困惑具合を伝えていた。
そんなマスコミの前にいて、なおかつ礼拝堂の大半を占めているのは、黒い服を着た神父たちだった。全国から集まってきたのだろう。そして最前列には彼らと向き合う形で、１１人の白服の老人が座っていた。彼らが恐らく司教だろう。彼ら１１人の司教と１人の大司教、１２人が、この国の教会を統べていた。
大司教はこの国の教会組織のトップに立つ人物で、僕が覚えている限り直接記者会見を行うという事はこれまで一度も無かった。そもそもカメラの前に出てくるような人物ではない。その人物が、直接記者会見を行うという。確かにこれはただ事ではないと感じた。
そこで画面は再びスタジオに戻される。アナウンサーとコメンテーターが今回の記者会見の内容を予想していた。隣の３８インチテレビを見たが、他の局でも違う顔ぶれが同じような事をしていた。周囲の人だかりが、また少し大きくなったようだ。

「あ、はい。えー、礼拝堂に大司教様が現れたそうです。それでは、中継です」
アナウンサーとコメンテーターの同じような話の繰り返しとその合間を縫って入れられる執拗なＣＭに嫌気がさした頃、ようやく画面が切り替わった。
そうして、壁一面にかかったテレビが一斉に同じ映像を映し出す。テレビの中で、一人の老人が説教台の前に立っていた。他の司教と、黒服の神父、さらにはその後ろのマスコミからは一段高い位置にいる。この老人が、大司教なのだろう。
教会内のざわめきが収まるのを待って、大司教は話し始めた。
「この国は今、かつて無い危機に見舞われています。
前世紀末頃から不可解な事件が多くなりました。たいした理由も無

く親を殺す子供、子供を殺す親。友達を、後輩を、先生を。さらには通りすがりの他人を。金が欲しいから、いらいらしていたから、人を殺してみたかったから―。
我々はそれを、心の闇と呼びました。そしてその闇は、今もなお増え続け人々を蝕んでいます。
警察は、事件を起こした犯人を逮捕する事はできるでしょう。ですが、彼らが、いいえ彼らだけではありません。今この世を生きる人々が抱えた心の闇を取り除くことはできません。それを行うのは、神の代行者たる我々の役目です。どうすれば人の心から闇を、不安を取り除き、平和で誰もが笑える世界を造れるのか。我々は主に祈り続けました。そして先日、ついに答えを得たのです。
主は申されました。
わが息子たちよ。お前たちの苦しみは私も十分に理解している。だから、私はお前たちに救いの道を示そう。
私は、私の分身を聖女として地上に放った。彼女たちを集め、私の元に返してくれれば、この世界を救える。今の私には彼女たちの力が必要なのだ」
ここで一度、大司教は間をおいた。それは時間にすれば3秒ほどで、スピーチの流れを途切れさせるような物ではなかった。
「私はこれを信じます。
このすさんだ、今のこの国を救える聖女を集めます。」
大司教はこれだけ言うと、説教台を降りた。
そしてこの瞬間、この国の教会が進む方向が決まった。
拍手も、歓声もない。静寂が支配する中、大司教は礼拝堂を出て行く。その後に、１１人の司教が続いた。
カメラはそこでスタジオに戻る。映し出されたアナウンサーも、コメンテーターも驚いた顔をして、次の言葉が見つからない様子だった。
「え、ええ。東京大聖教会の第三特別礼拝堂から中継でした。…この発表を聞いてどう思われますか？」

ここで、テレビの周りに集まった人達もざわめき始める。
「なんだかよくわからない発表だったな」
いつからいたのか。僕の横で一瀬がつぶやいた。
「ああ、そうだな。聖女がどうとかって」
「教会主催のミスコン開催のお知らせにも見えなくないな」
一瀬はそういうが、そんなお気楽な雰囲気ではなかった。
「そういや、お前ＣＤは？」
「ああ、さすが立岩だ。しっかりあったぞ」
そう言って一瀬は、お店のロゴが入ったビニール袋を満足そうに僕に見せる。そうして僕達は駅に向かって歩き出した。
お店を出たとき、
「教会の発表。あれさ、神様が私の元に聖女を返してくれって言ったんだよな？」
と一瀬が聞いてきた。
「大司教はそういっていたよな」
歩きながら軽く答える。その答えを聞いて一瀬は不思議そうに
「聖女を神の元に送るんだろ。それってつまり、殺すって事か？」
と言った。

０５ー白沢の進んだ道

関東総合教会付属第三神学校。
これが白沢の進学した学校の名前だった。神学校は全寮制だ。白沢も中学を卒業してすぐに寮に入った。高校で親元を離れたことに、少し誇らしい気持ちもあった。
入って最初の年はとにかく慣れることに精一杯だった。初めての一人暮らし、新しい友達、初めて習う授業。毎日ついていくだけで必死だった。だが、つらいだけの１年でもなかった。日々の宿題、定期テスト、学園祭…。入学前はどんな事を学ぶのか、校舎の中がどうなっているのか全く分からなかったが、そんな特別なことをやるわけではなかった。校舎も一部を除いて特別立派というわけでもない、普通の学校だった。
部活はやっていないが、たくさんの友達が出来た。２年となった今、彼らは同級生というよりも戦友というほうが近いような絆がある。なぜ白沢は神学科を選んだのか。それは、彼が小学校６年の時の体験が原因だった。
その年、彼の父親が倒れた。

小学６年生だった白沢はその知らせを学校で聞いた。昼前に母親が迎えに来て妹と二人で早退し、３人で病院に駆けつけた。詳しい病名は忘れたが、脳の病気だったらしい。すでに父親は手術室に入っていた。
その日は母親が病院に残り、白沢と妹は母方の祖母に連れられて家に帰った。両親のいない家は初めてではない。だが、両親がいつ帰ってくるかわからない、両親が帰ってこられるか分からない自宅は初めてだった。いつもは狭いと思っていた部屋がやけに広く感じられ、電気の光りが白々しく光り、電気の灯りが届かない部屋の隅や廊下の影は不気味だった。

祖母と妹と白沢で遅い夕食を取って、交代で風呂に入り、後は寝るだけという時。３人がテレビを見るともなく見ている時だった

「ねぇ、お父さん大丈夫なの？」

妹がポツリとつぶやいた。祖母は「大丈夫よ、お医者さんが一生懸命治しているから、大丈夫よ」と妹を抱き頭を撫でながら優しく言った。それで張り詰めていた物が切れたのか、祖母の腕の中から静かな嗚咽が漏れる。きっと大声で泣きたいのだろう、だけどそうすると何かが壊れそうで、声を殺して泣いている。そんな、周りの人までもが辛くなるような泣き方だった。

自分の部屋に戻りベッドに横になっても、白沢はなかなか寝付けなかった。今までは息をするくらい当たり前に、父親と母親がいた。だが、それはもしかしたら今日までなのかもしれない。これから先、自分たちを育ててくれるのは母親だけになるかもしれない。そういう生活を、１２歳の白沢は想像できなかった。

寝返りをうって自分の勉強机の上を見る。鉛筆やボールペンが立っているペンたては、父親が昔買ってくれたものだ。去年は椅子の高さが合わなくなって調節してもらった。

『タクヤも大きくなったな、中学に入って背比べをしたらお父さん負けるかもしれないな』嬉しそうにそう言って笑っていた。だけど、それはもしかしたら叶わないかも知れない。

急に悲しくて、怖くなった。今は父親との思い出ばかりが目に付いてしまう。そんな発想がとても不吉に思えて、もう一度寝返りをして壁の方を向く。そのまま目を閉じて、突然気が付いた。この部屋で一番父親の面影を残しているもの、それは紛れもない自分自身だという事に。自分の体の半分は、父親から貰ったのだから。

父親の手術は成功した。医者の見解では後遺症も残らないだろうという事だった。これはとても運がいい事なのよ、と母親に言われた。白沢もそれを聞いて、自分たちはなんて運がいい家族なんだと思った。だがそれも、最初の数日だけだった。

彼の家庭はごく普通の中流階級、裕福ではないが貧しくもない。幸い保険に入っていたため入院費用で困る事は無かった。だが、保険が助けてくれたのはお金の問題だけだった。
心配して様子を聞きに来る親戚や近所の人たちの出迎え、保険屋との話し合い、見舞いと主治医の先生との打ち合わせ。その全ては母親が行った。
当時小学校6年生だった白沢から見ても、母親は疲れていた。妹もそんな家庭内の雰囲気を感じて、だんだん暗く、笑わなくなっていった。
父親が倒れてから2週間ほどたったある日のこと。学校にいた白沢は職員室に呼び出された。まさか父親の容態が悪くなったのかと思い職員室に駆けつけると、そこにはすでに妹がいた。そのすぐ傍に妹の担任もいる。その場の雰囲気ですぐに分かった。妹が何かしたのだ。
妹の担任が言うにはこういう事だった。休み時間の教室で、妹と友達が口論になった。最初は相手を馬鹿にするだけだったがやがて大声で罵倒するようになり、ついに妹が相手を平手でひっぱたいた、らしい。相手の子は泣き、周囲は騒ぎになった。そこで先生が呼ばれ、とりあえず妹は職員室に連れてこられた。いくら理由を聞いても、どうしてケンカになったのか、どうして手を出したのか、何も答えないという。
妹は活発だったが、今まで友達に手を上げたことは一度もなかった。だから担任の話を聞いただけでは白沢も信じられなかっただろう。だが目の前にいる妹はいつもと様子が違い、思いつめたような顔をしていた。
「とりあえず今お母さんにも来てもらっているから、今日は3人で帰ってもいいと思うんだけどタクヤ君はどうする？」
父親が倒れたことは、当然学校も知っている。それを考慮してこうして言ってくれているという事も、彼にはわかった。
結局、その日は早退する事にした。職員室に駆けつけた母親は、息

を切らして髪は乱れていた。そこで教師とどのような話しをしたのかは覚えていない。だが、何度も謝りながら頭を下げている姿だけはなぜか彼の記憶に残った。
帰り道、母親は白沢が見ても分かるほどストレスを抱えていた。黙って歩くその背中からは疲れと苛立ちが滲み出ていた。そしてそれは妹も同じだった。
このまま家に帰らせちゃ駄目だ。白沢は強く、そう思った。二人は今、自分を抑えられないだろう。そんな状態で家に帰っても、今度は妹と母親がケンカをするだけだ。そんな様子は見たくない。それを止められるのは今ここにいる自分だけだ。だが、どうすればいいのかはわからなかった。
そんな彼の心とは裏腹に、天気は快晴で空には本当に雲ひとつなかった。穏やかな風が街路樹を揺らし、電線に止まった雀が鳴き声をあげる。彼らを残して、世界は平和だった。
神様は、意地悪だ。
突然白沢はそう思った。そしてそれと同時に
「ねぇ、教会へ行こうよ」
前を歩いていた妹と、さらにその前を歩いていた母親は歩みを止めて振り返る。
「……そうね。一度お祈りをしてから帰りましょうか」
母親もこのまま家に帰りたくはなかったのだろう、その考えに賛同してくれた。だが、白沢は神様にお願いをしに行くために教会に行こうと言ったのではない。
―どうして、自分の家族だけこんな目にあわせるのですか？
当時小学6年生だった彼には、今の自分達が世界一不幸だという自信があった。もちろんそれは世界を知らない子供の勝手な思い込みだが、とにかくその時の彼は父親が倒れた事も、妹が笑わなくなった事も、母親が疲れている事も、それでも世界は何事も無く回る事も、全てが気に入らなかった。
―どうして、自分の家族だけこんな目にあわせるのですか？

そんな呪いにも似た疑問を胸に、彼は教会へと向かった。

白沢が分厚い両開きの扉を開けるとそこにいたのは白髪の神父一人だけで、結婚式も葬式もやっておらず、教会は白沢一家の貸切状態だった。

「こんにちは、神父さん」

「おやおやこんにちは。こんな時間にどうしたんだい？」

勤めて明るい声を出してあいさつをする白沢に対して、学校はどうしたんだいというニュアンスの返事をする神父。その答えの代わりに後ろから母親と妹も現れる。

「どうもこれは、ただのさぼり少年ではなさそうですね」

神父は微笑を絶やさないまま、母親と会釈を交わす。

「あの、お祈りだけして帰ります」母親はそういって、最前列の椅子に3人が並んで座る。

白沢も椅子に座り、両手を組んで目を閉じる。

―どうして、自分の家族だけこんな目にあわせるのですか？

今までにないほど真剣に、神様に向かって『お祈り』をした。必死だった。傍から見ても分かるほど、両手を固く組み目をぎゅっとつぶりながら、心の底から疑問をぶつける。

「さぁ、帰るわよ」

時間にすれば3分ほどだろうか。母親の声に目を開ける。白沢の質問に神様は答えてくれず、自分の腕に聖痕のようなものでも浮き出ていないかと期待したが、それもなかった。母親と妹はさっきよりは落ち着いた顔をしているが、家に帰ってどうなるかはわからない。そのとき白沢は理解した。神様は存在しないのだ。あるのは教会（たてもの）と神父（にんげん）だけ。その事実に愕然としている白沢と、それに気が付く余裕のない親と妹。

「もしよろしければ」帰ろうと立ち上がった親子3人に神父が話しかけてきた。

「時間も丁度いいことですし、お昼をご一緒しませんか？」

「でも、ご迷惑じゃ…」遠慮する母親に神父は笑って
「ここは教会ですよ。迷惑なんてことはありません」
それに、この時間の帰宅は予定外のはずだ。家に帰ってもすぐに3人分の食事ができるとは思えない。
「そうだよ、お母さん。僕教会で食べてみたい」
今は母親に余計な家事をやらせたくない。
そして母親も余計な家事をやりたくはなかったのだろう。
「それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」
その返事に神父はうれしそうにうなずいて、
「それでは、こちらへどうぞ」
そういって礼拝堂から奥へ続く扉を開けた。毎週日曜にはお祈りに来ていたが、礼拝堂の奥に入るのは初めてだった。それは妹も同じで、好奇心丸出しの顔をしている。そしてきっと自分も同じ顔をしているだろうと思うと、すこしおかしくなった。
案内された場所は簡単な食堂だった。白を基調とした清潔で落ち着いた印象の部屋で部屋の一面は大きなガラス戸になっており、外には芝生の庭と家庭菜園が見えた。カウンターキッチンの奥では誰かが料理をしている気配がする。木製の大きな机が部屋の中央に置いてあり、6人程度ならゆったりと座れそうだった。
「おおい、お客さんだよ」
神父はそういいながらカウンターキッチンの奥へ歩いていく。
「まぁまぁ、本当だ。いらっしゃい」
そうして現れたのは、神父と同じくらい人の良さそうなおばあさんだった。
「すいません、突然お邪魔して…」母親が挨拶をして、兄妹もそれに習った。
「いいえ、いいのよ。いつもだと主人と二人きりでね。たまにはにぎやかに食べたいと思ってたの」
本当にうれしそうに笑いながら、おばあさんはキッチンへと戻っていく。それと入れ替わるように神父が戻ってきて、白沢達に席を勧

めながら言う。
「私の家内です。私が言うのもなんですが、なかなか料理の腕はいいんですよ」
その言葉はすぐに証明された。
昼食のメニューは、シーザーサラダ、トマトと鮭のスパゲッティー、パンプキンスープで、味はすばらしいものだった。神父が自慢したくなるのも分かる。
「お口に合うといいんですけど」
と言ったおばあさんに対し、
「とってもおいしいです。これならお店でも開けるんじゃないですか？」
白沢の母親は答える。本当においしそうに、うれしそうに食べるその顔を見れば、お世辞じゃない事は一目瞭然だ。
妹もニコニコ顔で、「おいしー」と言いながらスパゲッティーを頬張っている。
母親と妹のこんな顔は久しぶりに見た。父親が倒れる前はこんな光景はいつも家で見られたはずなのに、最近の食卓に笑顔は無い。そう思うと悲しかったし、悔しかった。
食事を終えて、兄妹はおばあさんに外で遊びましょうと誘われた。庭はあまり広いとはいえないが、それでも子供と老人が遊ぶには十分だった。芝は綺麗に揃えられ、所々に花が顔を出している。隅のほうには家庭菜園があり、トマトやハーブが生えていた。
穏やかな日差しの中ではしゃぐ子供の様子を、食堂から母親は見ていた。最近子供達のあんな顔を見ていない。そしてその原因はきっと自分にある。
食後の紅茶を飲みながらそんな事を考えていると
「元気なお子さんですね」
神父も紅茶を飲みながらそう話してきた。
「ええ、元気だけが取り得で…」
元気だけが取り得だが、最近その元気すらなくなってきている。

「私たちにも息子が一人いまして。もう家を出て、今はひとり暮らしをしています」
最近じゃろくに連絡もよこさないのですが、といって笑う。
「お二人とも小学生のようですが。失礼ですが学校は？」
「ええ、実は…」
誰かに話すだけで、悩みというのは楽になる事もある。さらに相手は神父で、悩みを打ち明けるのには最適だった。学校で妹がケンカをしたこと、そして最近の家の事情を話す。
「本当は元気で友達思いのいい子なんですよ。でも最近父親が入院して、私も正直精一杯で。子供たちにきつく当たってしまうんです。分かってはいるんです、私は…あんまりいい母親じゃないんだろうって」
そうですか、と神父は微笑みながら話を聞いている。
外では3人が何か話をしている。きっと子供たちが学校の事を話しているのだろう。時々声を上げて笑う様子が見えた。
「元気で、とても優しいお子さんですね」
そういう神父の口調は、静かだが確信している響きを持っていた。
「きっとご両親も愛情たっぷりと育ててこられたのでしょう。歪んだところが無い」
「いえ、そんな…」
面と向かって言われると照れる。そんな謙遜する母親に謙遜させないように神父は言葉を続ける。
「子供は親を見て育ちます。私にも経験があるのですが、驚くほど子供というのは親をみているんです。だからあなたが大変なのは子供たちも分かっていますよ。特にあのお兄ちゃん。父親がいない今、自分が頼りにならなければと考えている。もっとも、本人にそこまでの自覚はないようですが」
そういって神父は柔らかな視線を外へ向ける。母親もそれにつられて外を見る。
3人は花壇でしゃがみ込んでいる。おばあさんに花の名前を教えて

もらっているようだ。
「その子を育てたあなたは、立派な母親です。それは、誇れることですよ」
外を、自分の子供達を見る。そこには妹に笑いかけている兄がいた。学校でケンカをしたのは妹だけだというのに、なぜ兄もついてきたのか。
帰り道の途中、教会へ行こうと言い出したのは誰か。
ここで昼食を食べたいと引き止めたのは誰だったか。
大変で苦しいのは、自分だけじゃない。子供達もそれを分かっている。自分ひとりで家庭を支えていかなければ、と力んでいたが、もう子供達は支えられるだけの子供じゃない。今気が付いた、あの子達だって必死に支えて頑張っているじゃないか。
この時、母親の中で何かが変わった。それは具体的に言葉にはできない類の物だ。
子供を見ていた視界が霞み、自分が涙ぐんでいる事に気がつく。さすがに恥ずかしくて、正面を向けない。
それでも神父は微笑みながら紅茶を飲んでいた。

日も傾き始めた頃、庭で遊んでいる兄妹を夕方迎えに来た母親は、来たときとは全く違った、明るい顔になっていた。
それは当時小学6年生の白沢にとってはまさに奇跡だった。父親が入院してからどこか張り詰めていた母親が、教会で数時間過ごしただけで昔の優しい母親に戻っている。
神父は帰り際に
「またいつでも来なさい。おいしい料理をご馳走してあげるよ」
と言ってくれた。
この日、白沢は神を疑った。なぜ何も悪い事をしていない父親を、そして僕達家族をこんな目に合わせるのですか、という問いに答えが与えられなかったからだ。そして今日、彼は神様よりも頼りになる人を見つけた。神様はいないけれど、神様の代わりに奇跡を起こ

せる人ならいる。
その時に思った。もし将来、自分も神父になれば、今日のような奇跡を起こすことができるのかもしれない。
父親はその後後遺症もなく退院した。相変わらず裕福ではないが、家族４人そろった生活が帰ってきた事が、彼にはうれしかった。

その日の最後の神学史を終えて、白沢は同級生と教室に残って雑談をしていた。学校柄、話の内容はどうしても聖女探しの事になる。やっぱり聖女と言うからには見るからに聖女な―平たく言えば美人な―人が選ばれるのだろうか、という話をしているとピンポンパンポンというおなじみのチャイムの後
「２年Ａ組の白沢君、２年Ａ組の白沢君。至急職員室まで来てください」と放送が流れた。
しばらく白沢は自分の事だとは気づかなかった。呼び出される心当たりが全くなかったからだ。彼の周りは騒然となる。この学校で呼び出しを受けることは、ちょっとした事件だった。
「お前何やったんだ？」
「事後報告しろよ」
「大人しい顔してやるときはやるんだねぇ」
友達の中ではすでに白沢は問題を起こしたことに決定しているらしい。そんなありがたい見送りの言葉を受けながら、彼は職員室へ向かった。

担任は職員室の扉の前で待っていた。
「おう、白沢。一緒に来い」
白沢を見るとそう言って、担任は歩き出す。状況は飲み込めないが従うしかない。
そして着いた場所は、第一応接室だった。
この応接室は隣の校長室とつながっていて、来客がＶＩＰの時にの

み使用される部屋だ。当然ほとんどの生徒は入る事が無い。ごく稀に入る生徒もいるのだが、彼らが言うには
「高級ホテルのロビーだ」
「一流企業の社長室の空気だった」
「学校じゃない」
など様々で、どうも学校の設備とは大きくかけ離れているらしい。生徒の間ではユートピアとも呼ばれていた。突然の呼び出しに加え、そこにまさか自分が入る事になるとは、白沢は想像もしていなかった。呆然とする彼の目の前にある扉も普通ではない。分厚い木でできている観音開きの扉で、表には細かい彫刻が施されていて、大きさは教室の戸の1．5倍はある。映画の中でしか見た事が無いような代物だ。他の部屋に比べて、この第一応接室だけ強烈な違和感をかもし出している。
担任がノックし、
「2年A組の白沢を連れてきました」
その声は緊張していた。一時の間をおいて、扉の中から
「ああ、入りたまえ」
と返事があった。
失礼します、と二人でにはいる。
そして分かった。この部屋に関する噂は全て本当だ。
床は大理石で、綺麗に磨き上げられていた。部屋の広さは教室より若干狭いくらいだ。壁際には高そうな棚が置いてあり、中には様々なトロフィーや賞状が並べられている。全て優勝のもので、この部屋に飾るのに2位以下のものは不要、そういっているようだ。部屋の中央にはゆったりと8人座れる机があり、両側にソファーが置いてある。黒い革はおそらく本皮だろう。家具には詳しくない白沢が見ても、高そうな雰囲気は感じられた。
そこに、4人の男が向かい合う形で座っていた。入り口に背を向ける形で座っているのは校長と教頭だった。彼らを背後から見たことはなかったので、すぐには誰だか分からなかった。

そんな学校のトップと向かい合って、二人の男が座っていた。二人とも黒のスーツを着ているが、二人の共通点はそれだけだった。右側の男は長めの髪を綺麗に整えており、スーツの上から白衣を着ればそのままどこかの研究員になりそうな雰囲気だ。左側の男は髪がない。その頭の位置も、右側の男よりも高い。おそらく身長は１９０センチ程度になるだろう。室内なのにサングラスをしていて無表情だった。

妙に特徴的な彼らだが、この部屋を使うところを見ると教会の関係者だろう。それも、かなり重要な人物だ。

「君が白沢君かい？」右側の男からそう声をかけられ、

「はい、そうです」反射的に答えていた。男の声は柔らかくて不思議な印象を受ける。

質問した男は満足そうに頷き、では、と断った後。

「すいませんが校長先生、我々は白沢君と話しがしたいのですが」

それはとても穏やかな言い方だった。

「わかりました。我々は席を外しましょう」

そういって校長は教頭と担任に目配せをし、校長室へ抜ける扉へと消えていき、部屋には謎の男たちと白沢だけが残った。

「さて、いつまでも立っているのも疲れるだろう。そこに座りなさい」

そう言って、ついさっきまで校長が座っていたソファーを薦められ無言で座ると、そのなんともいえない心地よさに驚く。今までこの部屋に入った生徒の中でソファーを独占したのは白沢が最初だろう。生まれて初めて座る高級ソファーの感覚に驚きながら、改めてこの男たちの顔を正面からみる。見れば見るほど、教会関係者には見えない。その風貌だけでなく、漂わせている雰囲気がつかめなかった。サラリーマン、ではなさそうで、かといってヤクザというわけでもない。教師、弁護士、神父…。今まで会ったことのあるどんな大人とも雰囲気が違っていた。

「さて、自己紹介をしておこう。私は富谷、大聖教会総務部第三課

に所属している」
右側の男―富谷はそういった。やはりというか、意外というか、とにかく教会関係者だった。
「…高部だ」
左側の男―高部は短く自己紹介する。見た目と同じく、あまり口数が多いタイプではないらしい。
「高部も私と同じ第三課にいる。仕事仲間だよ」
富谷が、情報の少ない自己紹介をフォローする。それはとても自然な流れで、この二人の間に流れる信頼関係の一端を垣間見た気がした。
「さて、今日は突然すまないね。君はなぜ自分がここに呼ばれたのか分からないだろう？」
という富谷の問いかけに
「はい、まったく分かりません」正直にそう答える。
「実は君にお願いがあるんだ」
富谷がそう言った時、黙って聞いていた高部が顔を上げて校長室へと続く扉を見る。その扉も木製で、表面には神の彫刻が彫られていた。何だ、と白沢が思った時、扉がノックされる。どうぞという富谷の言葉に続いて、扉の向こうから校長が現れた。手にはお盆があり、その上にはコップが3つ並んでいる。
「どうぞ、コーヒーです」
そういってテーブルに並べていく。何より白沢が驚いたのは、校長自らがコップを並べるという事だ。この部屋ではこれが普通なのか、それとも目の前の2人が特別な人なのか。
校長が部屋を出て行き、高部が視線を白沢に戻してから、富谷は再び話し始める。
「今我々は全国から聖女を探している。今の日本を救うための大きな、大切な計画だ。ところで白沢君は、この計画についてどこまで知っているかな？」
2年とはいえ、白沢だって神学校の生徒だ。この計画への関心は高

く、ニュースや新聞もよく読んでいる。彼が知っている、この計画―通称『聖女計画』の概要は、次のようなものだった。

聖女の可能性がある日本にいる１６～２５歳までの女の人は自主的に、全国の教会で検査を受ける。そしてその情報を元に、聖女か否か最終的な確認が行われる。そこで聖女と認められた者は東京大聖教会の地下で、７月の第３日曜日から眠ってもらう―コールドスリープに就く。もし聖女と分かったときは、眠りに就く１週間前に本人、そして家族に告知されるという事だった。

しかし、何人選ばれるのか、いつ目覚めるのか、選ばれる基準は何なのか―。そういった疑問には、教会は一切答えなかった。

一通りの概要を説明し終えた白沢に

「大体正解だよ。なかなか勉強しているようだね」

富谷は言うが、この程度ならば白沢達生徒の間では一般常識だ。

「だが、１つだけ間違いがある。聖女様本人及び家族の告知は眠る一週間前、７月の第２日曜日、そういう事になっているが、実は違うんだ。告知は、実はもうすでに行われている」

その言葉は白沢にとって衝撃だった。告知が行われている事が、ではない。教会が世間に、民衆に対し嘘をついているという事実が、である。

「どうしてそんな事をするんです？」

嘘をつかない。誠実で清潔。それが教会のはずだ。

「我々の間でも議論を呼んだんだ。順序立てて説明していこう。まず、どうしてこんな早い時期に告知をするか。それは、聖女様たちはこれからいつまで続くか分からない眠りに着かれる。だからせめてそれまでの時間は、家族や大切な人と過ごして欲しいという事だよ。

そしてどうしてそれを世間に公表しないか。これは、聖女様を狙う悪しき者がいないとも限らないからだ。聖女様達の安全のためでも

あるんだよ」
そこで富谷は話を区切りコーヒーに口をつける。釣られて白沢もコーヒーに手を伸ばした。香りが、缶コーヒーやインスタントとはまるで違う。
「だが、それは同時に問題も引き起こす。告知した先で情報がどこからか漏れて、聖女様の身に危険が及ぶ可能性があるんだ。もちろん聖女様達とその家族にも他言しないようにお願いするが、それでも人の口に戸は立てられないからね」
言いたい事は分かる。だが、ここまで聞いてもどうして自分が今日ここに呼ばれたのか分からない。
「その、聖女と私にどういう関係があるんですか？」
そこで、富谷は白沢の目を見つめて
「君に、ある聖女様を守って欲しい」
そう言った。今まで聖女の話をしていたのに、一瞬白沢には聖女が何を意味するのか分からなかった。そして理解できたときには、反射的に口を開いていた。
「無理ですよ、俺、誰かの護衛とかやった事ないですし」
つい慌てて、一人称が俺になってしまう。だがそんな様子に富谷はすこし嬉しそうだった。
「でも今回は警備員を派遣するわけにもいかないんだ。そんな事をしたらこっちから聖女様ですと宣伝するようなものだからね。彼女達に年代の近い、親しい者にしか頼めないんだよ」
そこで気がついた。富谷は今、親しい者にしか頼めないと言った。
「……その聖女は、俺の知り合いなんですか」
どうしてだろう、そう言った時に白沢の脳裏に一人の少女の姿が浮かび上がる。富谷はそんな白沢の理解力の高さを褒めた後、
「正解だ。君に守って欲しい聖女様の名前は―」

０６－２年振りの再会

「この間の数学のノートあるか？」
僕はそう一瀬に声をかけた。前回の数学の授業を寝て過ごしたため、その日の分のノートが抜けていたからだ。
「あるけど…。そうか、前の授業、お前は寝ていたからな」
そういう一瀬は、授業中は絶対に寝ない。だからノートの補完率は１００％で、テスト前に彼の株は急上昇する。当然、成績もなかなかいい。
「そうなんだ、だからその時のノートを見せて欲しいんだけど」
そういう僕のお願いを、
「仕方ないやつだな、ノート貸してやってもいいよ」
好青年の笑みを浮かべながら、一瀬は聞き入れた。だけどそれで安心するほど、僕は彼との付き合いが浅いわけじゃない。だから
「但し、一つ条件がある」
彼が笑顔を浮かべたままそう告げても、驚かなかった。
「分かってるって。その条件ってなんだ？」
「この前、立岩まで行ってＣＤ買っただろ？あれ２枚目のアルバムでさ。今はもう３枚目が発売されているんだ」
この前、というのは、僕が数学のノートを取らなかった日で、立岩のテレビ売り場で大司教の記者会見を見た日だ。あの日、壁のテレビはすべて同じ老人の顔を映していた。大小さまざまな、だけどすべて同じ顔で一杯になった壁は、逆に自分が見られているような印象を受けた。
「…それで、どうすればいいんだ？」
「今月、もう財布がヤバイんだよ。だから、藤川が買ってきてくれ。大丈夫、来月になれば金は払うよ。数学のノートは、３枚目のアルバムと交換だ」
「…でも、このあたりだと売っていないんだろ？」

「大丈夫、立岩なら売っている。先週確認した」
「今すぐ買ってこいって言うのか！？」テスト前の貴重な時期に？と言葉の端ににじませる。だがそれに気がついても、一瀬は態度を変えない。
「俺は別にいつでもかまわないよ。だけどお前はなるべく早いほうがいいんじゃないか？」
それが彼の強さだった。

僕は、ＣＤと一瀬のノートが入ったカバンを持って、立岩の駅ビルの中を歩いていた。今日中にＣＤを買うからノートを先に貸してくれ、とお願いして一瀬から目当てのノートは借りてきていた。決して一瀬の言いなりになったわけじゃない。僕は自分の為に最善を尽くしただけだ。
ＣＤを買い、後は帰るだけになって、足は自然とテレビ売り場へと向かっていた。
ここで教会の発表を聞いてから１週間以上が経とうとしている。世間は教会の行いに賛同的で、ニュースでは教会へ行くことを推奨し、最近ではテレビＣＭまで流れている。
でも今の僕の関心事は目前のテストで、世間で騒がれているほどこの聖女計画に関心は無かった。選ばれるのは１０人程度だろうし、それなら僕の知り合いが選ばれる可能性は考えるだけ無駄だと思っていた。自分の知らない所で、知らない人が選ばれて眠りにつこうが、僕には関係ないと思っていた。
しばらくテレビを見てから、僕はテストを思い出す。立岩のテレビ売り場で教会のしている事を考える時間があれば、それは勉強にまわすべきだろう。そうして駅に向けて歩き出そうとした時。
「藤川、君？」
後ろから僕を呼ぶ女の声が聞こえた。
振り返ると、一人の女子高生が立っていた。きている制服は僕の高校の物ではない。髪は茶色のセミロング。そして相手の顔。この顔

には見覚えがあった。
「…もしかして、小笠原か？」
中学時代。同じバドミントン部だった子の名前をあげる。

「久しぶり、卒業してから会うのは初めてだな」
場所はやはり立岩の駅ビルの中にあるファーストフード店。テレビ売り場で立ち話をして別れるのかと思ったのだけど、
「うわーすごい久しぶり、元気だった？卒業後初じゃない？顔も変わらないねぇ。すぐに藤川ってわかったよ。そうだ、駅の方にお店あるからそっちに行こうよ」
という彼女の誘いを断れなかった。ノートを写す時間が無ければコピーすればいい、と僕は僕に言い訳をして今こうしてお店でポテトをかじっている。
「でも藤沢、全然変わってないよね」小笠原はフフっと笑いながら言った。
「まだ卒業して2年だぞ、そんなすぐには変われないって」それにお前の方こそ変わってないじゃないか、と言葉を続けようとしたけど、それはできなかった。まるで僕の言葉を遮るように
「でも、ほんの数日で、何もかもが変わる事もあるんだから」
そう言った時だけ、小笠原の顔から笑顔が消えた。が、それも一瞬。すぐに彼女は話を戻す。「1組の岡島覚えてる？あの子なんてすごいんだから。高校デビューって言うの？もう中学時代の面影はないよ」と、中学時代の知り合いの話を始めた。
僕は高校に進学してから、ほとんど中学の友達と連絡を取っていなかった。だから彼女が話す事は全て初耳で、その名前を聞くたびに少しずつ中学の記憶がよみがえっていくのを感じた。
しばらく彼女と話をしたが、彼女の話しはまだ終わらない。まさか小笠原は中学時代の友達の近況報告をしたくて僕を誘ったのだろうか、と疑問がわき始める。そして小笠原の説明がひと段落したタイミングで

「すごいな、俺はもう中学の時の友達と連絡取ってないからさ、全然知らない事ばっかりだったな。だけど小笠原、その話しをするのに俺をここまで誘ったのか？」
一瞬、小笠原の顔が引きつる。それは、泣き笑いのような顔だった。でもやっぱりそれも一瞬で、大げさにやれやれと言った。
「藤川って時々鋭いんだよね」
「そうか？俺は全然自覚ないんだけど」
「そうだよ。まぁ自覚がないところが藤川らしいんだけど」
そこで少し言葉を切った。このとき僕は、やっぱり小笠原は僕に言いたかった事があって、それは決して知り合いの近況報告なんかじゃないことを感じ取った。
そして、小笠原は
「サユリ、沢西サユリさん、覚えてる？」
と言った。
その一言で、彼女の記憶があふれ出す。部活でのたわいもない会話、小笠原達とやったダブルスの試合、そして放課後の約束。
突然あふれ出した記憶に僕自身驚きながら、覚えてる、と何とか返事をする。そして、それがどうしたのだ、とも。
「実はサユリ、聖女になるんだって」
まるでなんでもないことのように小笠原が言ったその言葉の意味を、すぐに理解できなかった。
「聖女に、なる？」
「そう、聖女。今教会が集めているでしょ。この世を救うために眠りに就く、選ばれた人」
「…でも誰が聖女になるかなんて分からないんじゃないのか？」
「世間ではそういう事になってるけど、本人とその家族には教えられるみたい。サユリとは幼馴染で中学卒業してからも時々会ってるんだよ。それでこの間サユリ言ってたんだ、『私、聖女みたい』って」
沢西が聖女だという話は、とてもすぐには信じられなかった。つい

さっき自分の知り合いが聖女になる可能性はものすごく低いと考えたばかりなのに、今こうして知り合いが聖女になろうとしている。
「なぁ、聖女ってあの聖女だよな？」
「この国の教会が集めている、神様が地上に遣わした御身の分身。彼女達が眠りにつくことでこの国は救われる、その聖女だよ」
そうして、小笠原は自分のジュースを一口飲んで
「サユリ、はこの国を救う天使だったんだね」
静かに、笑顔で、そう言った。その小笠原の一言が、とても僕にはおぞましいものに聞こえた。そして同時に気がついた。僕はこの計画が、嫌いだ。
もし、聖女が選定され眠りについて、それでも世間では理解に苦しむ事件が増えていったら、結局この国は救われなかったということになったら、彼女たちの失われた年月はどうなるのだろう。自分たちの犠牲が無駄だと知ったときの彼女たちの無念は、怒りは、そして失われた時間はどうなるのだろうか。
「それで、今日の報告の本命はそれか？」
心の中の混乱が納まらないまま口を開いたから、言い方がきつくなってしまう。小笠原はそれに少し驚いたような、むっとしたような表情を浮かべながら「そんなわけないでしょう」と言って
「私がそれを聞いた日、サユリから頼まれた事があって」
カバンからラッピングされた袋を取り出す。プレゼントが入っているようなカラフルな袋で、表面にはきれいな字で僕の名前が書いてあった。手触りで中に入っている物の大きさや固さを調べるけど、なんだか分からない。そんなに大きくない、ちょうど人の指と同じくらいで、固い。
「これ何？」
「私に聞いたって分からないわよ。中身見たわけじゃないんだし」
小笠原は怒ったように言って、それから急にカバンを手に席を立った。どうしたんだろう、と思う間もなく
「じゃあ、渡したからね」それだけ言って、彼女は足早に店を出て

行った。
残されたのは、二人の食べかけのポテトと、ラッピングされた包みと、混乱した僕だけだった。

07 ― 果たされた約束

小笠原から受け取った袋には、USBメモリーが入っていた。
自宅で夕食をとった後、僕は自分の部屋にあるパソコンにメモリーを差し込む。少し間があって、パソコンは沢西のメモリーを認識した。
中には、『1』から『4』と、『最初に読んで下さい』という5つの文章ファイルが入っていた。それが何なのか、ファイルを開く前から、2年前から僕は知っていた。やっぱり沢西はあの約束を覚えていた。僕は少しずつ緊張していった。それは、彼女が約束を破るような人ではないとわかったせいもあるけど、それよりも2年越しに再開する彼女が何を言うのか、それが気になったからだ。
緊張する指で『最初に読んで下さい』と書かれたファイルを開いた。

お久しぶりです。中学校で同じバドミントン部だった沢西サユリです。私の事覚えていますか？藤川君と特に仲がよかった訳じゃないから、忘れられていないか心配です。
私はちゃんと覚えています。放課後の体育館で、私と藤川君と、小笠原さんと白沢君で過ごしたあの時間。夏の蒸し暑い練習も、冬の寒い片付けも、みんなでやった試合も、壁にもたれながらしたおしゃべりも。特別な事は無くても、あの時流れていた時間は、私の中学生活の大切な思い出です。
でも、一番の思いでは、雨の体育館で藤川君と交わした約束です。私がいつかお話しを書いたら、最初に読んでくれると藤川君は言いました。もし私の事は覚えていたとしても、この約束のことは忘れていると思います。でも、私にはとても大切な約束でした。
卒業してから2年が経って、ようやく私はお話を書くことができました。本当はもっと手直しをしたかったのですが、時間が無いのでこのまま渡します。

自分で読み返しても、ひどい文章だと思います。表現も未熟だし、とても面白いとは呼べないものかもしれません。
でも、本気で書きました。だからぜひ最後まで読んで下さい。

それで『最初に読んで下さい』というファイルは終わっていた。高校に進んだ彼女を僕は知らないけれど、それでも中学の時の印象そのままに真面目な、彼女らしい文章だった。
「2年ぶりの同級生に宛てたのなら、もう少しくだけた文でもいいのに」つい、独り言を言ってしまう。このときの僕は、はっきりと自分が緊張しているとわかった。マウスを持つ手は汗をかいていたし、心臓の鼓動がはっきりと聞こえた。
そのまま僕は『1』と書かれたファイルを開く。2年越しに、約束が果たされようとしていた。

画面の中で紡がれる物語を読みながら僕は、2年という時間を感じていた。まだ20年も生きていない僕には、2年という年月はとても長く感じられ、その年月がそのまま僕に覆いかぶさるような錯覚を覚えた。沢西はどういう思いで2年間過ごしていたのだろうか。内容はそれほど長い物語ではなく、2時間もしないうちに僕は『4』を読み終える事ができた。そして、物語の最後にさらに文章が続いていることに気がつく。

どうでしたか？
自分で読み返してみても未熟で恥ずかしいです。この物語を完成させて渡せないのは、本当に残念です。
でも、私には時間がありません。
藤川君もいま教会が全国で行っている聖女探しを知っているでしょう。この国の女の人は、みんな教会で検査を受けているはずです。
私も受けてきました。そして最近、教会から連絡がありました。

私は、聖女みたいです。
最初は冗談だと思いました。何かのいたずらだと思いました。だって聖女ですよ？この国を救う聖女が、私のような何の取柄もない高校生のはずがないと思ってました。
でも、どうやら本当みたいです。連絡のあった次の日、教会の人が家まで来て教えてくれました。もうすぐ私は他の選ばれた女の子達と眠りに付きます。だからこのお話を仕上げる時間が、私にはありません。完成させずに渡すことになってしまい残念ですが、でもこれはいい機会だったとおもいます。
こんな事でもない限り、私は物語を藤川君に見せるなんて事はできなかったと思うからです。私、追い詰められないと動けないタイプなんです。だから、教会の聖女計画は、私が藤川君に物語を見せるためにおきたと考えるのは傲慢でしょうか。
このお話の感想は、今度会えた時に教えてください。

沢西自身が感じているように、物語の内容ははっきり言って平凡だった。文章は稚拙で、言い回しも下手。漢字の間違いも2つほど見つけた。もし買った本にこのレベルの物語が書いてあったら、間違いなく怒りと後悔をする、そういうレベルだった。
でも、全ての文章を読み終わっても僕の緊張は解けなかった。大きく深呼吸をして、ベッドに倒れこむ。今まで文章を読んでこんなに疲れたことはなかった。
そして、唐突に僕は、デジタルデータの冷たさを理解した。これがもし手書きの文章だったら、文字のブレや筆圧の変化、もしかしたら落ちた涙の跡さえ残っているかもしれない。だがデジタル信号に変換されたこの文章からは、そういった彼女の痕跡は何も感じられない。あるのは文字の羅列だけだ。彼女が泣きながら、嗚咽をこらえてこの文章を作ったとしても、残るのは打ち込んだ結果だけ。まるで彼女がどんな様子でこの文章を作ったのか、お前は知る必要が

無いといわれている気がした。
もしかしたら、そんな様子を見せたくなくてデータでの受け渡しを選んだのかもしれない。そう思った。

そうして仰向けに寝転んで天井を見上げながら、中学時代のいろいろな事を思い出す。部活中の沢西の様子。雨の体育館。雨上がりの約束。
そうして僕は、いつの間にか眠りに付いていた。

08 ― 聖女と白沢

関東総合教会付属第三神学校は全寮制だから、生徒が実家に帰れるのはお盆と正月だけだ。それを揶揄して「サラリーマン学校」などと呼ばれる事もある。
白沢は富谷から
「彼女の家は君の家の近くだから、君にはこれから家から通学してもらう。私たちが家まで送り迎えをするし、そのあと彼女と会うかどうかは君の自由だ。私たちに報告する義務も無いよ」
と言われた。その適当を通り越してズサンとも言える管理体制に疑問を抱きつつ、白沢は高部の運転する国産高級車で、久しぶりの我が家へと帰ってきた。
突然帰ってきた白沢に母親はとても驚いていた。当然だろう、全寮制の学校から休み以外で突然息子が帰ってくる理由はあまりいい事ではない。だから白沢は親より先に口を開く。
「別に退学とか学校が嫌になった訳じゃないよ。むこうの生活は順調だから」
「そう。あなたの事だから大丈夫だろうと思ってるけど。でもどうしたの、突然？」
「中学時代の同級生が聖女だから、護衛をしに帰ってきたんだ」など言えるはずもない。
「…秘密の学校行事、かな。これからしばらくは家から通学する事になるから」
そう告げられた母親は少しあきれた顔をして「何それ、もうちょっと早く連絡とかできないの？まったく…」と言う。
口ではそういっているものの、顔はうれしそうだ。最後に母親と顔をあわせた時期から逆算すると、約半年振りの再会という事になる。
今ここに自分と母親の笑顔があるのは間違いなく教会のおかげだと、白沢は強く思った。

自分の部屋へと向かう。部屋は定期的に掃除されているのだろう、ホコリや空気の澱みも無い。もしかしたら中学時代に自分が使っていた頃より綺麗になっているかもしれない。
少し苦笑しながらも親に感謝し、椅子に座る。時刻は午後６時。今からに会いに行くにはちょっと時間が遅すぎる。彼女を訪ねるのは明日にしようと決めて、夕食の準備をしている母親に、今日は自分も夕食を食べる旨を伝えた。それを聞いて、母親はまた嬉しそうに文句を言う。
その日の夕食は久しぶりに家族全員そろってのものだった。父親も妹も白沢の顔を見た瞬間、
「どうした、まさか退学したのか！？」
「うわ、なんで家にいるの！まさか退学！？」
などと失礼なことを言ったが、やはり母親同様その顔はうれしそうだった。普段離れて生活しているせいか、白沢にはこうした家族との会話がとても大切なものに思える。そして同時に、こうして今４人で笑いあえる事が、実は奇跡だという事を強く実感した。
富谷達から選ばれて、自分もあの神父に一歩近づけた。その思いは白沢に自信と力を漲らせる。聖女との再会を明日に控え、白沢は強く思った。自分に与えられたこの仕事を、何があっても完遂させると。

翌日、彼はいつもより１時間半早く起きる。寮では部屋を出てから教室の席に座るまで１０分あれば間に合うのだが、自宅からだとそうはいかない。学校までは富谷たちが送ってくれので、白沢は彼らが迎えに来るまでに準備を整えなければならなかった。
慣れない時間に起きて眠い目をこすりながら台所へ行くと、母親がすでに朝食を作っていた。リズミカルにまな板を叩く音に混じり、ラジオは今日一日の天気が晴天である事を伝えている。
野菜を刻む音、炊飯器から立ち上る煙、外で鳴く雀、ラジオから聞こえるいつものアナウンサーの声、鼻をくすぐる味噌汁の臭い。そ

してこれから登校する自分。白沢は一瞬、中学時代に戻ったような錯覚を覚えた。
朝食をとっていると、玄関のチャイムが鳴った。こんな時間に誰かしら、と言う母親に「多分俺のお客さんだよ」そう答えながら急いで準備をする。
玄関からは「おはようございます、白沢タクヤ君のお母さんですね。はじめまして、私は大聖教会総務部第三課に所属している富谷と言います。朝早くから申し訳ありませんがタクヤ君のお迎えに上がりました」という声が聞こえた。
玄関にいた富谷は、昨日と同じようなスーツ姿で笑顔を浮かべている。教会関係者が家を訪ねて来る事は、普通の家庭ならばめったに無い。特にこんな早朝ならなおさらだ。母親は驚いた顔をして、曖昧に頷いている。
白い制服に身を包み玄関に向かうと、母親は視線で「あんた学校で何をやってるの？」と聞いてくる。それを笑ってごまかしながら、今日も帰ってくる事を伝えて家を出る。
家の前に自分を待つ高級車が停まっていて、さらに運転手もついているという経験は、初めてだった。いつまでこの生活が続くのかはわからないが、これにもなれないといけない。
「おはようございます」後部座席に乗り込みながら、昨日と同じように運転席に座っている高部に挨拶をする。軽く目を合わせただけで、彼からの返事は無かった。
「それでは行ってまいります。今日も貴方に神のご加護を」最後に母親にそういって玄関を後にした富谷が助手席に座る。彼がシートベルトを締めるのを待って車は動き出した。

「久しぶりの実家はどうだった？」学校へ向かう途中、前を向いたまま富谷が聞いてくる。
「どうっていわれても…。普通ですよ」
「そうか。いや、私なんかは年末年始とお盆くらいしか家に帰れな

いからね」
「僕だって似たようなものですよ」
「そうだったね。神学校はつらいね。いや、この歳になると分かるんだけど、子供が離れると親は心配するよ。中学の頃は家から通っていただろう、毎日顔を合わせているから何かあれば気が付くけど、離れてしまえばそれすらできない。心配しかできないというのはなかなか辛いものだよ」物知り顔でそういう富谷の言葉も、少しは分かる。
「富谷さん、お子さんがいるんですか？」
「いるよ。仕事が忙しくてなかなか会えないけどね」顔は見えないが、苦笑しているように聞こえた。
しばらく沈黙する車内。そして、信号で車が止まったとき。
「これから毎日僕たちが迎えに行くから、遅刻の心配はしないでいいよ」やはり富谷が口を開く。
「はい、分かりました。ありがとうございます」遅刻してもこの人達といたら許されそうだな、と思った。何しろ第一応接室を使うような立場の人だ。もちろん口には出さなかったが、そういう意味でも白沢は心配していなかった。
そんな話をしている間に、車が学校の正門前で停まる。授業開始には間に合う時間だが、周りには寮から登校してくる生徒が大勢いた。
「あの、もう少し人気のない所で降ろしてくれないですか？」御車で登校、なんていう噂はたてられたくない。しかも事実だからなおさらタチが悪い。
「そうか。じゃあ裏の方でいいね？」
白沢の返事を待たずに車が再び動き出す。白沢と会話をするのは富谷で、高部は全く口を挟まずにハンドルを握る。彼は全く話を聞いていないようにみえるが、その行動はちゃんと会話を聞いている事を示していた。富谷と会話をしているときは、その存在を忘れそうにすらなる。その風貌とは逆に、ここまで気配を消して、空気と一体化できる人物も珍しい。

少しして、車は人気の無い学校の裏に停まる。
「じゃあ、行ってきます。帰りもよろしくお願いします」そう言って白沢は車から降りる。
「ああ、行っておいで。放課後もここで待っているよ。白沢君の時間割りはわかってる、多少遅くなっても構わないさ」と言う富谷に、分かりました、と返事をして校舎へ歩き出す。
今日こそ聖女と会うんだ。そう決意を固めて。

「…行ったな」
白沢がいなくなり、最初に口を開いたのは高部だった。
「やっぱり学生はいいな。何だか昔を思い出すよ」助手席から白沢の後姿を見送りながら、富谷はしみじみと言う。
「昨日は会わなかったみたいだな」
「時間が遅かったしね。服だって制服しかなかっただろうし。やっぱり久しぶりの再開だ、おしゃれくらいしたいだろうさ」
「…最近の高校生は」
「うん？」
「最近の高校生は、制服でも出歩くぞ」
さらに神学校の制服はかなり人気が高く着ているだけで、一種のステータスになる。生徒は寮通いのため、街で神学校の制服を目にする機会が無い事もステータス性を高める原因だった。
「…ともかく。昨日会わなかったならば今日顔合わせ、かな。そうだ、きっと白沢君は服を取りに寮まで帰ると思うよ」楽しそうに、富谷はそう予想した。
「自信ありそうだな」
「ああ、何なら今日の夕食を賭けてもいい」
「俺は制服で会いに行くと思う」
「よし、賭け成立だな。負けた方が夕食を奢ると」
「いいだろう。だがひとつ聞きたい。富谷のその根拠は？」という高部の問いに

「決まってるさ、彼は僕の学生時代にそっくりなんだ」自信たっぷりに、富谷はそう答えた。

放課後の事を考えていると、いつの間にか授業は終わっていた。白沢にはそうとしか思えないほど、この日の授業は何も覚えていなかった。今までは放課後は教室で友達と話しをして寮に戻るという生活をしていたが、これからしばらくはそれもできない。

「今日はもう帰るのか？」という友達の問いに、

「ちょっと、実家に帰ることになったんだ」そう答えてすぐに教室を後にする。他に何か聞かれてボロがでるとまずい。

一度寮にある自分の部屋へ戻り、バックに服や日用品を入れる。

もともと白沢は服にこだわりは無い。着られるなら半そで半ズボンでもいい、とまでは言わないが、このブランドでないと服とは呼ばない、というほどのポリシーも無い。

ようするに、それなりに着られればいいのだ。もっとも神学校生徒の普段の生活は学校と寮の往復で私服の出番はほとんど無いのだが、それでも友達の中には私服に強いこだわりを持っている者もいた。

そんな気持ちがいまいち理解できなかった白沢だが、今だけはわかる。服をまじめに選んでおくんだった、などと後悔しても遅い。そして今は後悔する時間も無い。おそらくもう富谷たちは待っているだろう。

せめて持っている服の中で、上位のものからカバンに詰めて、学校裏へと急いだ。

約束した場所では、すでにエンジンをかけた状態で車が停まっていた。急いで後部座席に乗り込む。

「お疲れ様」

「……」

「お疲れ様です」

三者三様の挨拶を交わす。そのまま車は静かに動き出した。しばらく走ってから、白沢の持ってきた荷物を見つけた富谷が問いかける。
「その大きなバック、中身は服かい？」
「ええ、そうですよ」
それを聞いて富谷が笑った事を、白沢は知らない。

「聖女の家まで送っていこうか？」
という富谷の申し出を断って、自宅で車から降りる。両親は仕事、妹は部活で、家には誰もいない。久しぶりに自宅の鍵を開けて家に入り、まっすぐ自分の部屋へ行って、持ってきた服を見渡す。
それはどれも、彼女に会いに行くのには不十分に思えた。
しばらく悩んで、結局制服で行く事にした。財布と携帯電話を持って、富谷に教えられた彼女の家に向かう。玄関で靴を履いて、「行ってきます」と声に出して言い、家を出る。
向かう先はかつての同級生、そして聖女となった人の家。

そして。
家を出て夕方の街へ歩き出す白沢の姿を後ろから眺める、２つの影があった。
「出ていったね。彼の顔、なかなか緊張してるみたいだね」
「どうしてお前がそんな嬉しそうなのか、分からないな」
「だって中学時代に憧れていた子の家に行くんだよ？見ているこっちまで緊張してくるよ」
「お前がどう見ようと勝手だが、少なくとも俺には憧れていたとは思えないな」
「高部は見る目がないな。…でもまぁ、もしかしたら彼自身も気づいていないかもしれないけどね」
「……。それよりも制服で出かけたな」
「……」
そして坊主頭はにやりと笑い

「今日は美味い晩飯が食えそうだ」
と言った。

制服のまま声を掛ければ、ナンパは１００％成功する―。
これは神学校の生徒たちの間で言われている噂だ。そして、あながち間違いではない。学校がすでに一種のブランドと化している事、生徒は寮生活のため街中でその姿を見かけない事、さらには学校特有の情報の閉塞性が相まって神学校の制服の価値を高めているし、実際、巧妙な偽者が闇ルートで販売されている。
だから聖女の家にたどり着くまでに、制服のまま歩いている白沢が視線を集めてしまうのも仕方のない事だった。
大通りを足早に抜けて住宅街の小道を進み、少し迷ってから一軒の民家の前に立つ。
他の家と大差ない、ごく普通の一軒家で、特別大きくも小さくもない。都会特有の住宅事情で隣の家との隙間はかろうじて人一人通れるくらいしかない。
そして、この家が彼の目的地。聖女となった沢西サユリの家である。
富谷から、沢西が聖女だと聞かされたとき、白沢は信じられなかった。全国で数人しか選ばれないと言われているその聖女にまさか自分の知り合いがなるなんて、まるで小説だと思った。
そう思う半面、矛盾する事だが、素直に納得できる自分もいた。中学校生活の中で見る彼女は、聖女とよばれても不思議でない雰囲気を放っていた。穏やかで、優しくて、ひた向きだったのだ。
その彼女の護衛を頼まれ、白沢はここにいる。
護衛といっても、今誰かに敵に狙われているわけではない。そして、彼女の護衛は、自然に傍にいられる自分にしか出来ない。そう思って引き受けた。
でも、電話くらいはしておくべきだったと、白沢は少し後悔していた。いきなり訪ねて、護衛に来ました今日からよろしく、などと言

ってもいいのだろうか。
そんな事を考えている彼の傍を、自転車に乗った主婦がまるで珍しい動物でも見るような視線を投げかけながら通り過ぎる。大通りではないとはいえ、住宅街のど真ん中だ。白い制服姿は十分目立つ。
最後に深呼吸をして覚悟を決めて、インターホンのボタンを押した。
家の中で人が移動する気配があり、誰かが受話器を取ったようだ。
ブツッというノイズのあと、
「はい、どちら様ですか」
という女の人の声がした。
「あ、あの私は…」
ここまで言ってから悩む。なんと自己紹介すべきだろうか。
神学校から来ました白沢です、と言うべきか。
中学校の同級生だった白沢です、と言うべきか。
一瞬の後。
「関東総合教会付属第三神学校2年の白沢という者です。こんな時間にすいませんが、沢西サユリさんいらっしゃいますか？」
もしかしたら会話の相手がサユリ本人か、と思ったが
「まぁ、神学校の生徒さんですか？ちょっと待ってください」
ブツッというノイズと共に会話が途切れ、しばらくすると玄関の鍵を開ける音がする。ドアノブが回り、扉が開かれたが、チェーンが掛けられたままなので隙間とよぶべき間しか開かれていない。そしてそのわずかな隙間から彼のほうを見ている一人の女性。その顔にはサユリの面影があり、白沢は一目で彼女の母親だと分かった。
隙間から鋭いまなざしで白沢を一瞥した後、女性は扉を閉めた。拒絶されたのか、と思ったのも一瞬、扉の内側からチェーンをはずす金属音が聞こえる。
今度はしっかりと開けられた扉から、母親がが出てきて
「白沢君？本当に神学校の生徒さんなのね。白い制服がよく似合っているわ」
笑顔でそういった。それは、初対面の娘の同級生に対するにはどこ

か不自然なほどの、愛想のよさだった。
「こっちですよ」
そういいながら先導する母親について玄関を抜けて階段を上がり、そしてある部屋の前で立ち止まる。
ドアに掛けられたプレートには「ＳＡＹＵＲＩ」と書かれていた。
足音で部屋の前に来たことが分かったのだろう、ノックをする前に部屋の扉が開き。
ドアの向こうに一人の少女がいた。
「いらっしゃい」と静かな笑顔で出迎えてくれた、それが白沢と沢西の２年ぶりの再会だった。

２年振りに見る彼女は大人っぽくなっているが、持っていた雰囲気は変わっていない。沢西は母親に「私が直接迎えに行ってもよかったのに」と言うが、母親はとんでもないとでも言うように首を横に振る。「そういうわけにはいかないでしょ。あなたは大事な人なんだから」という母親の言葉に、沢西は少し悲しそうに笑った。
「じゃあ、私は下に行って何かとってくるから。その間にお話を聞いておきなさいね」
そういって母親は１階に降りていく。
「じゃあ、とりあえず入って」と言われ、白沢は沢西の部屋へと足を踏み入れる。
彼女の部屋は６畳ほどの広さで、壁際にベッドと机、そして本棚が並べて置いてある。机にはノートパソコンが置いてあり、本棚には綺麗に本が整列してあって、隅までホコリがない。全てカバーがかけてあるので内容までは分からなかった。
一言で言えば、質素で清潔な部屋だった。
沢西は椅子に、白沢はカーペットに直接座る。
「へえ、こういう部屋なのか」思った事を素直に口にした白沢は
「やだ、あんまりじろじろ見ないでよ」と、沢西に笑いながら怒られた。

「ああ、ごめん。寮で生活していてさ、男友達の部屋はよく見るけど…」
きれいにしている奴もいるが、汚い部屋は本当に汚い。
部屋の中に袋詰めにされたごみをこれは俺の財産だとでも言いたいのか捨てずに溜め込んでいる奴、飲み終わったペットボトルと空き缶を都会のビル群のごとく乱立させている奴、洗濯が終わった衣服を放任主義よろしくたたまずにそのまま部屋の片隅に放置している奴…。ここと比べる事自体が失礼になるような、そんな部屋を数多く見てきた。
「確か神学校に行っているんだよね。じゃあその白い制服を着て学校に行っているんだ」
「やっぱり珍しいのかな。ここに来るまでにずいぶん視線を感じてたけど」常にこの制服に囲まれている白沢にとって、この服装の珍しさは実感できない。
「それはそうだよ。本物は見る機会がほとんどないからね」
感心したように、あこがれているようにまじまじと制服を見る沢西。彼女が見ているのは制服で自分ではない。それが分かっていても少し照れるし、それが分かっているから、少し悲しかった。
そんな白沢の顔に気がついて、ちょっと恥ずかしそうに引き下がる。
「ごめんね。つい珍しくて」
もごもごと言い訳をしている。
「別にかまわないよ。でもあまりよくないよ、白い制服なんて。汚れがすぐ目立つし」
そんな雑談をしていると、
「はい、紅茶持ってきたわよ」
部屋のドアが開いて湯気の立つコップを二つ持った母親が入ってきた。ありがとう、と言う沢西。終止上機嫌な様子で母親は出て行く。
「元気なお母さんだね」
そう聞くと、沢西は紅茶を見ながら「うん、ちょっとね。最近いい事があってさ」そう答える。

その言葉で白沢も現実に引き戻される。白い制服の話をしている場合じゃない。
「…白沢君も、中学校の同級生として会いに来たんじゃないでしょ？」
疑問型の形だが、沢西の中ではもう確信しているようだ。白沢も覚悟を決める。楽しい思い出話はここまでだ。
「そうだよ。今日は、教会の関係者としてきたんだ。さっきも言ったとおり、今神学校に通っているんだけど」そして、一呼吸置く。
「お前は…聖女だろ」
はっきりと口にした。
沢西は黙って、運ばれてきたコップの湯気を見て何も答えない。沈黙に耐えかねて、白沢も視線を落とす。ゆらゆらと立ち上る湯気。その形は次の瞬間に変わり、やがて消えていく。
「そうか、やっぱりそうだよね。うん、私は聖女だよ」
しばらく経ってから自分は聖女だと、沢西は認めた。
「……」
そんな沢西に、白沢は何を言っていいのか分からない。今度は彼が黙ってしまいそうになったが、それでもここで言葉を途切れさせるわけにはいかなかった。
「俺は昨日そのことを聞いて、ひとつの役目を受けたんだよ。沢西が聖女になるから、警護しろって」
警護、という言葉を聞いて沢西は驚いたようだ。
「警護って…。私誰かに狙われているの？」
「いや、そういうわけじゃないんだ。ただ、これから先何も無いとは限らないし、俺なら自然に沢西の傍にいられるから」
「なるほど、それで白沢君なんだ。教会と私両方の関係者って言うと、白沢君くらいしかいないもんね」沢西はうなずいて納得する。
「そうなんだ。何か困った事とか、教会に言いたい事があったら俺に言ってくれ」
そういう言って、運ばれてきた紅茶に口をつける白沢に、

「うん、分かった」沢渡は本当にうれしそうな顔でそう答えた。
「それとね、白沢君」
「なに？」
「ありがと」
その穏やかな笑顔は白沢に、聖女という言葉を連想させる。

結局その日は雑談をしてすごし、
「白沢君、夕食はどうするの？」という沢西の母親の質問と、遠慮せずに食べていけという態度から逃げるように帰る事にした。
「それじゃ、今度はいつ来ればいい？」
帰り際、白沢は玄関まで見送りに来た沢西に聞く。
「え、私が決めるの？そうだなぁ、えっと、明日は土曜だから次は月曜でいいよ」
「分かった。月曜の夕方にまた来るよ」
そう答えて、白沢は玄関の扉を閉めた。
外はもう暗くなっている。都会だから星は見えないけれど、細い細い弦のような月は見えた。それを見上げる白沢の心に、ある決意が芽生える。
「―俺は沢西を護る」
富谷に言われたからではない。彼が神学校の生徒だからでもない。
それは彼女の笑顔を見た時に決めたことだった。

09 ―自分がやりたいこと

夢だと分かる夢だった。
暗く広い空間が、目の前にあった。外は雨が降っているのか、屋根に当たる雨音が静かに響いている。僕は壁を背もたれにして座っていて、傍にはバドミントンのラケットが置いてあった。
少し離れた所には彼女がいた。僕と、進路について話をしていた。先の見えない不安を、中学3年生の僕らはお互いに感じていた。具体的に何と言っていたのかはわからない。それでも、僕は何かを言い、彼女が何か言うのを聞いた。仕方ない、これは夢の中での出来事なのだから。体育館の壁際に座っている僕の中で、意識だけの僕はそう思う。
「―お話しを書いてみるよ」
夢の中でも、僕はその言葉をはっきりと聞いた。彼女がいる方を見るが、体育館の暗闇のせいか顔は見えなかった。それでも、彼女は僕の返事を、あのやさしい微笑みを浮かべて待っている、それは雰囲気で分かった。けれど、僕は何も言えなかった。2年前のあの時、彼女の言葉に対して僕は何と答えたのか。何と答えるべきだったのだろうか。
不意に彼女は立ち上がり、体育館の扉を開けて外へ出て行こうとする。駄目だ、まだ雨が降っている、ここから出て行っちゃ駄目だ。呼びかけようとするが、声は出ず体は動かない。そんな僕を気にする様子も見せず、彼女は扉を開いた。ここから外へ出て行ったら、もう手の届かないところへ行ってしまう。そう分かっても僕は金縛りにあったように動けなかった。焦りと苛立ちで、叫び声をあげる。
「読んでみる、絶対に読む。だから―」
自分の声で目が覚めた。
夢の光景を、はっきりと思い出すことができた。中学時代の夢だっ

た。あんなにはっきりとみたのはこれが初めてで、全身に汗をかいていた。時間は午前7時。もうすぐ起きる時間だ。昨日はベッドに倒れこんだまま眠ってしまった。少しだけ、体がだるかった。夢を思い出す。僕が最後に叫んだ言葉。

―絶対に、感想を伝えるから

あの雨の日、僕はそう伝えるべきだった。僕が2年前に彼女にした返事は「読んでみたい」だけだった。感想を伝える約束をしなかった事を、本当に小さなことを、酷く後悔していた。

その後悔を引きずったまま、もやもやした気持ちのまま。僕は再びベッドに身を投げる。今は何も考えたくなかった。もう一度眠れば、もしかしたらさっきの夢の続きが見られるのではないか。そうすればもう一度彼女と再会できる。そんな馬鹿なことを考えて、瞳を閉じる。夢の中で会えても、何も変わらないのに。

その日、僕は遅刻ぎりぎりで登校した。朝食もとらずに家を出て、登校時間の自己ベストを更新した。

「おはよう。昨日はどうだった？」教室に入ると一瀬にそう話しかけられる。

「どうだった…？」言われてからしばらく考えて、一瀬のノートの存在を思い出した。そもそも昨日CDを買いに行ったのはそのためだったのだ。

「昨日はそれどころじゃなかったんだよ。中学の時の同級生が聖女になっちゃったみたいでさ」なんて言えるはずもなく、

「悪い、昨日はちょっと調子悪くてさ。すぐに寝ちゃったんだよ」

半分は本当だった。朝起きてから体調は優れない。体と心がだるかった。一瀬はそんな僕の顔を見て

「本当に具合悪そうだな。風邪か？熱とか出てない？」

「いや、風邪じゃないと思う。すぐに治るって」

「そうか、それは良かった」

そう言ってくれる友達への感謝を、僕は皮肉という形で返す。

「珍しいな、一瀬が心配してくれるなんて」
「風邪うつされて、テストに影響すると困るからな」そう言って、ニヤッと笑う一瀬。
「いや、風邪を引いておけば赤点取ったときのいい訳になるぞ？」つられて僕も笑う。少しだけ元気が出た。
そこで1時間目の教師が教室に入ってくる。生徒達が自分の机に戻り、ざわめきが少しずつ小さくなる。教室全体が授業に向けてその姿勢を変える。一瀬は自分の席へ戻る間際、「ノート、昨日手をつけてないんだろ。病人にサービスだ。もう一日貸してやるからしっかり勉強してこい」そう言ってくれた。僕は皮肉ではなく、無言で感謝した。

その日の授業はほとんど僕の記憶に残らなかった。ここはテストに出すぞ、という教師の声も、ノートを化してくれと必死に走り回るクラスメイトの叫びも。
気が付くと、沢西のことを考えていた。
沢西は聖女だという。中学の時の彼女のイメージは、聖女にぴったりだった。
だが、聖女が眠りに付く事で本当に世の中は良くなるのだろうか。教会は「眠ってもらうだけだ」と言う。でもそれは、世界から自分たちだけ取り残されてしまうという事。果たしてそれは、たとえ教会の名の下とはいえ許される事なのだろうか。もし彼女たちが眠っても世の中が何も変わらなければ、失われた彼女たちの時間はどうなってしまうのだろう。
そして、彼女は本当に自ら望んで聖女となるのだろうか。あの作品の前書きと後書きには、妬みや後悔は書かれていなかったが、疑問は僕にまとわりついて離れない。なぜあの作品を自分に渡したのか。なぜ今になって渡したのか。本当に、聖女になってもいいのか。本当に、それを望んでいるのか。
それを彼女の口から直接聞かないと納得できない。沢西と直接会っ

て話がしたい。
それは昨日の夜から僕が漠然と考えていた事で、一晩以上かけてようやく掴んだ具体的な答えだった。

直接会おう、と決めた。
だが、実際どうしたらいいのか分からなかった。なにしろ沢西の家すら知らないのだ。中学生の頃の名簿には電話番号は載っているが住所までは載っていなかった。
誰かに聞く事もできない。「あいつ聖女なんだけど、家の場所教えてくれないか？」なんて言えるわけがない。
沢西の家を知ってて、なおかつ事情を話しても平気な人。そうすると、一人だけ候補が挙がってくる。
小笠原マキ。沢西から直接話を聞いているし、幼馴染みというから、家も知っているはずだ。
問題はどうやって小笠原に会うかだが、考えても仕方ない。会った場所に行けば、もう一度会えるかもしれないと考え、学校が終わってから僕は一人で立岩行きの電車に乗った。

「悪いね、何か買い物があったんじゃないの？」
「いいのいいの、特にほしいものもなかったし」
そっか、と答えて僕はコーラに口をつける。
小笠原とは意外にも、簡単に会う事ができた。もしここで見つからなければ通っている学校を調べて乗り込む覚悟があっただけに、拍子抜けしたほどだ。
彼女はテレビ売り場で何をするでもなく、ニュースを見ていた。まるで何かを、誰かを待っているように。
話があるんだ、という僕の呼びかけに、小笠原は黙ってついてきた。
場所は昨日と同じファーストフード店だった。
「で、用事って何？」
昨日と同じように正面に座っている小笠原にそう聞かれ、僕は何か

ら言うべきか考えながら、口を開く。
「昨日渡してくれた物、あれはＵＳＢメモリーだったんだ」
「そうだったんだ」
「中には文章が、沢西が書いた物語が入っていたよ。俺、中学生の時に沢西と約束したんだ、いつか物語を書いたら俺が読むって」
「そう」
「素人が書いた、あまり面白くないお話だったけどね」
そこで一度、言葉を区切る。
「でも、あいつは約束を守ったんだ」
「……」
「沢西、聖女になるんだろ？その前に直接会いたいんだ」
「……」
「一緒に会ってくれ、なんて事は言わない。どこに行けば会えるのか、もしくは家の場所だけでもいい、教えてくれないか」
「……」
この時の小笠原は、まるで別人のように口を開かなかった。最初は笑顔だったが、話を進めていくとその顔からは表情が消えた。
少し間があって、彼女が口を開く。
「家に行って、どうするの？」
「あいつと、沢西と話がしたいんだ」
「何を？沢西さんにいったい何を話すの？」
「何で俺にこの話を渡したのか。それと…本当に聖女になっても後悔しないのか、とか」
小笠原の口調は相変わらず静かで落ち着いているけど、彼女が発する質問や表情の中から何か強い意志を感じた。まるで自分が試されているような錯覚を受けた。
「もし沢西さんが聖女になりたくないって言ったら、藤川君はどうするつもり？」
「…もし、あいつが聖女になりたくないと思っていたら、それはやめさせるべきだろう」

「具体的には？」
「…そこまでは、まだ考えてないけど。でも、まずあいつと話をしないと」
そこで小笠原の顔に表情が浮かぶ。呆れや、怒りや、失望が混じった顔だったけど、高校２年生の僕にそんな複雑な表情が読み取れるわけもない。ただ、ものすごい怒っているとしか思わなかったし、それで十分だった。
「藤川君って自分勝手だよね。何で話を渡したか？聖女になっても後悔しないか？そんな事を直接聞きに行くなんて事を本気で考えているんだから。ちょっとは自分の頭使って、沢西さんの気持ちを考えてみなよ」
彼女の口調は静かだった。怒鳴るでも喚くでも泣き散らすでもなく、まるで諭すようだったけど、それでも小笠原は怒っていた。
「やめさせるって簡単に言うけどさ。そんなのできるわけがないよ。だって聖女だって決めるのは教会のずっと偉い人たちなんだから。聖女を辞めます、なんて言って認めてくれるわけないじゃない。クラスの委員会とは違うんだよ？」
しゃべっているうちに小笠原の口調が激しくなってきた。
「聖女になるのに後悔しないか、なんて本人に聞けるはずないじゃない。サユリ、私に打ち明けるとき、昨日藤川に渡したあの包みを預かったときに…泣いてたんだから！」

「サユリ、私に預けるときに泣いてたんだよ。私はもう藤川君には会えないって。だから私に、ごめんねって謝りながら。サユリは何も悪くないのに―」強い口調で、激しく怒りながら、小笠原の目に光るものが見えた。そしてその姿が沢西の姿と重なる。
女の子に怒られたのも、怒らせたのも、そして目の前で泣かれたのも、僕には初めてだった。だからどうしていいか分からず、ただその涙の持つ力に圧倒されるばかりだった。
世間では、聖女になることは名誉な事で、聖女は喜んで眠りにつく、

というのが通説だ。だけど、沢西は違った。聖女その人が、眠る事を怖がっていた。
やがて小笠原も落ち着いてきて「とにかく、沢西さんには会わせられない」そう言って、席を立つ。
昨日とは違う理由で、僕は小笠原を追いかけられなかった。

目の前で女の子に泣かれた事、そして考えを否定された事は、僕に想像以上の精神的ショックを与えた。
それでも、もし本当に沢西が聖女になりたくないのなら、それは辞めさせるべきではないのか。そこまで考えて小笠原の言葉がよみがえる。
―沢西さんの気持ちを考えてみなよ
「そうだな、むこうが会いたくないっていうんなら、僕は会えないな」
沢西は、泣きながら僕には会えないと言っていたらしい。なぜかは分からない。会う事を泣いて拒まれるほど、僕は嫌われていたのだろうか。
―自分勝手だよね
そう言った時の小笠原の顔を思い出す。怒っているだけじゃなくて、呆れて、悔しそうな、そんな顔だった。彼女にそんな顔をさせるほど、僕の選択は間違いだったのだろうか。
かつての同級生に目の前で泣かれて、自分勝手だと怒られて、それに一言も反論できなかったのに、僕は未だに僕の意見が間違いだとは思えなかった。
―沢西さんの気持ちを考えてみなよ
小笠原の言葉がよみがえる。それを言えば、だけど小笠原こそ沢西の気持ちを考えてみるべきだ。沢西が本当にしたい事は、やりたくない事はなんなのか、それをちゃんと考えるべきだと思った。

翌日も、気分は相変わらず悪かった。夜、目を閉じると小笠原の顔と声と涙が浮かんできて、眠れなかった。そしていつもと同じように学校へ行き、頭に何も残らずにただ授業を聞いて、気がつけば昼休みになっていた。

「なんだよ、今日もまだ顔色悪いぞ」一瀬にそう言われる。

「どうも体調が回復しなくてね」

昨日に引き続き嘘ではない。一瀬にもそれがわかったのだろう。

「おいおい、大丈夫かよ。テストまであと少しだぞ」

「テストね。そうだね」正直それどころではなかった。

そんな僕の気持ちには全く気づかずに

「その調子だと、昨日もノート写していないだろ？」

僕はそれに、あぁ、とだけ答える。一瀬は大きく溜息をついて

「俺はなるべく良い人であろうとは思っているけど、聖人じゃないんだ」

「そうだな、お前はよく偽善者になりたいって言ってるからな」

「そう。だから、今日は数学のノート返してもらうぞ」

さすがに僕も今日までノートを借りるつもりはない。さらにこの時は、全く勉強する気になれなかった。

「わかってる、今日は返すよ」

「ならいいんだけど。放課後までに返してくれればいいから、今コピーとってこいよ」

一番近いコンビニなら昼休み中に往復できる。口では何を言っても、一瀬はいい奴だった。

「しかし、お前もう少しわがままでも良いんじゃないの？」

と、一瀬は突然そんなことを言ってきた。

「なにそれ、どういうこと？」

「なんとなくそう思ったんだよ。お前は体調悪くて勉強できなかったんだろう、それならもっと

『俺は体調悪くて勉強できなかったんだ、ノートもう少し貸せよ！』くらいの事言っても良いと思うんだよ」

「でもそれは俺の都合だろ。お前に迷惑はかけられない。やっぱり、人に迷惑かけちゃいけないと思う」
「そりゃそうだ。当然だよ。でもな、それも時と場合によるぜ。どうしても譲れないものがあるなら、それは周りの迷惑なんか考えるべきじゃないんだ」
「なんだよそれ、自分勝手な奴が正しいって事か？」
「そうは言ってないだろ。ただ、もう少し自分を主張してもいいんじゃないかってことだよ。結構周りに流されやすいからな、お前は」
一瀬は今僕が置かれている状況を知らないはずだ。だから彼が言った事は数学のノートについてであるはずだけど、どうしても僕には小笠原の泣き顔が浮かんでしまう。
だから次の言葉は、考えるより先に口が動いていた。
「自分を主張して、それを否定されたらどうするんだ？」
一瀬は呆れたように
「お前は自分の主張が何の問題もなくまわりに受け入れられると思ってるのか？そんな訳ないだろ、意見なんて否定されるためにあるようなものだぞ。否定されて相手の言い分を聞いて、納得できれば意見を変えればいい」
「納得できなければ？」たとえば、昨日言われた『会わせられない』のような。
一瀬の答えは単純だった。
「だったら、後は戦うしかないな」

結局一瀬が言いたかったことは「お前はもう少しわがままになってもいいだろ」ということなのだろう。
自分が貫きたいものがあれば周りの迷惑なんて考えるな、とも言われた。
僕にはその気持ちがわからなかった。誰にも迷惑をかけたくない。誰の迷惑にもなりたくない。自らの主張を、意思を持つと周りとの摩擦が生じる。世界はカタチを持った意思を許すほど優しくはない。

世界は意思を削る。対立する人を使い、時に激しく。
世界は意思を耗る。膨大な時間を使い、時に優しく。
削られれば痛い。痛いのはいやだ。
だから僕は今まで自分の意思を持たなかったのだ。世界がいくら人を使い時間を使っても、元から持ち得ないものを削れるはずがない。
それが僕が知らない間に身につけた処世術、だった。
それを昨日、少し脱ぎ捨てた。
世界はそれを見逃さなかった。意思を持った僕を、「自分勝手だ」切り捨てた。
削られた。痛かった。
相手を泣かせた。痛かった。
それでも一瀬は言った。もっとわがままになれ、と。周りの人を巻き込んで、いや、そもそも周りなど気にせずに貫きたい意思があれば貫き通すべきだ、と。
だけど。沢西は僕と会いたくないと言っている。
「他人の迷惑を考えるなって言ったけど、その他人には助けたい相手も含まれるのか？」
その質問は一瀬にとっても予想外だったのだろう、キョトンとした顔をする。それでも考えをまとめているような雰囲気を感じ、僕は答えを待つ。周りには昼食を広げながらノートを書き写している生徒もたくさんいた。
「難しいな、それは。俺も一概に言えないけれど…。ただ、本当に助けたいのなら、そうだな、相手の意思なんて俺は気にしない」
ただし、といって彼は続ける。
「自分が助けたくて助ける、というのなら相手にしてみればいい迷惑だからな。感謝を期待するなんて論外、嫌われるくらいの覚悟はしないといけないな」
沢西は僕に会えないと泣きながら言ったらしい。小笠原も、沢西には会わせられないと泣きながら僕に言った。
だけど僕は、それでも沢西に会いたい。

その時になって、僕はようやく自分の中にあるその気持ちが、こんなにも強いものだということを知った。
僕の中で、何かが固まっていくような、暗闇で仄かに光る種火を見つけたような、そんな感じがした。
「いいのかな、そんな相手の事を考えないような行動で」
「それが１００％純粋に相手を思っての行動なら、アリだろ」
一瀬はやっぱり何も知らないはずだけど、それでも僕の行動を認めてくれた。今までやりたい事もなく、ただ流されるように高校へ進学したけれど、彼と出会えた事は僕にとってこの上ない幸運だった。
「そんな事はどうでもいいから、早くコピーとってこいよ」という一瀬の言葉に無言で強く頷き、かばんを手に立ち上がる。
目指す先はコンビニではなく、立岩。今日も小笠原は来ていると、強い予感があった。

１０ー彼女を助ける僕の味方

平日の昼間に立岩に来たのは、この時が初めてだった。会社や学校がある時間帯にも関わらず、相変わらず多くの人がいる。中には制服姿の高校生もいて、僕は授業はどうしたのだろうと思った。けど、すぐに今の僕も同じ格好をしている事を思い出す。
改札を出てからまっすぐにテレビ売り場に来た。もはや定番となった大型テレビの前で、彼女を待つ。今日も来るはずだという、根拠の無い確信があった。
テレビを見て、立ちつかれると少しはなれたところにあるベンチに座って休み、またテレビの前に立つ。それを何度か繰り返し、日が暮れはじめて周囲の人通りが多くなり、やがてテレビが5時の時報を告げた時。僕を見て驚いている小笠原を見つけた。

「今日もごめんな、付き合ってもらって」場所はやはり昨日と同じファーストフード店。昨日と同じ注文をして、昨日と同じ席に座る。
「いいよ。別に、欲しい物があったわけじゃないから」素っ気無く言う小笠原。昨日のことを思い出して、僕も少し気まずさを覚えた。だけどここで引き下がるわけには行かなかった。
沢西と会うのに一番の近道は小笠原を説得する事だった。もし説得が失敗した場合、彼女は僕が沢西と会う事を止めさせようとするかも知れない。そうなると彼女は敵になるし、そうなったら僕も容赦するつもりは無かった。ただ、なるべくならそうはならないで欲しいと、そう思っていた。
「そうか、それはよかった。俺は、小笠原に用事があったんだ」
その言葉に顔を上げた彼女の目は『また馬鹿な事を言い出すつもり？何度頼まれても同じ事よ』と語っている。小笠原も自分の考えを曲げるつもりはないらしい。しかし、そんな表情を無視して僕は話し始める。

「やっぱり沢西に会いたい」
「だめ」
「あいつに会わせてくれ」
「できない」
はっきりと意思を口にして、はっきりと拒絶された。やはり一筋縄ではいかない。
それでも僕は負けるわけにはいかなかった。
「じゃあ、お前は沢西が聖女になってもいいと思っているのか？」
その質問に、小笠原は一瞬言葉を詰まらせる。
「…いいとか悪いとかじゃなくて、もともとサユリは聖女なんだから」と、誰が聞いても強がりだと分かる嘘をついた。見ているこっちが思わず同情してしまうような、そんな嘘だった。
「もともと聖女だとか、そんなことは抜きで答えてくれ。お前は本当に沢西が聖女になってもいいと思っているのか？」
その僕の問いに、小笠原はしばらく悩んでいた。
「…それは。思ってないけど」
「それなら助けてやるのが友達じゃないのか？」
それを聞いて、小笠原の顔に怒りが浮かぶ。
「藤川が私たちのことをどれくらい知っているの？そんな簡単に友達とか言わないでよ！」
「なんだ、そんなに親しいわけじゃなかったのか。それは悪かった。そうだよな、親しかったら、友達だったら、聖女になるって言われたときに止めるはずだよな」
これはもちろん挑発だった。小笠原と沢西がとても親しいことを、僕は知っている。そして僕の言葉が小笠原をどれだけ傷つけるのかも知っていた。それでもこのときはこう言うしかなかった。
「私だって本当は嫌だよ。でも教会が決めたことじゃない！それにサユリが聖女になるって言ってるんだから！私からはもう何も言えないでしょ！」
昨日と同じように、小笠原は怒っていた。ただ昨日と違うのは、僕

は意識的に彼女を怒らせていた。
「昨日も言ったじゃない！サユリの気持ち考えてよって！それでもまだ助けるなんて言うとは思わなかった！」
沢西を聖女にさせたくないけれども本人が聖女になると言っているから、自分から勝手に助ける事もできない。僕が考えて悩んだ事を、すでに小笠原は考えていた。そして彼女が出した結論は、見守ること。
でも僕は、その結論を選ぶ事は出来ない。
たとえ沢西本人が助けを望んでいなくても、僕自身が彼女を助けたいと思っている。
その考えが、自分が傷つけている女の子を見ても揺るがない事を確認して、僕は僕が思っているよりも頑固なのかもしれないと思った。

「自分を主張して、回りに受け入れられなかったらどうする？」小笠原に、静かな声で話しかけた。彼女は下を向いて、涙をこらえているようだった。このときの僕は、目の前にいる僕を怒った女の子に、敵対心よりも仲間意識を感じていた。
「俺の高校の友達は、相手の意見をよく聞けって言ってた。それに納得できれば自分の意見を変えればいいし、納得できなければ後は戦うしかないって」戦う、という単語に小笠原は反応する。
「それで藤川は今日、私と戦いに来たんだ？」その言葉には皮肉が込められていた。目は赤く潤んでいるが、泣いてはいなかった。「でも、私に勝っても意味ないよ。サユリ本人が聖女になりたいって言ってるのに、他の人が止められる訳ないんだから」
それは、昨日まで僕自身が考えていた事だった。
そして今は、違う考えを持っている。
「もし正しいことをしていると思いながら間違えた事をしている人がいたら、そいつの意思なんて関係なくやめさせないと」
この言葉は、自然と僕の口から出た。小笠原は黙って僕を見ている。
「この計画自体が、俺はもともと好きじゃないんだ。女の子を数年

間眠らせて、本当に世の中は変わるのか？とてもそうとは思えない。
そんな計画は教会の自己満足だ。付き合わされるほうにしてみればいい迷惑だ。
だけど俺の知らない人が知らない所でどうなろうと、それは構わない。俺の世界には関係ないからね。
でも、沢西が選ばれるとなると話は別だ。
あいつが聖女になって、本当に世の中はよくなるのか？あいつは聖女になりたいって、本気でおもっているのか？そんなわけないよな。泣いていたんだろ、あいつ。なら辞めさせないと。あいつがなりたくないのなら、聖女なんてならなくていいんだよ」
小笠原の目を見て、僕は言い切る。
「でも…。でも、どうするの！？サユリは絶対に自分からは聖女をやめるって言わないよ。あの子昔から自分で決めた事は絶対にやりとおす子だから。おとなしく見えて、実はすごい意地っ張りなんだから」
「説得する」
その簡潔な答えに対しての沈黙は、今までのと意味合いが違っていた。ぽかんとして、二の句が告げない小笠原。
「簡単なことだよ。それは説得するしかない。それでだめなら、また違う手を考えよう」
「……」
「そのためにもまず、あいつに会わないといけないんだ。頼む、沢西にあわせてくれ」
安っぽいテーブルに手をついて頭を下げる。
「……」
しばらく沈黙が続く。これでダメなら、説得は諦めるしかないと思っていた。
だけど、小笠原は、沢西を助けるという僕を助けてくれる。だって、そうじゃなければ、3日も連続で僕に付き合ってくれるはずがない。
「ここで私がダメって言っても」

顔を上げる。
小笠原の顔には呆れの色と、
「きっと藤川は諦めないでしょ。これからずっと付きまとわれるのは嫌だから」
―ほんの少し、うれしさがあったように思う。
「それじゃあ」
「サユリの家、教えてあげる」
「……！」
嬉しかった。これで沢西に会える！後はすべてうまく行く気がしてきた。
「それにね、きっと私が言ってもサユリは聖女を辞めないけれど。もし藤川が言うのなら、何か変わるかもしれないから」
私だってサユリを失いたくないんだから。
拗ねたように顔を背けてそうつぶやく小笠原の目に少しだけ滲んでいた涙に、結局僕は気がつかなかった。

11 ― 交差する4人

発端は、数日前だった。
「神学校って、外出するときは制服じゃないといけないの？」沢西の部屋で紅茶を飲みながら雑談をしているときに、彼女がふと思いついたように白沢に聞く。
「いや、そういうわけじゃないけど」
「ふーん、じゃあなんで今日も制服なの？」その日も白沢は制服を着ていた。
「一応学校から依頼されて来ているわけだから。ケジメだと思ってもらえるといいかな」と答える。最初に制服で会ったから、なし崩し的にずっと制服で沢西の家に通っていた。
「ケジメね。まじめだもんね、白沢君は」面白そうに笑いながら
「でも私服でいいよ。そんな制服ばっかりじゃ疲れるでしょ」
そう勧められて白沢は自分の持っている私服を思い描き、どんな服が沢西の好みなのだろうと考えてみるが、分からない。
「あ、じゃあさ、今度服を買いに行こうよ」
という白沢の言葉を聞いて
「面白そうだね、じゃあ今度の金曜に行こう」
笑いながら、沢西はそう答えた。

そして金曜日の夕方。二人は夕暮れの町を駅にむかって歩いていた。雨は降っていないが、少し曇っていた。
沢西と服を買いに行く、そう富谷たちに話したら
「買い物でストレスを紛らわす作戦か。確かに沢西様くらいの年齢ならば買い物でストレス発散をされるだろうね。白沢君もうまいなぁ、さすがだよ」
と富谷に言われた。もちろんそれは富谷の過大評価だ。白沢もそんな意図があったわけではない。

「よし、じゃあこれ軍資金ね」
富谷は突1万円札を3枚取り出し、白沢に差し出す。
「何ですかこれ？」意味がわからず戸惑う白沢。
「だから、軍資金だよ。…あ、もしかして足りないのかい？」それならもう二人ね、などと言いながら5万円を白沢に差し出した。
「いえ、そうじゃなくてですね。5万円も受け取れませんよ。だいたいどうして富谷さんが身銭を切ってくれるんです？」
白沢の頭には昔両親に教わった、お金をくれる大人には付いていってはいけない、という言葉が思い出される。
「大丈夫だよ、このお金は白沢君が使うべきお金だからね。君が沢西様の警護に当たるのに、教会から補助金が出ているんだ。それで小さな出費をまかなうことになっているから、君達が服を買うのに使っても問題はないよ」
そういう事なら、遠慮する必要も無い。高校生にとって5万円は魅力的し、財布の中が心もとなかったのも事実だった。「じゃあ、ありがたくいただきます」そういって白沢は5万円を受け取った。

沢西と白沢は並んで立岩の改札を出る。白沢は神学校の制服を着ているため、移動中自分に注がれる視線を感じていた。電車の中、駅の階段、自動改札。この数日で慣れたとはいえ、不快感が消えるわけではない。それでもそんな感情を表に出さず、沢西と歩く。
「じゃあ、学校から服を買うお金がもらえたの！？」神学校ってすごいんだね、と沢西は驚いている。
「いや、今回は特別だよ。沢西と買い物に行くって言ったらくれたんだ」
「それでもすごいよ。いいなぁ、そんな学校」
「そんなにいいものじゃないって。授業と先生と規律は厳しいし、寮で出る食事はあまりおいしいくないし」
「でも面白そうじゃない。一回行ってみたいなぁ」
そんな他愛の無い話をしながら、お店に向かって足を進める。曇り

空の下、夕方から夜へと街は姿を変えていく。

「え、今から会いに行くの？」
驚いたように小笠原が言う。彼女の説得を終えて僕が、「今すぐ会いに行こう」と言ったからだ。
「そうだよ、早めの方がいい。それに沢西は俺に会いたくないって言っているんだろ？それなら不意打ちのように会いに行った方がいいじゃないか」身を乗り出して力説する。
「ちょ、ちょっと待ってよ。それはいくらなんでもやりすぎなんじゃない？会うならまず電話とかで話をしてからのほうが」
「それじゃダメだ」ぐずる小笠原をさえぎって僕は続けた。
「電話じゃダメなんだよ。俺は直接会わないといけないんだ。受話器越しで伝わる思いなんてたかが知れている。聖女になるって決めた沢西の意思を俺は覆さないといけないんだ。電話じゃダメなんだよ」
それを聞いて小笠原はため息をついた。
「本当に、自分勝手」
「昨日聞いた」
「わがまま」
「否定しない」
「周りの事考えてないし」
「友達が言うには、俺はそうあるべきらしいよ」
「開き直ってる」
「うん。でも悪いと思ってる」
これは僕の正直な気持ちだった。
「小笠原には迷惑をかけているし、これからもかけると思う。本当に済まないと思っている。だけど今の俺には助けが、小笠原の助けが必要なんだよ。だから今のうちに謝っておく」

小笠原はため息をついてから、腕時計で時間を確認する。
「今から行くとサユリの家に着くのはもう夜になっちゃうけど」そうして飲み終わった紙コップを持って立ち上がる。「それでもいいなら行こう。家、案内するよ」
それを聞いて僕も立ち上がる。
店を出て、かなり時間が経っている事に気が付いた。外はもう夜になろうとしていた。

大きな駅には必ず大きな駅前の広場がある。立岩の場合もそれは同じだった。
駅には多くの人が集まり、その人を目当てにデパートや商店街が出来る。
そして、人を目的とするのはお店だけではない。ストリートミュージシャンと呼ばれる者もまた、駅前広場に現れる。彼らの中にはプロ顔負けのテクニックを誇る者もいれば、高校の文化祭程度のレベルの者もいた。
この日駅前広場に現れたのは、この地域ではかなり有名でメジャーデビュー目前と噂されるグループだった。
「あ、この人たちすごい歌上手いんだよ」そう言って、今まさに歌い始めたミュージシャンのもとに小走りに近づく沢西。「へぇ、そうなんだ」と相槌を打ちながら白沢もそれに従う。普段は学校の中だけで生活している彼にとって、路上で歌を歌う人を見るのは、初めてだった。
沢西の言葉を証明するように二人の周りには続々と人が集まりだす。最前列の人はしゃがみこんでいて、本気で聞くモードだ。人だかりの最前列に位置する事になった二人も、自然としゃがみこむ。そうして、一曲目が始まった。
生で人の歌を聞いた経験があまり無い白沢にとっても、このグルー

プの歌は上手いと感じた。声も悪くないし、音程もちゃんと取れている。人気というの、確かにもうなずけた。
3曲ほど続けて歌い、やがて次は最後の曲です、というと周りの観客からは不満そうな声が上がる。それに苦笑いをして、彼らは演奏を始めた。
それは、物語のような歌だった。
昔分かれた古い友達と敵対してしまう悲しみを歌った歌だった。

僕と小笠原が向かう先に、人だかりが見えた。どうやらストリートミュージシャンに集まっているようだ。
「あ、この曲」隣を歩いていた小笠原が声を上げる。
「あそこで歌っているグループ、知っているのか？」
「うん、この辺ではかなり有名なグループだよ。もうすぐメジャーデビューするんじゃないかって言われてる。私の友達でも何人かファンの子がいるし。ちなみにね、今歌っている曲は必ずライブの最後に歌う曲なの。なかなかいい曲なんだ」
メジャーデビューするだけあって、よく通る声をしていた。その歌は、昔分かれた友達と敵対する悲しみを歌っていたようだった。

そうして、曲が終わった。
目の前にいた事もあって、二人は人一倍の拍手をする。
「おわっちゃったね。どう、気に入った？」拍手をしながら、なぜか得意げにそう聞いてくる沢西に
「ああ。これなら、メジャーデビューしても平気じゃないかな」やはり手を止めずに白沢は答える。
周りの人だかりは徐々に薄れ始め、白沢もようやく立ち上がる事が

できた。「じゃあ、行こうか」そう言って彼は人ごみにまぎれながら駅に背を向け歩き出した。
その背中に「え、ちょっと待ってよ。足が…」と、慌てたような沢西の声がかかる。振り返ると歩き方が不自然だ。しゃがんでいたために足が痺れたらしい。
彼女の元に戻ろうとしたが、人ごみがそうさせてくれない。駅から出てくる流れ、曲を聴き終わる人の流れ。その二つの流れに行く手をさえぎられる。
仕方なく、道の端に立ち止まって待つ事にする。
この白服は目立つから、はぐれたりする事は無いだろうと思った。

どうやら曲が終わったみたいだった。まるで水に溶ける角砂糖のように、端から人が散って行く。僕達は駅を目指し、散り始めた人ごみの方へと向かっていった。
最初その人を見たとき、僕はミュージシャンの一人かと思った。人ごみの中でも目立つ上下真っ白な服を着ていたからだ。けれどその人は最前列付近から立ち上がるとグループに背を向けて歩き出した。変わった服装をしているな、と思った。昔聞いた、神学校の制服って真っ白だという事をぼんやりと思い出す。隣を歩く小笠原もそれに気が付いたようだ。
「あれってもしかして、神学校の生徒かな？」
「どうだろ。昔聞いた話では制服で学校の外を出歩いちゃいけないらしいから、きっとニセモノじゃないか」
白服は人ごみから少し離れて立ち止まった。誰かを待っているようだ。彼に用は無いが、駅に向かう途中に近くを通らねばならない。他人をじろじろと見るなんていうのは、あまり褒められた事じゃないと分かっているけれど、見るともなしに目が行ってしまう。
僕と同じくらいの歳だろう。近づくにつれてだんだんと顔が見えて

くる。
その顔に中学生の時の友人の面影を見つけて、思わず立ち止まる。
小笠原も立ち止まり、僕の視線の先に目を向ける。
「あれ、あの白服の…」彼女も気が付いたようだった。
「ああ、多分あいつだよ」一度もお互いに言った事は無かったけれど、中学生の時に一番仲がよかった彼だとわかった。この時は沢西に会う事が最優先だったけど、話しくらいはしていこうと思った。
白服に近づくたびに、彼の顔がはっきりと見えてくる。
どうしてだろう。さっき僕は教会が信じられないと言ったばかりなのに。彼が神学校へと進んだ事を、僕は知っていたのに。彼とここで再会するという事を、本当に偶然だと思って疑わなかった。

「そんな真っ白い服を着て。誰かと思ったぞ」僕は満面の笑顔で白沢に話しかけた。彼とは久しぶり、なんて他人行儀な挨拶は必要ないと思った。
「仕方ないだろ、こういう制服なんだから」白沢の返事からも、2年ぶりというぎこちなさは感じられなかった。
僕達は久しぶりに会えたことを喜びながら、昨日も会っていたかのように話せた。
「うわー、やっぱり白沢じゃん。本当に神学校行ってるんだ」
僕の後ろから小笠原が声をかける。そんな彼女の顔も、やっぱり嬉しそうだった。
「本当に行ってるって。なんだよ、俺が中退してると思ってた？」
そこには、単純に再会を喜ぶ中学の同級生の姿があった。
「それよりも、こんな時間に二人でどうしたんだ？…もしかしてお前たち付き合ってるの？」
白沢の一言で僕達は言葉に詰まり、お互いに顔を見合わせた後、
「いやいや違うって」
「ううん、ちがうの」
二人同時に答えた。僕達のその慌てぶりがよっぽど面白かったのだ

ろう。白沢は大声で笑う。
そうして、じゃれあうように再会を喜んで
「藤川、そろそろ行かないと…」という小笠原の控えめな声で、僕は沢西の事を思い出した。
「なんだよ、これから二人でどこか行くのか？」やっぱりお前ら…という白沢のからかう視線を受けながら、僕はうまく返事ができない。この時初めて、彼が白い制服を着ている意味を考えた。
「うん、ちょっとな。行くところがあるんだよ」白沢はもう神学校の生徒で、それならば、今から自分たちがやろうとする事—聖女に聖女を辞めさせるなんて事を許すわけがない。
白沢に対して隠し事があるというのは、少し心苦しかった。彼も僕達のそんな雰囲気を察したのだろう。それ以上深く聞こうとはせずに
「そうか、それじゃあまたな。今度会うときは飯でも食おう」そう言って僕たちを送り出してくれた。
そうして僕達は、白沢と、後片付けをしているミュージシャン達に背を向けて、駅のほうへ歩き出そうとした。
「ごめん白沢君、足が痺れちゃって。待った？」
その時、後ろから、そんな声が聞こえた。
僕はその女の子の声を聞いたとき、さっきからかわれた借りを返そうと思った。何だよお前こそ女の子連れてこんな所に来ていたのか、人の事言えないじゃないか…。
でも、隣にいた小笠原は、きっと何も考えられなかったんじゃないかと思う。後ろから聞こえた声の主を彼女はよく知っているのだから。
僕と小笠原、二人同時に振り返った。
白沢に話しかけたのは、どこかで見たことのある一人の女の子だった。
僕はその顔に中学時代の彼女の面影をみつけて、小笠原は自分の幼馴染だと確信して、二人とも立ち尽くすしかなかった。
綺麗な長い髪。優しそうな顔立ち。でも、目には強い意志がある。

穏やかだけど、決して自分を曲げる事のない光。
それは間違いなく、僕達が今から会おうとしていた沢西本人だった。
沢西も僕達に気がついたようで、驚いていた。それは偶然の再会を喜ぶ驚き方というよりは、まるで幽霊に会った時のような、できることなら出会いたくなかった、そんな驚き方だった。
沢西を見つけて呆然とする僕と小笠原、僕と小笠原を見て悔しそうに驚いている沢西。そしてそんな僕達3人の状況が飲み込めない白沢。
このとき4人の状況を一番理解していたのは、小笠原だったと思う。だからこの先何が起こるのかも予想は出来たはずだ。だけど、それを防ぐ手立てが、彼女には無かった。
「えっと、俺は沢西と買い物に来たんだよ。でも違うからな、俺達は別に付き合ってるとかじゃなくて…」しばらく続いた沈黙を最初に破ったのは白沢だった。3人の間に流れている空気からは場違いなほど、能天気な声だった。
僕は白沢の着ている服が白いことを確認して、白沢と沢西が、神学校の生徒と聖女が一緒にいる意味を考えた。これを偶然で片付けられるほど僕は楽天家ではない。白沢は、聖女計画の一環で沢西と一緒にいるのだと分かった。
それはつまり、沢西に聖女を辞めさせるという僕の考えに、白沢は敵対する立場にあるという事だった。

「白沢、お前知っているんだろ。沢西のこと」
藤川の搾り出すような声は駅前の雑踏にかき消される事なく、しっかりと白沢の耳に届いた。
白沢は少し考えてから「沢西がどうしたって？」そう答えた。まさか藤川が聖女の事を知っているとは思えなかったからだ。
「ふざけるな、沢西が…聖女だって事だよ」震える口調で、藤川は

そう断定する。
そこで白沢もいくつかの事に気がついた。
藤川は沢西が聖女だと知っている事。それを聞いても驚かない小笠原も、それを知っているだろうという事。そして、うつむいたままの沢西本人が、恐らく情報の漏洩元であろうという事。
「…まったく、それは極秘事項なんだけどな。何でお前…いや、お前達が知っているのかは聞かない事にするけど。絶対他の人に言うなよ」やれやれ、という感じで肩をすくめながらそういう白沢。
そんな白沢の軽い仕草に憎しみすらこもった視線を向けながら、藤川は問う。
「白沢、お前は教会がやろうとしている聖女計画に賛成なのか？」
「賛成なのか、って。当然だろう。教会が行う事だぞ。反対するのは異教徒か悪魔崇拝者くらいだ」
白沢のその答えに迷いや疑いは全く、ない。
「それは、たとえ犠牲になる聖女たち本人が聖女になる事を嫌がっていてもか？」藤川は自分でも固い口調になっている事が分かった。だがどうしても止められない。
「嫌がる？何を言ってるんだ。聖女っていうのは、天の遣いなんだぞ？それを天に還すというのに嫌がるはずないだろう？」
白沢はどこまでも本気だった。そこには冗談やふざけている様子はなく、本気で自分の意思を口にしている。そして藤川にはそれが何より腹立たしく、悔しかった。
「嫌がるはずがない？お前本気でそう思っているのか？」
その目にはさっきまでの友達に向ける優しい光はない。「自分以外の時間が進んでいくんだぞ？自分をおいて世界は回っていくんだぞ？それが嫌で怖くない訳がないだろう。ちょっと自分で考えればそのくらいわかるだろう！」いつの間にか藤川は右手を握り締めていた。そんな彼の叫びをきいて、あっけにとられている白沢。
「だから俺は、沢西を聖女になんてさせない。たとえそれが教会の決めた事であっても、だ」

藤川は白沢に対して、はっきりと意思表示をする。
最初は驚いていた白沢も、藤川の言っている事を理解した。その顔から笑みが消え、声からもさっきまでの暖かさは消えた。
「馬鹿かお前は。何度も言うように聖女は天の遣いなんだ。それを大いなる主の下に一時返すだけだ。本当はそれを彼女たちも望んでいるんだよ。それなのに何勝手に聖女にさせないだなんていっているんだ？これは先の時代のためでもあるんだよ」
冷静に答える白沢。しかし、
「先の時代のため？ふん、それは先の時代の教会（じぶんたち）のためだろ？」
という藤川の言葉に、一瞬何も考えられなくなる。
それを聞いた時に白沢の脳裏に浮かんだ景色。ぼろぼろになった家庭。家族3人で早退した学校。帰りの教会で食べたスパゲッティー。そして、翌日から再びまとまりだした家族―。
それを否定された気がした。
頭の中が真っ白になって、考えるより先に体が動いていた。藤川との距離を一瞬で詰めて、目の前の男の胸倉をつかみあげた。もともと白沢のほうが少しだけ背が高い。普段生活する分にはほとんど気にならないその差が、この時明確な差となっていた。
それでも、中学のときの親友に真顔で制服をつかまれても藤川は目をそらさない。白沢が本気になったというのなら、藤川は沢西の物語を読んだ時点で本気だった。
慌てて小笠原が止めに入るが、それでも2人は止められない。
彼らがいるのは、都会の大きな駅だ。帰宅する人、買い物をする人などで、駅前はかなりの人通りがある。その駅前の広場で高校生2人が胸座掴んでにらみ合っていて、しかも片方は神学校の制服を着ている。自然、2人の周りを避けるように人の流れが出来た。ほとんどの人は、彼らのほうを見ようとはしない。余計な事には係わりたくないのだろう。ごくまれに、立ち止まり野次を飛ばす者もいた。
「お前、今の言葉を取り消せ」掴んでいる力を緩めずに、白沢はそう迫る。世間では神学校の生徒を頭はいいが運動は出来ないと思っ

ている人がいる。だがそれは内部の事情を知らない者の勘違いだ。
体力も高校生の平均を上回っている。
藤川もそれを知っている。さらに、相手のことはもっとよく知っている。
「断る。俺はもう、自分を曲げることはしない」それでも、藤川はその要求に頷くわけにはいかなかった。
これ以上言葉を発したら相手との関係を壊すと、お互いに分かっていた。
小笠原はそんな2人をどうにかやめさせようと、白沢の手を掴んでやめてよ、と言っている。その目には涙が溜まり、声も震えていた。
「お前は本当に、沢西を聖女にしていいのか？」
少し見上げるようにして、藤川は目の前の男に問いかける。
「間違えるな、聖女になるんじゃない。彼女はもともと聖女なんだよ」白沢は見下げるようにして答える。やはりその声は静かで、言っている事は嘘偽りなく彼の本心だった。
その答えを聞いて藤川は覚悟を決めた。目の前の男は仲のよかった同級生じゃない。こいつは教会側の人間で、今の自分にとっては敵だと。
「それじゃお前に沢西は任せられない。今すぐこの手を離して俺たちの前から消えろ」
かつての友達からそう言われて白沢の目に驚きの色が浮かぶ。一瞬ゆれた彼の瞳は、しかしすぐに決意を持って固まっていく。
「お前はいったい何のつもりなんだ？沢西を救う？聖女にさせない？教会という大きな組織にはむかう正義の味方気取りか？ふん、ヒーローごっこがしたければ幼稚園にでも行けよ。
いいか、彼女は聖女なんだ。これからのこの国に、絶対に必要な人なんだよ。その意味を理解せずに安っぽい自己満足(エゴ)で彼女を救うなんて、二度と言うな」
藤川を掴んでいる左手に力が篭る。掴まれている方もそれが分からないはずはない。だがそれでも藤川は目をそらさずに、

「聖女計画はおかしい。
そして、―教会は、間違えている」
ハッキリと口にした。白沢の頭が意味を理解する前に、彼の体が動いていた。
左手に力が篭る。それは勢いで掴んでしまったさっきとは異なり、明確な目的があってのことだ。
右手が上がる。手首から先は拳を作っていた。
かつて相手との友好の証を確かめたその手を、今相手との決定的な溝を生むために使う。
白沢が暴力の構えを見せて、藤川は両腕で自分の顔を庇う。
そうしてお互いの視線が藤川の腕で遮られるまで、ついに二人は一度も視線を外す事はなかった。
白沢にとって、相手が顔を庇ってくれた事は幸いした。彼だって顔を殴るには少し抵抗が―もちろんそれで殴るのを止めたりはしないが―あったのだ。だが、ガードしているのなら問題ない。後は右手を全力で振りぬくだけだ。
振り上げられた右手が止まる。それは弓に引かれた矢の、放たれる直前に似ていた。
お前が神を冒涜するというのなら、俺はお前を許さない―。
もう二人の視線は交わらない。絶望的に互いを拒絶しあった2人をみて、
「もう止めて！」
小笠原の叫びが駅前に響いた。

「よし、そこまでだ」
僕はかつての親友に殴られるのだと思っていた。だからその声は自分には関係ないものだと思ったし、なにしろその声には全く聞き覚えがなかった。

しかしいつまでたっても白沢の拳は来ない。
そして腕を下ろした時、僕の視界には新たな人物が写っていた。
それは、スーツを着た2人の男だった。
一人は坊主頭にサングラスという姿をしていた。彼の右手は僕を撃ち抜くはずだった白沢の腕を掴んでいた。特に力んでいるようには見えない。が、全く動かない白沢の腕と、白い制服に食い込んでいる指がその尋常ではない力を伝えていた。
「やれやれ。無鉄砲は若さの特権だけどもう少し回りを見て行動しよう。周囲の方々が驚いているじゃないか」
どこか気の抜けたセリフをもらすもう一人の男は、少し長めの髪を綺麗に整えた、どこか白衣が似合いそうな雰囲気を持っていた。
けれどその時の僕には、沢西がそんな2人組みの後ろにいて、直接姿が見えなくなってしまった事のほうが問題だった。まるでこの2人は、沢西を僕から隠すように現れたようだった。
「高部さん…」
白沢はそう言って、自分の右腕を掴んだ男をみあげる。
高部と呼ばれた坊主の男は白沢よりさらに頭ひとつたかい。白沢とはどうやら顔見知りのようだ。だけど高部と呼びかけられた男は何も言わず、表情も変えない。そんな彼を代弁するかのようにもう一人の男が口を開いた。
「君の服装は目立つんだから、駅前の広場で喧嘩なんてするもんじゃないよ。もしやりたければ路地裏でやるんだね」そういいながら彼は僕の方へ顔を向ける。そうして
「悪いねお兄さん。何があったか知らないけれど、ここは彼を許してやってくれないか？」
それだけ言って、僕の返事を待たずに背を向けて歩き出す。「帰るよ」そう、坊主頭と白沢に短く告げた。
その言葉で高部と呼ばれた男も手を放し、彼の後に続く。
「……」白沢は何も言わず、黙って僕を掴んでいた左手を離した。そのまま僕と目を合わせることなく、2人について歩き出す。

その背中に、僕は声を掛けようとした。けれど、掛ける言葉が思いつかなかった。今の白沢に対して、何を言ったらいいのか分からなかった。
そうして、スーツ姿の2人も、白い制服を着た白沢も、いつの間にか沢西までもが、駅前に止めてあった車に乗り込んで、僕の目の前からいなくなった。人の流れはもう僕を避けようとはしない。その真ん中に小笠原と2人取り残された。目は赤いものの、彼女はもう泣いてはいない。
「どうして…」
僕のそんな疑問などお構いなしに、駅前の雑踏では、人と時間が流れ続ける。とどまる事はなく、刻々と変化する人ごみの中で僕と小笠原はただ立ち尽くしていた。
2年前の中学生の時は、僕達は似たもの同士だと思っていた。それは、僕の一方的な思い込みだったのだろうか。それとも2年の歳月の間に、変わってしまったのだろうか。白沢との距離が、こんなにも遠いと感じていた。

12 ― 沈黙の帰宅

相変わらず運転席に座るのは高部だった。当然助手席には富谷がいる。後部座席にはやはりいつもどおり白沢が座っていた。
いつもと違う点は2つ。
普段なら話し声が絶えない車内が静まり返っている点。
そしてもうひとつは、白沢の隣に座っている沢西だった。
さすがは高級車、ロードノイズは皆無で快適な乗り心地。だが、その静寂性は車内の静けさをよりいっそう引き立たせ、快適さに逆に居心地がわるくなる。
駅前での事件から、沢西はずっとうつむいたままだった。その様子から白沢は、藤川と小笠原が状況を知っていた原因は沢西本人にあるだろうと思っていた。そして、嫌な状況になった、とも。
藤川は沢西を聖女にさせないと言った。傍にいた小笠原にもそれを聞いて驚いた様子はなかった。あの2人の共通意見だろう。
しかしその意見にうなずくわけにはいかない。今の白沢は教会の関係者で、彼等2人は教会の敵だった。それでも白沢は、藤川達を脅威とは感じていない。どんなに騒いでも、高校生2人が教会のプロジェクトを止められるはずもない。
絶対に計画は続行される。
しかしだからといって、中学時代の友達と敵対するのはいい気分ではない。
自らの両手をボンヤリと眺める。頭の中は真っ白だったが、この左手が掴んだ胸座の感触を覚えている。この右手が作った拳の固さを覚えている。あの時、高部が止めに入らなければ間違いなく―。
「沢西様」突然助手席の富谷から声が上がる。沢西は肩をピクッと震わせたものの、顔を上げる気配がない。富谷は前を向いたまま続ける。
「本日はこのような失態を見せてしまい、誠に申し訳ございません。

無礼を承知で一言陳情させていただけば、今回こちらから遣わしました白沢があのような場面に不慣れな事が一因となっております」
白沢は驚いて何か言おうとする。が、結局何も言えなかった。今日の失態はまさに自分のせいなのだ。一層深く革張りのシートに体をうずめる。やはり富谷は後ろを振り返ろうともしないで続ける。
「本来であれば白沢を警護より解任し、新たな適任者を派遣するのですが。初回であるという事を踏まえ寛大なご判断をお願いいたします」
信号で車がとまる。そのほぼ完璧な遮音性を、これ以上内くらいの形で見せ付ける車。
「白沢君で、いいです」顔を伏せたまま、消え入りそうな声でそう沢西が言ったのは、再び車が動き出した直後だった。
「ありがとうございます。本来であればこちらから意見を申し上げられる立場に無い我々の意見を尊重していただいたその心に、必ずやお答えします」富谷のその発言を聞いて、白沢はほっとした。とりあえず今日限りで護衛解任という事態は免れたようだ。だが、
「ところで白沢。先ほどの状況、説明してもらえないか」その富谷の言葉に今度は白沢が体を震わせる。
俺が殴ろうとしていたのは中学の知り合いで名前は藤川ヒロキって言います。その隣にいたのはやっぱり中学の知り合いで小笠原マキ。2人は沢西が聖女だという事を知っていて、彼女を聖女にはさせないと言っていました。
というように、教会の者としてはここで何の迷いもなく本当の事を言うべきだ。そう分かっていても白沢はどうしてかそれをためらった。
「…駅前でストリートライブを聞いていたんです」
駅前であの曲さえ聴かなければ。
「曲が終わって移動を始めようとしたときに、私と沢西…様がはぐれてしまいました」
買い物に行くのが今日じゃなければ。

「そして…合流する間に彼等に絡まれました。
…相手は全然知らない奴で、金を出せ、といわれました」
藤川達をかばったつもりは無い。今はこれ以上余計なことを聞かれたくないだけで、結果として富谷たちに嘘をついただけだ。
「相手に面識は無く、突然金品の要求を受けたと。そういう訳だな」
富谷のその質問に、
「…はい、そうです」
白沢は嘘をついた。相手は中学の知り合いで、要求されたのは金品ではなく沢西だった。
そこで、車が止まった。気が付けば、沢西の家の前に着いていた。楽しい買い物のはずが、あんな事が起きてしまってそれどころではなくなった。
「沢西様、ご自宅に到着いたしました」
沢西が黙ったまま車を降りたのにあわせて、残る3人も車から降りる。
「重ね重ね、本日は誠に申し訳ありませんでした。以後はこのようなことが無いようにこちらでも考慮いたします」富谷は、普段の口調からは想像もできないほど敬語を使い慣れていた。
最後までほとんど口を開かず沢西は玄関をくぐり、3人はその姿が見えなくなるまで彼女を見送った。

「さて、僕達も帰ろうか」沢西の姿が完全に見えなくなってからそう言った富谷の口調からは、さっきまで彼女に使っていた敬語はきれいに消えていた。
そうして再び車に乗り込み、今度は白沢の家へと向かう。
「沢西様にはああいったけど」富谷が口を開いたのは動き出しから少しして、信号で止まったときだった。
「今日の事はあまり気にしなくていいよ。でも、今度からその格好で外に出歩く事は止めた方がいいだろうね」
「えぇ、そうします」答える白沢の声にも力が無い。いつもはよく

喋る富谷もそれきり口を開こうとはしない。いつもと変わらないのは高部だけだ。
車の中が静かになる。静かな事は悪い事ではない。だが、その静かさは白沢に余計な事を考えさせる。例えば中学の時のたわいもない話とか。テスト前にノートの貸し借りを賭けて小笠原たちとやったダブルスの試合とか。
そんな2人が、どうして今日敵対したのだろう。中学を卒業してから2年が経った。白沢にとってはまだ2年でも、もしかしたら藤川や小笠原にとっては“もう2年”なのかもしれない。
しばらくして、白沢の自宅に到着した。静かに動きを止める車。
「今日は色々と、すいませんでした」そう言ってドアに手をかける。
そんな白沢に、
「悪いが最後にもう一度聞かせてくれないか。今日絡んできた彼らに、本当に心当たりは無いんだね？」そう尋ねる富谷は前を向いているために、白沢から顔をうかがう事は出来ない。
「……ありません。あんなヤツは、知らない」そう答える時、心が少し痛んだ。それは嘘をついたからで、決して藤川たちを切り捨てたからじゃない。そう思い込む。
「そうか、何度も悪かったね。今日はお疲れ様。ゆっくり休むといい。それと後の事は気にしないでいい。あの騒ぎで警察が何か動くかもしれないけど、それはこっちでなんとかするよ」
無言で頭を下げてドアを開け、車を降りる。振り返ることもせず、急いで自宅の玄関をくぐる。
これ以上富谷たちと一緒にいたくなかった。とにかく、一人になりたかった。

「まいったね」
白沢の姿が玄関に消えたのを見届けてから再び動き出した車の中で、富谷はそうこぼした。その声にはいつもの陽気さはなく、心底疲れている声だった。

「何がだ？」そんな富谷に対し、前を向いてハンドルを握る高部はいつもと変わらない。
「白沢君。絡んできた相手を知らないって言っていただろ」
「ああ」
「どうしようかね…」
「だから、何がだ？」
そう訪ねてくる相方に富谷は、助手席から前を見つめたまま
「だって嘘だろ、相手を知らないなんて」
と、当たり前のように言った。
それに対して運転席から返ってきた答えは、
「当然だ。彼らの第一接触（ファーストコンタクト）を見ていた限り、あの４人が知り合いである事くらい分かるだろう」そして知り合いならば、我々に対して庇う動きを見せても不思議ではない。ハンドルを握りながらそう断言する高部。
この２人は常に白沢と沢西を監視していた。白沢に「報告はしなくてもいい」といった理由はそこにある。
当然今日の駅前での騒動も、最初から最後まで見ていた。そして、あんな場面を目撃してしまった以上、相手のことを調べないといけない。
「それはわかってるよ。だけどさ、白沢君の前では今日絡んできた相手の事を知らない振りをしないといけないだろ」
「私は堂々と、彼らの事を調べたと公言してもいいと思うが？」そういう高部の意見を
「そりゃダメだ。僕達はあくまで知らない振りを通すよ」
一刀の元に切り捨てる富谷。
彼は、車の中でぐったりしている白沢の様子を思い出す。いつもの白沢からは想像できないようなその姿は、一目で何かとても大変な事があったと分かった。
そんな彼が『相手は知らない』と言った。相手を庇うつもりか、それとも自分自身を騙すためか、おそらくその両方の為に白沢は富谷

達に嘘をついた。
けれど、富谷達はその嘘を見破り相手の素性を調べ上げてしまうし、白沢は自分を騙せないだろう。白沢の嘘は、全くの無意味だ。だが、それを本人に教える必要は無いだろう。富谷たちが黙って騙された振りを続ければ、白沢だけは自分の嘘に価値があったと思える。
「…それに僕たちはまだ『ただの送り迎え役』でいた方がいい」
「富谷がそういうのなら構わない。だがあえて一言言わせてもらおう」ハンドルを握りながら、やっぱり無表情で高部は言う。
「君はどうやら、白沢に肩入れしすぎている節がある。もし何かあった場合、その感情は君を傷つけるだろう」
そんな忠告を聞いて、富谷は肩をすくめて苦笑する。
「ありがたく頂戴するよ。けど何かあった場合ってのは想定しなくてもいいだろう。何も起こさないために、僕たちがいるんだから」

13－2人の決着

浅い眠りの中で、何度も白沢に殴られる夢を見た。そのたびに僕は目を覚まして、もう一度浅い眠りに落ちる。それを繰り返しているうちに夜が明けた。

朝起きて『悪夢のような現実』というフレーズが思わず浮かび、洗面所で鏡をみるとそこには、自分でも信じられないほど表情の暗い僕がいた。

朝食の時に家族から心配された。顔色が悪い、どうしたんだ、という両親の問いに何と答えたのか、よく覚えていない。

学校へ行くために家を出ようとて「今日は土曜日で学校は休みだろ？」と父親に言われた。同時に病院に行くか、とも聞かれたけれど、病気ではないと分かっていたから断って部屋に戻った。

週明けの月曜日からはテストがあるけれど、全く勉強をしていなかった。何も考えないまま机に向かいカバンを開ける。最初に目に付いたのは、見慣れないノートだった。自分のノートではない。表紙には「数学」、名前には「一瀬」と書かれていた。

昨日中に返す予定だったことを思い出し、焦っている一瀬の顔を思い浮かべて苦笑いをする。

そして、どうしてノートを返せなかったのか、その理由を思い出して僕は笑顔を消す。結局ノートを開かずに机を離れ、うつぶせにベッドに倒れこんだ。

本当に信じられなかった。中学時代の親友との再会、そして決別。一番会いたかった彼女との再会、そして別れ。

昨日、白沢と沢西が二人組みの男と共に駅を離れた後、僕と小笠原はどちらから言うでもなく家路に着いた。二人とも疲れていたし混乱していた。僕は家について、夕食も取らずすぐに眠ってしまった。何も考えたくなかった。

「なんで、あいつが…」

一晩中考えていた事を思わずつぶやく。
中学時代、白沢とはケンカもした。それでも僕達は同じ物を見て笑いあえた。中学時代の白沢ならば、今の教会が行っている聖女探しに疑問を感じたと思う。それとも、それすらも僕の思い込みなのだろうか。

昨日の一件で分かった事は、僕が沢西を助ける—聖女を辞めさせる—のに、白沢は敵対する事だ。僕は中学時代の友達を敵に回しても、沢西を聖女にさせたくないのかと自問する。
答えはすぐに出た。やっぱり僕は、沢西を聖女にさせたくなかった。
それに、傷つけてしまった小笠原との約束もある。
まずは白沢と会って話をして、決着をつけないといけない。
もし白沢が協力してくれるのなら、教会内部の動向がつかめるかも知れない。少なくとも僕よりは詳しいはずだ。
そうして、やるべき事は決まった。中学時代の親友で、今は教会側にいる白沢と話をつける。彼の家の電話番号は、中学の卒業名簿に載っているはずだ。
僕はベッドから起き上がり、携帯電話へ手を伸ばした。

その日、白沢は自宅にいた。土日は神学校は休みなので、わざわざ寮へ帰る必要もない。何も考えずに部屋のベッドに寝転んでいた。
昨夜は夢と現実を彷徨いながら夜を越えた。朝食の時に親と妹と顔をあわせたら、顔色が悪いと心配された。何と答えて切り抜けたのかはよく覚えていない。ついでに朝食をとった記憶もあやふやで、気がつくとこうして部屋で寝転んでいた。
いろいろな考えが浮かんでは消えていく。
—俺は、沢西を聖女になんてさせない
昨日駅前で藤川は確かにそういった。
—本人が聖女になる事を嫌がっていてもか？
嫌がるはずがない。選ばれた彼女たちは、もともと聖女なのだから。

全国の聖女候補たちは、誰もが聖女にあこがれている。
―お前本気でそう思っているのか？
本気だ。なぜなら教会のやる事だから。教会は人々に安らぎを与え奇跡を起こせるという事を、自分は小学６年生のあの日に身をもって経験しているから。
あの日、自分の将来が決まった。自分の行く道が見えた。だからそれ以来ずっと同じ道を歩いている。いつか自分も誰かを救えるように。あの日自分達を救ってくれた神父のように。
聖女の、沢西の警護を依頼されてうれしかった。ついに自分も教会側に立てた、あの日の神父と同じ側に来た、と思った。そして心のどこかでは、本当に聖女を狙う者が現れるとは思っていなかった。そんな期待は昨日打ち砕かれた。聖女を狙う者が現れた。そしてそいつは、中学時代の親友だった。
「…神様、これも試練なのですか？」ベッドに寝転んだままつぶやいて、しばらく返事を待ってみる。が、何も起きない。当然だ、神様はいないのだから。
そう思った時、家の電話がなった。
まさかこれが神様の答えか？そう考えて、しばらくじっとしている。少し経った後「タクヤ起きてる？」という母親の声が聞こえた。白沢の家は広くない。少し声を張れば端まで届く。
白沢は慌てて電話へと急いだ。この電話は神様が出した答えかもしれない、と思った。
受話器から聞こえてきた相手の声は聞き覚えがあった。中学時代は毎日聞いていた声。そして、昨日自分が殴りそうになった相手。藤川ヒロキ。今一番会いたくて会いたくない相手だった。

藤川は、中学校の体育館にいた。ここが白沢との待ち合わせの場所だった。
休日の今日、体育館には誰もいない。外はよく晴れていた。風が通り抜けるよう、入り口の扉は開け放ってある。

体育館の中は何も変わっていなかった。常設されているバスケットゴールも、ペンキが剥がれている重たい入り口の扉も、上から見下ろすように下がっている照明も。ただ、それでも藤川はその様子に懐かしさと、具体的に言えない違和感を覚えていた。この風景が、自分に対してどこか白々しいように感じてしまう。それは、自分がこの学校にとって部外者となった証にも思えた。
そして、きっと変わったのは景色ではなくて、自分自身なのだろうと思う。もう今の自分は2年前の自分ではない。そしてそれと同じように、白沢も変わったのだろう。
中学時代は同じ方向を見ていると—思っていたのに。
視線を落とすと、壁際に片付け忘れたバドミントンの羽をみつける。
「ちゃんとしまえよ後輩…」という藤川の独り言に
「そりゃきっと、先輩の教育が悪かったんだな」そう答える声がした。
「なに他人事みたいに言ってるんだ。お前もその先輩だろう」
振り向きながら、声がした方に拾ったシャトルを投げる。
綺麗な放物線を描いて、シャトルは声の主—白沢の手の中に納まった。
そこで藤川は昨日の様子を思い出す。白沢には味方になって欲しい。教会内の動きを知る事は、絶対に必要に思えた。
でも、もしそれができなければ。今は、その『もしも』を考えないようにする。もしこのとき藤川が鏡を見れば、驚くほど険しい顔をしている自分に気がついただろう。
そんな藤川を見て、白沢は苦笑する。「そう怖い顔をするな。俺だって今更殴ろうって気はないよ」
最後に今はな、と付け加え、藤川のほうへシャトルを投げ返す。大きく放物線を描いて藤川の手に戻ってきたシャトル。それは二人に、中学生時代を思い出させた。
「…お前、何で神学校へ行ったんだ?」だからこの質問は考える前に藤川の口からでていた。

もしお前が神学校へ行かなければ、今の俺たちはこんなことにはならなかった―。口には出さなかったが、その思いは白沢に伝わった。やや空白の後「…神父様になりたいからだ。それだけだよ」白沢はそう答えた。その空白で何を思ったのか、やはり藤川はわからなかった。

「お前がなりたい神父、いや、教会っていうのは、本当に人を救えるのか？確かに、いろいろなボランティアや寄付をしているのは知っている。そのおかげで貧しい人たちや、病気の子供が助かっている事も知っている。

でも、聖女計画は、あれはおかしい。彼女たちが眠りにつくことで、本当に今の人が救われるのか？」

「当然だ。そのための教会で、そのための聖女計画だ」

「そうは思えない。あの計画では誰も救えないし、何も救えない。今の教会が救えるのは、お金が救えるものだけだ。

この国の、そして世界の貧しい人々に、お金という形で手を差し伸べることしかできないだろ。いまこの国で普通の生活をしている俺やお前や沢西、そういう人たちを救うことは、できない」

そういう藤川に白沢は少し苛立ったようなため息をついて

「それはお前が、幸せだからだ」そう言い切った白沢の声は、今まで藤川が聞いてきたどんな白沢の声よりも、暗く、深い声だった。

「いいか藤川。人を救うために絶対に必要な物がある。それは、救う人と救われる人だ。救われる人っていうのは、不幸にある人のことだ。そして不幸な人は、俺たちの周りにもいる。確実に、それは存在している。

それを知らないのは、お前が幸せで、世間を見ていないからだ」

「そ、それでも。教会はそんな人たちを本当に救っているとは…」

「救っているんだよ。―少なくとも、俺は救われたんだ」

藤川は言葉を無くす。中学時代の親友だった者の告白。それは白沢が誰にも告げたことのない、彼の過去だった。

「俺が小学生の頃だ。父親が倒れて家庭がボロボロになった事があ

る。本当にひどい状態だった」その頃を思い出すかのように、瞳を閉じる。
「その時に、俺達家族は教会に救われたんだよ。今の俺の家族がいて、今の俺に帰る家があるのは、教会のおかげなんだ。これは例えや比喩じゃなくて、事実だ」
淡々と、物語を紡ぐような口調で語る。それは、そんな過去を乗り越えた証でもあった。
「だからお前のような、ろくな不幸もない奴が教会は必要無い、なんていう事は許さない。いいか、教会は必要なんだ。これまでも、そしてこれから先も」
そう言い切る白沢に藤川は、かつて無いほどはっきりと、自分とは違うと感じた。白沢の顔には強靭な意志が浮かんでいて、それは、彼が抱いてきた思いの強さであり、思いを抱いてきた年月の長さだった。
かつて藤川は白沢を、理由もなく自分と同じような奴だと感じていた。だが実際はどうだろう。目の前にいる彼は、自分とは全く違う。思えば、神学校へ行くという奴をどうして自分と同じなどと考えていたのか。
自らの進むべき道を、自ら選び、自らの足で歩む。白沢のその姿は、今の藤川がなりたい姿だった。
「だから、昨日みたいなことはするな。沢西は聖女で、眠りに就く役目があるんだ」
諭すような白沢の口調に、藤川の心が負けを認めそうになる。自分の気持ちが萎縮していくのがわかった。
「これはとても名誉な事なんだぞ？沢西は神の遣いだったんだ。俺たちも彼女と同じ学校に通っていたということを感謝しないと。そして、沢西たちが眠りにつくことで多くの人が救えるんだ。お前もわかるだろう。沢西を助け出すなんて筋違いなことを言うのは、もうやめるんだ」
藤川の心が、不意に畏縮を止めた。

「…一つ教えてくれ。眠りについて人々を救うというのは、本当に本人が望んだ事なのか？」
「何言ってるんだ？本人たちは望んでいるに決まっているだろう。何しろ主が遣わされた…」
「俺が聞きたいのはそんな教会の言い分じゃない。眠りにつく、眠りに就かされる彼女たち本人に直接聞いたのかって聞いているんだ」
「わからない奴だな、そんな必要は無いんだ。主が決めた事は絶対だ」
その一言で、藤川の折れかかっていた心に火がつく。
「…絶対って、なんだよそれ。あいつの、沢西の意思はどこにも入っていないじゃないか」
中学のときに交わした、本当に小さい約束にこだわった一人の少女。彼女は眠るのが怖いと、文章に託すしかなかった。彼女の想いが、教会側の言い分にはどこにも無い。彼女の気持ちを理解しようとしない教会も、その教会を妄信している白沢にも、藤川は怒りを感じた。
「眠りにつくということは、自分を残して世界が回るんだぞ。それを、怖がらない奴が本当にいるとおもっているのか？それを嫌がらない奴が本当にいると思っているのか？
いいか白沢。沢西は聖女になりたくないんだ。眠るのが怖いんだよ。なんでそんな簡単で単純なことに、お前が気づいてやれないんだ？」
今度は白沢が呆然とする番だった。さっきまでは大人しかった彼のどこに、これだけのエネルギーがあったのか。思えば、昨日駅で会った時から藤川の目は中学生の時とは違う輝きを持っていた。
「お前が言うように、教会は必要なのかもしれない。これから先、大勢の数え切れない人が教会によって救われるのかもしれない。でもな、そのために何の罪もない少女を生贄にささげていいって事にはならないだろ。
俺は、沢西の犠牲の上に成り立つような神を、神とは認めない」
立派になった。今自分が敵対している、自分に敵対している友人を

見て、白沢の心のどこかがそう感じている。中学の時の藤川は、周りに流される事が多かった。その藤川が、自分に対して堂々と意見を述べている。
だが、それでも白沢は折れるわけにはいかなかった。
「ふざけるなよ。救われるかもしれない、じゃない。救われるんだ、いや、救うんだよ。５年前に俺が救われたように、今度は俺が救うんだ。本当の意味で人を救えるのは、政府でも企業でもない。教会だけなんだ。聖女たちは、決して無駄に眠りにつくわけじゃない。教会が人を救うように、彼女たちは今の世の中を救えるんだ！」
「世の中を救うためなら、人を犠牲にしてもいいっていうのか？お前は、１０人を救うために１人を殺すことは正義だっていうのか？」
「成果を得るためには代償が必要だ！善悪とは別の次元なんだよ。お前は１人を殺して１０人を救うことは悪だっていうのか？」
誰もいない体育館に、２人の叫びが響く。どちらも一歩も譲らない。昨日のように暴力が振るわれる事は無かったが、お互いがこれ以上ないくらい痛みを感じていた。
「お前は、沢西は聖女になりたくないと言うけど。それを本人の口から直接聞いたのか？」
この質問に、藤川は一瞬返事を詰まらせる。
沢西が書いた物語の後書きを読んだ。小笠原から彼女の様子を聞いた。それが藤川の根拠だ。
彼女の物語を誰かに話す事には抵抗があった。だけど今は自分の全てを出さなければ白沢を味方にできないと感じていた。
「沢西が書いた物語を小笠原から受け取ったんだ。俺はそれを、そしてそこに書かれている後書きを読んだ。そこには聖女になるって書いてあった。そして、小笠原が言っていたんだ。沢西から物語を受け取る時、あいつ泣いていたって」
「直接沢西の口から聞いたわけじゃないだろ。なぜそれを真実と言い切れる？もしかしたらその話自体が小笠原の嘘かもしれない」
「ふざけるな！小笠原はそんなところで嘘はつかない！あいつがど

んな顔をして沢西の事を俺に話してくれたと思っているんだ！？」
「大体どうして沢西は小笠原に自分のことを話した？そもそも、どうして物語を沢西はお前に見せるんだ？そんな理由なんてないだろう！」
理由ならある。あの日交わした小さな約束。藤川はすぐに忘れたが、沢西はちゃんと覚えていた。
いつか物語を書きたいと言っていた少女がいた。その少女が見た小さな夢は、ほんの少しだけ形になり、藤川の手元に届いた。けれどその物語ができたのは、彼女が追い詰められていたから。
―今ならまだ助けられる。彼女はまだ、眠りについたわけじゃない。
「お前は小笠原を疑って、俺も疑って、そして沢西も疑った。それじゃあ今お前が信じているものは何だ？お前が言う神って、手を伸ばせば触れられる俺とか、声をかければ返事ができる小笠原とか、すぐそばにいて見る事ができる沢西とか、一緒に笑い会うことができる友達よりも、もっと信用できるっていうのか！？
触れる事も喋る事も見る事も、笑いあう事もできない神っていう存在は、お前にとって本当にそこまで、友達を犠牲にしてまで信じる、守る価値のあるものなのか！？」

体育館に静寂が訪れる。
白沢は、何も答えられなかった。
自分にとってあの日から、教会は絶対的な存在となった。だから、神とは守る価値のあるものか、という問いには迷い無くイエスと答えられる。
だが自分の中学時代の友達と天秤に掛けると、どちらに傾くのだろう。
彼が教会の人間を目指したのは小学校の頃で、中学入学前だ。時間で比較するならば、白沢は信仰を選ぶだろう。だが、過去とは時間がすべてだろうか。より遠い過去により価値があるとは限らない。
「……教会は。神は、全知全能だ。教会はどうしてもあり続けなけ

ればならない。だから、沢西には眠ってもらうしかないんだ。…決して、沢西が憎いわけでも、お前が嫌いなわけでもないんだ。中学時代がつまらなかったわけじゃない。勉強も、部活も、帰宅した後の家の様子も、大切な思い出だ。
でも俺は神学校の生徒だ。神に仕える事を誓った人間なんだ。今更、その誓いは破れない」
「でも、お前が仕える神ってのは、怖がっている少女を犠牲にして、その上に成り立とうとしているんだぞ？それでもお前は尊敬するのかよ？」
「彼女は、聖女だ。もともと神のそばにいた、聖なる者。神の元に返りたいはずなんだ…！」
「たとえ神が望んだとしても。彼女が本当に聖女だとしても、本当に沢西を眠らせれば世界が救われるとしても！……俺は、嫌なんだよ」
「……」
その告白に言葉を失う白沢。そして、藤川自身も自分の言葉に驚いていた。
「あぁ、そうなんだ。俺が、嫌なんだ。沢西が怖がっているとか、小笠原が泣いていたからとか。それより前に、俺が嫌だったんだよ。あいつが眠りについて世界が回るのならば、俺はそんな世界は要らない」
自分の大切な人が自分の元から離れていく。それはかつて白沢自身が味わいかけた恐怖。それを食い止めてくれた教会が、今度は違う誰かを引き裂こうとしている。
人を守るべき立場である教会が、人を引き裂こうとしている。その考えに至った時、白沢の中で何かが変わった。彼が長い間抱き続けた思いは、完全に硬化してしまっていた。目の前の親友が言った一言は、そんな固まった自分の根本を、少しだけ壊してくれた。
自分は、何のために神学校へ行ったのか。
自分がなりたいものは、神父か、神学校の生徒か。それとも、誰か

を助けられる何かか―。
「沢西を、救う？世界じゃなくて、沢西を救いたい？それで世界が救われないとしても…」
「あぁ、それでもだ。何度も言わせるな、沢西の犠牲の上に成り立つ世界なんて、いらない」
そこまで言い切れるのか。強くなったな。
目の前の親友を見て、白沢は心の底からそう思う。何が藤川を変えたのか、考えようとしてやめた。答えはすでに本人が口にしているではないか。
白沢は一度大きく息を吸い、吐き出す。そこで気が付いた。体育館の空気は、自分達がいた頃と何も変わっていないという事に。
「……まったく。本当にお前は、馬鹿丸出しだ。聞いてるこっちが恥ずかしくなる」全身の力を抜いて、今までの口調を一転させる白沢。その様子を訝しそうに見る藤川。白沢は重ねて尋ねる。
「一応聞いておくが、お前はこれから沢西をどうするつもりなんだ？」
「…どういう、意味だ？」
「そのままの意味だ。まさか、救うだの助けるだの言っておきながら何の考えも無いって訳じゃないだろうな？」
その白沢の問いかけに、藤川もすこしずつ彼の言おうとしていることを読み取る。
「……もし教会内部の情報がわかれば、なんとかなるかもしれない」
「なんだ、もともと俺がお前に協力する事は作戦のうちか？」
「それじゃあお前は沢西を…」
「まだ完全にお前の味方になったわけじゃない。本当に沢西が聖女になりたくないってわかれば、お前に協力してやる」
「本当か！？いいのか？だって、学校は」
「いいんだ、俺は俺なりに考えてるんだから。ただし、もし沢西が聖女になりたいって言ったらこの約束はなしだ。いいな」
「ああ、ああ！いいぞ、沢西が聖女になりたいっていったら、お前

は俺の敵になっていい」
そういって心底嬉しそうに、満面の笑みを浮かべる藤川。これで沢西を救う可能性が現実味を帯びてきたし、何よりまた白沢と同じ方向を見ることができて、本当によかった。
白沢はそんな藤川を見て微笑している。自分が本当に守りたいモノは、世界よりも、目の前の親友のような自分にとってかけがえのない人なんだろう。そう、気がついた。

「今沢西についている護衛ってのは、お前だけなのか？」
体育館の壁に背を預け、2人並んで座る。服装こそ私服だが、それは中学の部活を彷彿とさせる光景だった。
「ああ、今の所はな。これから先、増員されるかはわからない。俺が護衛に当たっていること自体が秘密事項扱いだ。だから学校の友達も知らない。それは、他に誰かが護衛していても俺が知らない可能性だってあるって事だ」
「そうか。でも、直接沢西と会って話をしているのはお前だけなんだろ。他に護衛者がいるってのは考えにくいけど」
「その辺はちょっと探りを入れてみる。計画の実行はその後でいいだろ」
藤川の計画は、実に大雑把だった。
まず、藤川が沢西をつれてどこか遠くへ逃げる。その間、不在がばれないように白沢は教会へ「沢西は風邪を引いて寝込んでいる、しばらくは外へ出られないだろう」と連絡を入れる。そして教会が彼女を迎えにくる直前に、「沢西が居ない」と騒ぐ。教会は大慌てで非常線を張り、警察も動員するだろう。それは逆に、そのときまでにどこかに身を隠し終えていれば安全でもあるという事だ。
そして実際に眠りにつく日。聖女計画の直前でまさか「聖女が一人攫われました」というわけにもいかないだろう。別の聖女を立てるか、もしくは何か理由をつけて11人で眠りにつくか。とにかく、眠りに就く日を乗り越えれば、その後に改めて眠らせるという可能

性は少ない。
その計画を聞いて白沢は
「やっぱり、俺が協力しないとこの計画は成り立たないじゃないか」
と言った。
藤川は「俺はお前が味方になってくれるって信じていた」と返した。
言ってから、半分くらいは本音だったと気がついたが、それは伝えないでおいた。

一般的な体育館は土足厳禁だ。それはこの中学の体育館も例外ではない。つまり、下駄箱があり、靴の履きかえを行うロビーがある。
藤川と白沢が会話をしている体育館の中から死角になる位置に、スーツ姿の二人の男が立っていた。
一人は長めの髪をしっかりと整えていて、どこか白衣が似合いそうな雰囲気を漂わせている。その顔はまるで、贔屓のスポーツチームが試合に負けたときのような、洗ったばかりの洗濯物を干している途中で地面に落とした時のような、聴きたくない話を聞いてしまったときのような表情を浮かべていた。
もう一人は、対照的に無表情。坊主頭にサングラス、そして大柄な体格と相当な存在感を漂わせている。扉の脇に立つその姿は、まるで仁王像のようだった。
体育館への入り口は開けっ放しのままだ。そして体育館というのは、声が反響しやすい。入り口のすぐ横に立っている二人の男に、中での会話は筒抜けだった。
「……」
「……」
ロビーの2人は無言だった。中からは話し声が漏れている。彼らにとって聞きなじんだ声が、教会の内部について語っていることが聞こえた。それは聖女に関わる教会の動きで、当然だが外部者に漏らしていいことではない。

「で、どうする？」
坊主頭が言う。横の男はすぐには何の反応も示さなかった。しばらくしてやれやれ、と首を振る。
「まったく…。面倒な事になったなぁ…」答える声もやはり小さい。
「再び聞くが、これからどうする？」
「どうしようかな…。さすがにこの会話を聞かなかったことにはできないね、教会の人間としては。だけどまさか、白沢君が裏切るとはなぁ」
「彼は若い頃の自分に似ているのだろう？」
「こうなることを予測できなかったのかってこと？確かに可能性の一つとしては考えていたけど。だけど、あくまで可能性の話だった。白沢君が本当に教会側から寝返るとは思わなかったよ。彼の過去を覆せる人なんてそういないからね。そういう意味じゃ、藤川君ってのもただ者じゃないね」
「確か藤川も沢西様と同級生だったな」
昨日の駅前での騒ぎの相手。教会の情報網で藤川のことを突き止めるのに、そう時間はかからなかった。
「さっきの会話からすると、白沢君も知らないところでどうも沢西様とかかわりがあったみたいだね。
いや、それにしてもさっきの会話。聞いた？あれ高校生の会話じゃないよ。善とか悪とか、幸せとかエゴとか…。どこかの討論番組よりもよっぽど中身が濃いじゃないか。己の全てをかけている感じだったし。いいよな、若いってのは」
「なんだ、耳が痛いのか？」
「いや、むしろ痛いのは心だよ。でも、あの二人は相当仲がいいんだろう。あんなに本音をぶつけ合える友達って、そういないからね」
「だが今回は」
「ああ、本音だから余計にまずいよ。藤川君は本気で沢西様を攫うつもりだし、白沢君も条件付きだけどそれに手を貸そうとしている。あの二人の計画が本当に上手くいくとは思えないけれど、それでも

そういう行動を起こされるのはまずいよな。僕達のためにも、藤川君のためにも、そして白沢君のためにもな」
「…では」
「まずいでしょ、とめなきゃ。まったく、気が進まないよ。これじゃあまるで僕たちが悪者じゃないか。中学時代の同級生を救おうとしている主人公たちの行く手を阻む悪役―。汚れ仕事には慣れているけれど、今回はさすがにつらいな。風貌からいくと、高部のほうが悪役っぽいと思うけど」
「安心しろ、お前も似合わない訳じゃない」
「はぁ、ありがとう。…じゃあそろそろ行きますか。
―聖女様の護衛は、僕たちのお仕事ですし、ね」

１４ー白沢の役目、本当の護衛者

「そういえば、昨日駅前でお前を止めた2人組みの男。あれは誰なんだ？」
僕が白沢にそう聞いたのは、沢西を助け出す計画を話し終わって、少し雑談をした後だった。
「あの2人か。俺に沢西の警護を依頼してきた教会の総務課の人だよ。坊主頭で大柄な方が高部さん。で、もう一人の喋っていた方が富谷さんだ」
「総務の人？」その時の僕は、思い切り怪訝な顔をしていたはずだ。
「そう言っていたけど？」そういう白沢の顔が、なぜそんな顔をするんだ？と言っていた。
「本当にあの人たちって総務課の人なのか？俺は教会の特殊部隊かと思ったけど」
あの2人が椅子に座って書類を書いて判子を押す、その様子を、僕はどうしてもイメージできなかった。
「なんだよその特殊部隊って。2人ともいい人だぞ」
そう白沢が言っても、僕は納得できなかった。だから
「じゃあ、何であの人たちは昨日駅前にいたんだ？」
という質問をすると、そこで白沢も僕の感じている不自然さに気がついたようだった。
「……たまたま近くを通りかかっただけじゃないのか？」そう答えながら、答えた白沢自身が全くそう思っていないと分かった。
「……だといいんだけどな」あの場所で教会の人が現れた。それを偶然と考えるか必然と考えるか。
「とりあえず今度会ったときにそれとなく探りを入れてみるよ」
「頼むよ。ちなみに、どんな人なんだ？」
「俺の前に現れるときはいつも2人だな。家と学校はあの人たちに車で送り迎えしてもらっているんだけど。運転するのは高部さん、

富谷さんは助手席だな。
探りを入れると言っても高部さんは全く喋らないから、情報を聞き出すとしたら必然的に富谷さんからって事になる」
そうなのか、と感想を話そうとしたとき
「やれやれ。もう少し褒めてくれてもいいんじゃないのか？」
体育館に、第三の声が響いた。

その声は、昨日駅前で聞いた声だった。隣に座っている白沢は、信じられないものを見るような顔で体育館の入り口を見ている。
つられて僕も入り口を見ると、そこにはスーツを着た2人の男の姿があった。
一人は坊主頭で体育館の中だというのにサングラスをしている。もう一人は長めの髪をしっかり整え、どこか白衣が似合いそうな雰囲気を持っていた。
「……どうして、ここに？」かすれた声で白沢が尋ねる。
長めの髪の男は、白沢のそんな言葉をさえぎって
「その前に藤川君に自己紹介させてくれ。こんにちは、はじめまして…じゃないね、昨日会っているから。こんにちは、藤川君。僕が、富谷だ。これからよろしくね」
富谷さんは笑みを浮かべながら僕を見て、そう言った。ということは、もう一人の坊主頭の、昨日白沢の腕を押さえた男が高部さんという事だろう。
白沢が言っていた、教会の総務課に勤めている二人。昨日駅前に現れ、白沢を止めて去っていった二人。彼らがこのタイミングで僕達の前に現れたという事に、嫌な予感がしていた。
「どうして、ここにいるんですか？」再び白沢が尋ねる。
「どうして、か。神のお導き、って事で納得するかい？」そう答えをはぐらかす富谷さんに僕は、
「あなた達は、本当は何者なんですか？総務課に勤めているなんて嘘ですよね」

はっきりと聞いた。
「…そうだね、確かに藤川君の言うとおり、僕達は総務課所属じゃない」
そう前置きして、富谷さんは自分たちの事を語り始めた。

聖女計画はこの国の教会にとって重要な計画だ。そしてその鍵となる聖女たちの警護もまた、非常に重要な事だった。聖女達に事前に告知が行われていることは教会内部でも限られた人しか知らない。だから聖女を警護する者達も極秘に集められた。富谷と高部が在籍する、存在が秘密のその組織には、与えられる名前もなかった。彼らはあらゆる手段を用いて聖女を護る。世間では誰が聖女か公表されていない。そのため、聖女であるという理由で狙われることは無い。
だから、彼らが警戒するべきは日常そのもの。
信号無視のトラックや、ナイフ片手に金を要求する少年達や、たまたま起きる災害など、誰にでも起こりうる日常の不運から彼女たちを護る。それは想像を絶する苦労だった。
誰を警戒していいかわからない。何を警戒していいかわからない。
いつ警戒していいかわからない。
だから、近づく者は誰でも警戒し、不審物じゃない物を警戒し、時計の針が動く限り警戒をした。
そんな彼らを見てある司教はこう言った。―彼らは運命から聖女を護っている、と。

白沢は富谷や高部のカムフラージュだったのか、というとそうではない。彼にも役割があった。事前に通知を行う事で、ストレスが聖女にかかる事は簡単に想像できた。そんな精神面の補助役を務めるのが、白沢の役目だった。それぞれの聖女のもとには、教会関係者でなおかつ聖女と過去に面識のある者が、表向きの警護者として派

遣されていた。だが、彼らの本当の目的は、彼女たちがストレスにつぶされないように支える事。—倒れる事を許さないために。
いわば白沢は鎖だった。沢西がストレスにつぶされないように支え、同時にどこかへ行かないように縛り付けている鎖。もっとも白沢にはそんな意識は欠片もない。彼は心の底から沢西を大切に思っていた。だが、支えると縛るとは、同義である。
この教会が用意した2種類の警護によって、聖女達は完全に守られながら日々を過ごしていた。

「君は沢西様の心を支え、そして私たちは体を護る。別に白沢君をだまそうとしたわけじゃない。ただ、言う必要が無かっただけだよ」富谷さんはそういって話を終えた。
「言う必要って…。そんなのは言い訳でしょう？一方的に黙っていられていい気分はしませんよ」そういう白沢に
「それでも、面と向かって嘘をつくよりはマシじゃないかな？例えば、中学時代の友達を知らない人だと言うとかね」笑って富谷さんは、白沢と並んで立っている僕を見た。
「…俺の言うこと、信じてなかったんですね」白沢の硬い声が響く。
「僕の歳になると人の嘘が判っちゃうんだよ。やっぱり沢西様絡みだとこっちも手を抜くわけにはいかないからね。もし聖女様に危険が迫っていたら、それを止めるのが僕たちの仕事だしさ」仕方なかったんだよ、と肩をすくめながら富谷さんは悪びれずに言った。
「沢西には危険が迫らないんじゃないですか？」
「普通はね。彼女たちのことは公開されていないから。だから、直接誰かに狙われるって事は無いよ。今回のような事態を除いてだけどね」
そういわれると白沢は押し黙るしかなかった。
彼ら2人が、秘密にされているはずの自分たちの役目について堂々と語るこの状況は、僕達にとっていいものじゃないという事はわかった。

「白沢君なら、なんで僕達がここに出てきたのかわかるだろう？」
「…一つ、確認させてください。いつから、その扉の前にいたんですか？」という白沢の質問に富谷さんは少し苦笑しながら
「そうだね…。ちょうど君達二人が後輩の文句を言うところかな」と言った。
「…盗み聞きしていたのですか？」相変わらず白沢は硬い声だったが、事態に対応し始めている。昔から彼はそうだった。部活の大きな大会でも、数分で会場の空気になれるその様子を僕は近くで見てきたのだ。
「人聞きが悪いよ。神の導きでここに来たら、偶然聞こえてきただけだよ」
「堂々と盗み聞きしましたと言ったらどうなんだ？」
富谷さんのあまりにも不真面目な言葉に、ついそう言ってしまった。いい加減、彼の受け答えにイライラしていたと言うのもある。
「聞こえたって事は、神様が聞かせてくれたんだよ。偶然じゃない。神様はサイコロ遊びをしないんだ」それでも富谷さんの答えは相変わらずだった。カッとなってさらに言葉を続けようとした僕より先に、白沢が口を開く。
「俺達の計画、当然止めますよね？」
「仕方ないよ。聖女様達に無事眠りについていただくことが僕たちの仕事だからね」
「何が眠りだよ。やっていることは拉致じゃないか」
「藤川君、僕達教会とどこかの独裁国家を一緒にするのはやめてくれないか？」本当に心外そうに、富谷さんは言った。
「どうやって俺達を止めます？拘束しますか？それとも、俺達も眠らせますか？」
「さて、どうしようかね。教会の内部に裏切り者が出た場合は全く想定されていないからね。とりあえず君たちの会話を聞いた以上、沢西様の警護を任せるわけにはいかなくなってしまった。白沢君は解任だ。

そしてこれから先、沢西様に近づいてはいけないよ」
「そんな子供向けの脅し文句で、本当に俺達が行動を起こさないと思っているんですか？」白沢の発言も熱を帯びてきた。
「そう熱くならないでくれ。別に馬鹿にしている訳じゃないんだ。そうだな、質問を質問で返すようで悪いけど一つ聞かせてくれないか。
藤川君は、沢西様が『聖女になりたくない』と言ったのを聞いたのか？」
その質問を教会の人が口にして、僕は平常心を保つ事ができなかった。
「何を言ってるんだ！？そんなこと聞くまでもないだろ！」
そういって富谷さんに詰め寄ろうとする僕を、白沢が止める。そして
「俺は直接聞いていませんよ。でも、藤川の話しでは沢西は聖女になりたくないそうです。今は、それを信じます」
「じゃあ、改めて藤川君に聞こう。君は沢西様が『聖女になりたくない』と思っている、そういうんだね？」
「ああ、そうだ。あいつは聖女になるのが怖いって思っているんだ」
「沢西様が聖女というのは公にされていないから、誰かが作った嘘、という可能性も低いだろうね」
そう言って富谷さんは少し何か考える素振りを見せてから、
「もし沢西様が『聖女になりたい』と言ったら、それでも君達は彼女の邪魔をするかい？」と言った。
「は？」
僕達2人の口から同時に同じ言葉が漏れる。富谷さんの言っている意味が分からなかった。
「だから、沢西様自身が聖女になるって言った場合だよ。それでも君達が計画を進めると、それはただの犯罪となってしまうんだけど…」
「ふざけるなよ、あいつは聖女になんてなりたくないんだ！それを分かろうともしないで自分勝手に沢西の気持ちを語るな！」

そう怒鳴りながら今度こそ本気で富谷さんに掴みかかろうとする僕を、白沢は後ろから羽交い絞めにして何とか抑える。
「あくまで沢西様は聖女になりたくないと、そういうんだね」
そんな僕の姿など気にしている様子見せず、富谷さんの口調は変わらなかった。
「くどい！何度も言わせるな！」そう怒鳴る僕に
「いやいや、誰かの為にそこまで本気で怒れる君がうらやましいんだよ。……全く、昔は僕もそうだったのかな。それすらもう覚えていない」
その言葉の中に少しだけ本心が混じっているのに僕は気がついた。少しだけ落ち着きを取り戻す。
「だから、なんだ。俺たちはお前達の言うことは信じない。だから俺達の計画も投げ出すつもりはない」
僕は目の前にいる富谷さんに向けて、はっきりと言い切った。
「ああ、そうだろうな。君たちが本気だって事はわかった」
そう言って富谷さんは僕たちにに背を向けて体育館の入り口へ歩き出す。気がつくと高部さんの姿はなかった。
「…どこへ行くんだ？」
富谷さんの行動に戸惑いながら問いかける。富谷さんは振り向かず、
「ここでこれ以上話しても仕方ないからね。会いに行こう」
「会いに行く…誰にだ？」
「沢西様だよ。彼女の口から、その真意を直接聞いてみるといい」
それだけ言って、体育館を出て行った。

15 ―僕と、彼と、彼女の再会

富谷さんについて体育館を出ると、高部さんが車に乗って待っていた。僕達が乗り込むのを待って、車は静かに動き出した。
運転席には高部さん、助手席には富谷さんが、後部座席の右側に僕が、その隣には白沢が座っていて、車内は緊張と沈黙に満ちていた。
「これからどこに行こうとしているんですか？」車が走り出してしばらくしてから、白沢が口を開いた。
「さっきも言ったとおり、沢西様のところだよ」助手席の富谷さんが少し僕たちの方を振り返りながら答える。一瞬、僕と目が合った。すぐに視線を外へと逸らす。車は橋を渡ろうとしていた。
「沢西の家とは方向が違うようですが？」
「鋭いね。確かに今向かっているのは沢西様の家じゃない」
富谷さんのその口調からは、僕たちに対する警戒、敵対心が全く感じられなかった。
「彼女は今、一時的にこっちで保護している。なにしろ君たちがとんでもないことを計画していたし、もし君たち以外に仲間がいたらちょっと面倒だかね」
そう答える富谷さんの言葉は嘘じゃないと思った。本当に、「ちょっと」面倒なのだろう。体育館で白沢に話した時に計画が漏れたのなら、僕達は何もできない。
そして、それ以上に僕は、富谷さんの『保護』という言葉が引っかかった。僕の中で最悪の想像がなされる。
「沢西は今どこにいるんだ？」つい、白沢と富谷さんの会話に割り込んでしまう。
もしも物理的に教会の監視下に置かれるような事になれば、僕の計画は不可能となってしまうだろう。彼女がいる場所で最悪な場所は―。
「彼女は今教会にいる。東京大聖教会だよ」

富谷さんの口から出てきた場所に、他ならなかった。
東京大聖教会の駐車場は地下にあった。教会と言っても、石造りで天井が高く屋根に十字架が刺さっているようなことはなく、雰囲気と外観は一流ホテルに通じるものがある。鉄筋コンクリート製で、地下2階地上7階建てだった。
高部さんは地下2階の関係者専用駐車スペースに車を止めた。エレベーターのすぐ近くで、要人警護に都合がいいらしい。エレベーターを待ちながら富谷さんに「君達はＶＩＰ扱いなんだよ」と言われた。
僕たち4人で最上階の7階へと昇る。沢西がいるのもそこだと聞いた。富谷さんは「やっぱりお姫様がいるのは最上階じゃないとね」と、どこまで本気で言っているのか分からないような事を言っていた。
今の階の表示が変わるわりに、エレベーターは全く浮遊感を感じさせなかった。動いている様子のない箱の中で僕は状況を、沢西を助けだす方法を考えていた。どんな方法なら、ここから沢西を助けられるだろうか、と。
けれど、もしかしたら白沢はこの先に起きる事を分かっていたのかもしれない。ただ、この時の僕はそんな彼の様子を気にする余裕もなかった。
動き出したときと同じようにほとんど減速感がないまま、エレベーターの表示は7を指した。静かに扉が開いて目の前の光景を見たとき僕は、高級ホテルに似ているのは外観だけではないと知った。
異常なほどふかふかした絨毯、映画やゲームの中でしか見たことがないような、間接照明に照らされた廊下と、そこに置かれた棚や花瓶。
その廊下を、富谷さんと高部さんは歩き出す。そんな2人に遅れないよう、そして気圧されないように僕も後に続いた。

一歩足を踏み出すたび、一つ角を曲がるたび、緊張が高まっていき、現実感が抜け落ちていく。現実と区別のつかない夢の中にいるような、地面に足がついていないような感じがするのは、決して絨毯だけのせいではなかった。この先、あと少しで僕は沢西と再会する。彼女にかける言葉も、かけた後の行動も、何も決まっていなかった。どうすればいいかは分からない。だけど、どうしたいかはわかっていた。ならば後は、その時の状況次第でどうにかしていくしかないだろう。

そう覚悟を決めたとき、一際立派な扉の前で富谷さんは立ち止まり、僕たちの方を振り向いた。

「この扉の向こうに、沢西様がいらっしゃる。本当なら君達2人と沢西様の3人で話をさせてあげたいんだけど、規則があってね。悪いけれど僕達も同席させてもらう」

「今回は、扉の外で盗み聞きしないんだな？」つい富谷さんに噛み付いてしまうのは、緊張している証だった。隣で白沢が心配そうな顔で僕を見る。中学時代同じ部活で大きな大会に出場していた彼には、僕がどれだけ緊張しているか分かっていたはずだ。

「体育館のことは仕方がなかったんだよ、ちょうど僕たちが行った時に君達が話し始めたから、入るタイミングを逃したんだ。それとこの部屋だけど、中には監視カメラとマイクがある。死角はないし、音だって拾っている。当然、おかしな行動をすればすぐに警備員が来るから、あまり無茶はしないでね」

「なんでそれを俺たちに教える？その話が本当だという証拠は？そういう話をする事で、俺たちの行動を牽制しているんじゃないのか？」

「牽制ねぇ。まあ信じる信じないは藤川君達の自由だからなんともいえないけど。何にせよ、僕たちも一緒だから、無茶はさせないけどね」

そういって富谷さんはきびすを返す。

「それじゃ、そろそろ感動の再開といきますか」

そういって、目の前の扉に手をかける。
扉を開ける寸前、前を向いたまま
「その目で、耳で確かめるといい。彼女が本当に望んでいる事をね」
富谷さんがそう呟いた気がした。

部屋の中は豪華な会議室のようなものだろうという僕の予想は裏切られた。そこは会議室ではなく、ホテルのスイートルームだった。
室内の広さは学校の教室程度はあり、僕は始めて『鏡のように磨き上げられた大理石の床』を見た。入り口の扉と反対側の壁は一面が窓になっているようだが、今はカーテンが閉められていて外の様子は見えない。壁際には棚と、その上には蝋燭を模したランプが乗っていて外の光が入らない部屋の中を落ち着いた色に染めていた。
部屋の中央には花瓶が乗った大きめのテーブルと、それを取り囲むように黒いソファーが据えられていた。
そして、入り口から一番遠いソファーに、彼女が座っていた。
白のブラウスに黒のスカート。おそらく彼女の物ではなく、教会が用意したのだろう。派手さはない、簡潔といっていい服装だが、悔しい事に彼女によく似合っていた。
彼女は顔を伏せている。その長い髪に隠れて、表情はうかがい知れない。
「沢西様。藤川、白沢の両名を連れてまいりました」
さっきまでとは一転した口調で、富谷さんはそう言った。
その声で、伏せていた顔が上がる。僕たちを見て、すこしだけ悲しそうな笑みを浮かべて
「やっぱり、来ちゃったんだね」
と言った。それが、中学を卒業して初めて僕にかけられた、沢西からの言葉だった。

僕が１７歳になったように、白沢が１７歳になったように、沢西もまた１７歳になっていた。

駅前ではよく見えなかったその顔は、中学時代の面影を残してはいるが、やはり中学の時とは変わっていた。こんなことは決して口には出せないが、『かわいい』が残る中学時代から『きれい』という表現がしっくりくるような。そんな成長だった。
何と言えばいいのか分からず入り口のところで立ちつくす僕たちに、
「そこに座って」と沢西がソファーを勧めてきた。僕たちは彼女と向かい合うように、ソファーに座る。
富谷さんと高部さんは、入り口の扉の両脇に立っている。それは部屋を守る兵士のようでもあった。
彼女を前にして僕は、何から話し始めればいいのか分からなかった。しばらくの沈黙の後。やがて沢西はふっと笑ってから
「どうしたの、二人とも。何か言ってよ」
と言った。僕達はそれで顔を上げて沢西と目を合わせ、少し照れくさそうに笑いあった。その時は、その時だけは僕達は同じ中学を卒業して2年ぶりに会う、ただの同級生だったと思う。
「白沢君、今日は何をしてたの？学校は休みでしょ？」
そう、沢西が尋ねる。
「あぁ、神学校だからね。週に2日は休めるんだ。神様が作った休みの日だからね。今日は藤川と会ってちょっと話をしてたんだよ」
そこで彼女は「何の話？」とは聞かなかった。それを聞けば今の雰囲気が壊れるとわかっていたのだろう。
彼女は今度は僕の方を見て
「久しぶりだね、藤川君。卒業して以来かな、こうやって会うのは」と話しかけてきた。それは数週間ぶりに会った時のような気軽さで、昨日の事など無かったかのようだった。
「ああ、久しぶり。卒業してからだから、2年ぶりになるな」僕も普通を装って答える。けれど、心の中では全然違う事を考えていた。
―どうしてそんなに普通なんだ？
どうしてこれから聖女になるのに笑っていられるんだ？
あの物語をどうして俺に渡したんだ？

「そっか、もう卒業して2年経つんだよね。なんだかそんな気は全然しないけど、あと1年で高校生活もおしまいだしね。ねぇ、二人は卒業後の進路って決めてるの？」
中学時代にも、同じような会話を同じようなメンバーとした事を、その時感じていた未来への大きな不安と小さな期待を、一緒に将来の話ができる仲間がいる事の安心感を、そして、それがどんなに幸せな事だったのかを、僕は思い出していた。
「俺はそのまま大学部へ進むつもりだよ」そして、いつか神父になるんだと、白沢は迷いのない口調で言った。
彼はいつもそうだった。自分のなりたいものをはっきりと見据えていて、それに向かって迷わず歩ける、そういう奴だった。そんな所も中学時代と変わっていない。
僕は、まだ高校の先のことなんて考えていなかった。自分の学力にあった大学へ入れればいいと思っていた。
だけど、この時僕は違う、もっと抽象的な事を考えていた。それは大学へ行くより大切な、だけどうまく言葉にはできない感情だった。
黙っている僕に2人の視線は集まる。
「…まだ俺は何も考えていないんだ、高校を卒業した後のことって。とりあえず自分がいける大学へいければいいって思ってる」
「なんだよそれ、確か中学の時も同じような事言ってただろ？」白沢は笑いながらそう言った。
「そうなんだよ。俺、中学からあんまり成長していないんだな。やりたい事は高校に入れば見つかるかもしれない、って思っていたけれど、そんなことはなかった。ただ毎日を流されるように生きているだけだったんだ。やりたい事、なりたいもの。そういうのが見つからないんだ」
どうしてこの時僕は、無防備と言っていいほど正直に自分の事を話せたのか、今でも分からない。
「でも、今日こうやって二人に会えて、一つ感じたことがある。どこへ行って何をしても、昔の仲間と会うときに笑顔でいられるよ

うな、そんな生き方をしたいって」
この時、自分の大切な仲間に聞いてもらって、この言葉は僕の誓いになったんだと思う。
「昔の友達に会った時に、お前変わったなぁって言われても、心の中、どこかでは昔の面影を残しているような、自分らしさを持っていたい。それさえなくさなければ、俺はどこへ行っても大丈夫だと思うんだ」
沢西も、白沢も、何も言わない。それぞれが何かを考えているようだった。
「沢西も今日久しぶりに会ったけど、変わったようで変わってなかったな。すぐに沢西だって分かったよ」照れ隠しも込めて、そんな事を言った。沢西は笑いながら
「なにそれ、成長していないって事？ひどいなぁ、これでも成長してるんだからね」と言った。そして
「…でも、すぐに私だってわかるって言うのなら、成長しないっていうのもいいかもしれないね」と、何気ない一言のように付け加える。
まだ世間話を続けるのかと思っていた。まだ同級生のままでいたいと思った。けれど彼女のその一言が場の空気を変えた。

「沢西、今日会いに来たのには理由があるんだ」
そんな事を言うまでもなく、なぜ僕たちがここに来たのか、沢西はその理由に気がついているはずだ。それでも彼女は、笑みを浮かべたまま何も言わない。
聖女になるな、やめてしまえ、お前が犠牲になる事は無い、泣くな―。
僕の中で感情は渦を巻き、意味を持った言葉がでない。気持ちが焦る。
そんな僕の隣から、白沢の静かな声が入った。
「俺は、教会の立場で今まで沢西に会っていた」

それは僕と沢西に語っているかのようにも聞こえたし、独り言のようにも聞こえた。
「教会の人にとって、聖女に選ばれるということは最高の名誉だ。だから、聖女になりたいと願う者はいても、聖女になりたくない人なんて想像することもできなかった。
それに俺は、沢西のもとに行くようになってからも、普通に生活しているようにしか見えなかったんだ。
だから信じられないんだ。藤川が言った、『あいつは聖女なんかになりたくないんだ』という言葉が」
そこで、白沢は口を閉ざした。俺が言いたいことはそれだけだ。態度がそう告げていた。
次は、僕の番だ。
「話、読んだよ」
沢西は何も言わない。
「あの日の約束、まだ覚えていたんだな。ごめんな、俺は忘れていたよ」
黙ったまま顔を伏せてしまい、表情を伺い知ることは出来なかった。
「あのメモリーを受け取るとき、小笠原から聞いた。沢西、泣いていたんだろ？本当は聖女になるのが怖いんだろ？
それなら、そんなものになるなよ。無理する事はない。俺は誰かが犠牲になることで手に入る幸せなんてものは信じないんだ」
そして、
「一緒にここから出て行こう。俺と白沢が何とかするから」
その言葉に、沢西の肩が一瞬震えた。けれども顔を上げたり、何かを言う素振りは見えなかった。
まだ迷っている。その時の僕には、沢西の様子がそう見えた。だからその迷いを吹き飛ばしてやらないと。僕も白沢もとっくに覚悟はできているんだ。
そうして僕が口を開こうとしたとき、沢西は顔を上げた。
その顔は、うれしそうで、寂しそうで、悲しそうで、まるで泣いて

いるように笑っていた。

「ありがとう、二人とも」

そう言う沢西の目に涙が浮かんでいた気がしたのは、僕の見間違いじゃないはずだ。

「私の物語を読んでくれた藤川君、そして藤川君に協力してここまで来てくれた白沢君。二人が、ここから出て行こうって言ってくれた事。本当にうれしいよ」

細い指が涙を拭う。そんな彼女の言葉を、僕達は黙って聞いていた。

「本当の事を言うとね。うん、やっぱり聖女になるのは怖い。目が覚めたときに、私の知っている人がいなくなっているんじゃないかとか。

目が覚めたときに、私を知っている人がいなくなっているんじゃないかとか。

夜寝る前にそういうことを考えちゃうんだ。そうすると、寝るのが怖くなって。もしかしたらこのまま起きないんじゃないか、起きたら世界が変わっているんじゃないかって考えちゃう」

それが、沢西の本音だった。そしてここは、豪華な牢屋だ。ここから彼女を連れ出さなければ。僕はそう思った。

「それじゃあ一緒に行こう。俺たちが何とかしてやる。絶対に沢西を聖女になんかさせないから」

僕はそういいながら扉を、扉の横に立っている二人の男を見る。

単純に腕力勝負では勝てる見込みは少ない。富谷さんはともかく、高部さんは昨日駅前で白沢の腕を押さえていた。自分と白沢二人掛かりでも、高部さん一人を取り押さえられるかわからない。さらに富谷さんの実力はゼロではなく未知数だ。ならば、残された手段は—

一瞬でそこまで思考を回転させた僕だったが、

「でも、私は聖女になる。ここから逃げるわけにはいかないんだ」

一瞬、彼女が言った意味が理解できなかった。

「それは、どういう事だ？」

僕のその問いに、沢西は
「私にはね、お父さんがいないの」
突然何を言い出すんだと、その時の僕は思った。
今考えるとそれは、彼女なりの誠意だったのかもしれない。自分のために神に背を向けた僕達二人に対する、彼女の誠意。
「ずっと昔、私がまだ小さい頃に離婚したの。だからほとんどお父さんの記憶ってないの。ずっとお母さんが私と、弟を育ててくれた。お母さん、本当に大変なんだよ。娘の私から見ててもそう思うくらい。この国で、母親だけで子供二人育てるのがどれだけ大変か。だから、時々教会のお世話になったりしていたんだ」
「……その恩返しに、教会のいう聖女になろうって言うのか？」
少し白沢の事を考えつつ、僕はそう聞いた。沢西の家庭は、もしかしたら白沢がそうなっていたのかもしれない姿だった。
「だとしたら、余計にお前は聖女になるべきじゃない。お前が家族を離れたら、残された方がどんな気分になるかわかるだろう？大切な家族がいなくなる悲しさを、もう一度味あわせるつもりなのか？」
そういう僕の言葉に
「あのね藤川君。この国で子供を育てるのは、とても大変な事でね。『一家三人で苦労を共にして貧しいけれど幸せに暮らしました』なんていうドラマみたいにはいかないの。確かに家族が離れ離れになるのは悲しい事だけど、それでもそうしないといけない、それが最善の道だっていう場合があるんだよ」
まるでできの悪い生徒に優しく諭すように、沢西はそう答えた。
口調は優しいのに僕は、お前のように一家全員が不自由もなく暮らしている奴にはこの苦労はわかるまい、と言われたような気がした。
「もうすぐ弟が受験になる。私だって大学へ行きたい。きっと弟も大学へ行くと思う。そうなると、もうお母さん一人じゃ限界なんだ。二人とも大学へ行かせるなんて、出来ない。でもうちのお母さんは、そんな事は言わないと思う。一人で頑張って、最後は倒れるまで働くと思う。それでも、お金は足りないんだよ」

突然始まったお金の話に、僕は少し戸惑う。それに比べて、白沢はどこか納得した顔をしていた。
沢西はそんな僕に構う様子を見せず、話を続ける。
「聖女は、この世を許してもらうために、いつ覚めるとも知れない眠りにつく。彼女たちはもともと神が地上に遣わせた自らの分身であるため、眠りにつくというのはもとの世界に帰るということ。だから、教会側から眠りにつく代償は一切支払われない、という事になっているでしょ」
今更何を、と言いかけた僕の言葉を沢西の言葉がふさぐ。
「でも、実際は違うよ」
それはまるで、罪を糾弾するような鋭さが含まれていて、僕は何もいえなかった。沢西は視線を白沢へと移す。白沢は厳しい顔をしていた。もしかしたら彼は全部わかっているのかもしれない。
「私が聖女になるでしょ。そうするとお母さんは『娘は聖女だ』って言えるの。その肩書きはとても大きいよ。教会が行う様々な奉仕行為の優先的な受領、一般的な人からの尊敬、信頼。信仰の厚い人からはお布施も貰えるかもしれないね。そして、教会関連施設への働きかけもできるようになるでしょ。
分かりやすく言うとね、衣食住の全部を教会に任せることができるようになるんだよ」
つまり、世の中の為に眠りにつくなんて、全くの嘘で。
自分の為に、自分の家族の為に眠りにつくという。教会へ貸しを作るために。あくまで自分の為に、眠りにつく。彼女が言いたい事は、そういう事だった。
「だからね、私は聖女になるの。これは私が決めたこと。ここから逃げることはしない」
静かに、だがはっきりと沢西は言い切った。
「…お金がないなら、俺が何とかしてやる」
それでも、ここまできたら引き下がるわけには行かなかった。彼女を助けないでここから立ち去るなどという選択肢は、僕の中で存在

すらしていなかった。
「バイトでも奨学金でも、うまくやる方法を探せばきっと、何とかなる。俺もバイトするから。だから、眠りになんてつくな。家族が大切なのはわかるけど、だからってお前が犠牲になることはないだろ」
「駄目だよ。奨学金とアルバイトだけじゃカバーしきれない。それに、私は藤川君からお金は受け取らないよ」
「どうしてだよ、俺がいいって言っているんだから、気にしなくていいんだぞ。それでお前が眠りにつかなくなるのなら…」
「ううん、違うの。お金を貰ったら、私たちは今の関係じゃいられなくなるよ。おかしいでしょ、友達なのにお金をあげたり貰ったりって。お金が絡むとね、関係に上下ができる。それを埋めようと、対等な立場になろうと思ったら何かを売るしかない。
―藤川君、私を買う？」
その質問を、本当にさらっと、何でもないかのように口にする。
「そんな訳ないだろ！俺は、別にそんなつもりで言ったんじゃなくて…」
彼女はきっと、僕と同じように「眠りに就くな」という人がいたら同じ質問をするだろうし、もしその時の相手が首を立てに振ったらと考えると、ひどく悲しくなった。
彼女は自分を売ってまで家族の負担を減らそうとしている。彼女にそう強く決意させるだけの状況が、環境が、悲しかった。決して誰が悪いわけでもない、沢西のお父さんやお母さんが悪いわけでも、大司教様がわるいわけでもない。やり場のない悲しみだけがあった。沢西の決心は固い。自ら聖女になろうという彼女を止めることはできないのだろうか。彼女の事を考えると、彼女の言う通り眠りに就く事が最善なのか。
助けようと思って、小笠原に泣きながら怒られた。
助けようと思って、白沢に胸倉を掴まれた。
助けようと思って、小笠原を説得した。

助けようと思って、白沢を説き伏せた。
そうしてようやく沢西までたどり着けたのに、その本人が助けられたくないというのなら。今まで僕がやってきた事はなんだったのだろうか。
何が善くて何が悪いのか。彼女の為には、どの選択肢が正解なのか。それとも、最初から正解の選択肢は無かったのか。
「やめてくれ、そんな簡単に、眠りにつくなんて言わないでくれ」
悲しさと悔しさでこぼれそうになる涙を、僕はうつむいて何とかこらえる。彼女にはもう何を言ってもだめだと、分かってしまった。だけど、まだ一つだけ伝えていない事がある。その時分かった。僕が一番伝えたかったことは、たった一言。
「…俺が、お前を眠らせたくないんだ」

その時僕はうなだれて、きつく目を閉じていた。
だから、沢西がこの部屋に入ってからずっと浮かべていたどこか悲しげな、諦めたような笑みを消して驚きの表情を浮かべているのを、一瞬だけ垣間見せた、彼女の素顔を見ることは出来なかった。

少ししてから、やっぱり沢西は悲しそうな笑みを浮かべて、
「本当はね、こんな風になるとは考えてなかったんだ」
そう言った。その言葉に少しだけ満足そうな感情が浮かんでいることに気がついて、僕は顔を上げた。
「あの話を藤川君に渡したのは、助けを求めたからじゃない。あなたに見せたかっただけ。
中学生の時に交わした約束。それが私には、とても大切なものだった。
これから聖女になって長い間眠りについても、私の書いた物語だけは残るでしょ。私が眠っていても、私が残した物は世界に置いてきたって思えれば、安心していられる。私と世界はまだ繋がっているって感じられる。

そしてもし、みんながまだ生きている間に私が目覚められれば、そのときに感想を教えてもらえれば、眠っているだけだった時期、眠っているだけだった私でも何か世界に対して出来た事があったって、そう思える。
…まさか、こんなに早く感想を教えてもらえるとは、思ってなかったけどね」
そうして沢西はソファーから立ち上がり、窓のカーテンを開けた。建物に入ってからだいぶ時間が過ぎていたようで、外は日が沈みかけていた。この高い建物の最上階から、黄昏の町が見える。建物がオレンジ色を反射して、幻想的な雰囲気だった。部屋の中もオレンジ色に染められる。
「聖女として眠りにつくのは、私の仕事。それなりの代償を求めているんだから、嫌でもやらなければいけないことなの。だいたい仕事って、嫌で面倒な物でしょ？そんなに悲観する事じゃないよ。それに、この綺麗な夕日と世界が守れて、私の家族が安心して暮らせるのなら。それは、私の時間をかける価値があると思わない？」
僕は、その質問に答えられなかった。
ただ、オレンジ色の逆光の中で微笑む彼女は神に祝福されたようにも見えて、とても美しかった。

「ここまで来てくれて、ありがとう。白沢君が守ってくれたから、藤川君が勇気をくれたから、私はもう大丈夫。聖女になっても、2人の事を思い出す。眠っている間も、私の書いた物語は眠ってはいないって思える」
お互いに言いたいこと、言うべき事は全て言い終わって、これが彼女との最後の会話になると思った。
「じゃあ、沢西は聖女になって、これから眠りにつくんだな？」
「うん、もう決めた事だから」
「俺たちが何を言っても、やめる気はないのか？」
「…ごめんなさい、でもやめる気は無い。言ったでしょ、これは仕

事なんだって。報酬は破格なんだから」
最後にそう冗談を言う。そんな笑えない冗談が悔しくて、悲しくて、
「そうか。それじゃあ、お前は聖女じゃないな」
言葉に冷たさを含ませて、僕は断言した。
沢西は一瞬言葉に詰まってから、
「なんでそう思うの？」そう言った。
「この世界のために、自らを犠牲として眠りにつく者。それが聖女、だろ？」
僕は視線を白沢に投げかける。彼も無言で、力強くうなずいた。白沢の顔には、「お前の言いたい事は分かっている」と書いてあった。どうやら僕と白沢は2年間離れていても、相手が何を言いたいのかわかる程度にはお互いの事を理解し続けられたようだ。
「お前は違う。自分のために、自己の利益のために眠りにつこうとしている。眠りに就くことを仕事だと言い、さらに教会から利潤を受け取ろうという下心がある奴を、聖女とは呼べないだろう。だから俺は、お前を聖女とは呼ばない」
そこでいったん言葉を区切る。
「沢西、お前は普通の女の子だよ。聖女なんていうよくわからない存在じゃなくて、泣いたり怒ったり笑ったりする、自分を犠牲にしてまで家族を救おうとしている、そんな普通の、立派な女の子だ。日本中がこれからお前を聖女と呼んで敬うだろうけど。でも俺は、俺と白沢は絶対にそんな事はしない。誰がなんと言おうと、お前はお前だからな」
今度はちゃんと、沢西を見ながら言い切る。
沢西は驚いたような顔で僕を見て、つぎに白沢の顔を見て—白沢も「当然だろう」という顔をしていた—もう一度僕を見た。
そして、うれしそうに深くうなずいて
「うん、ありがとう。私もその方がいい」
そう言う彼女の頬を、オレンジ色の光の粒が伝っていた。

そうして、来た時と同じように４人でその部屋を後にして廊下を歩く。結局、沢西を連れ出すという目的は果たせなかった。
これでよかったのだ、という理性と
これでよかったのか、という感情が僕の中で暴れていた。
本当ならば、力ずくでも連れ出すべきではなかったのか。彼女が眠りについたら、次にいつ会えるかわからない。今なら、たった数メートル駆け戻るだけで会えるのに。
けれど彼女自身が聖女になる事を望んでいた。それがたとえ家庭環境のせいだとしても、彼女自身の望みならば止めることはできない。
来た時と同じように、４人で車に乗り込む。
静かにエンジンがかかり、オレンジから群青へと色を変えた街へ車は走り出した。教会から離れていく最中、後ろを振り返る。
最上階の一番端の部屋、彼女のいたその部屋には電気がともっていた。こうして彼女から遠ざかっていくと、何か自分が大きな間違いを犯したのではないかという考えが僕を苛んだ。
帰りの車内は、来たとき以上に静かだった。
誰も、何も話そうとしない。富谷さんも、部屋を出てからは一言も口を開かなかった。
それは、散々教会を悪く言って結局沢西を連れ出せなかった自分たちを気遣っての事か、
それとも、散々教会を悪く言って結局沢西を連れ出せなかった自分たちを軽蔑しての事か、僕にはわからなかった。
そうして、僕の家についた。どれくらい車に乗っていたのか、時間の感覚がなかった。１時間乗っていた気もするし、５分程度だったようにも感じた。
「ついたよ、藤川君」
静かに車が停まり、富谷さんがそう話しかけてくる。
無言で車から出て行こうとする僕に、
「分かっていると思うけど、今日の出来事は誰にも言ってはいけないよ。自分の心の中にだけ、とどめておいてくれ」

今更何を、と言いたかったが、そんなところで気力を使いたくなかった。会話というのは、想像以上に気力を使うものだ。軽く頷いてから、無言で車を降りる。外はもう夜だった。僕の横を、ぬるい湿った風が吹き抜けていく。
そして、車は走り去っていった。その後ろ姿を見つめる。やがて角を曲がり、車は見えなくなった。
その瞬間、僕の張り詰めていた糸が切れた。思わずその場に座り込んでしまった。
やはりあの時、力ずくでも彼女を救い出すべきだったのではないか。嫌がっても泣かれても嫌われても、聖女にはさせるべきではなかったのではないか。
車から降りて全てがもう完全に手遅れになってから、僕はとても強い後悔に襲われた。今すぐにでも教会に戻って彼女を連れ出したい、そういう衝動に駆られた。
そうしなかったのは、あの部屋で見た沢西の決意が固かったからだ。彼女を聖女にさせないという行動の全てが無駄になる事を、僕は彼女の言葉や態度から感じていた。
やがて座る事も面倒になり、アスファルトの上に寝転んだ。幸い家の前は車通りも人通りも少なかった。
そうして、空を見上げる。都会特有の建物で縁取られた明るい夜空は曇っていて、星など見えなかった。
また、風が吹いた。
彼女は、この世界と家族を守りたいと言っていた。そのために自分が犠牲となるとも。
「まったく、あいつは本物の聖女だよ…」
自分の意思を貫けなかったからか。
もしくは、彼女を助けられなかった事への後悔か。
または—もう彼女と会えないかもしれないと不意に実感したからか。
曇り空が、涙でにじんだ。

16 ―僕の選んだ道

沢西を助け出せなかったあの日から、僕は自分が何をしていたのかよく覚えていない。学校では定期テストが始まったが、勉強していない僕が解けたはずもなかった。その時のテストは学生生活の中でも最低の出来だと、自他共に認めるような結果だった。
それでも、僕はテストの事なんか全く気にしていなかった。
今週末。いよいよ、聖女が眠りにつく。日曜に教会が聖女達の発表を、テレビやラジオで全国に放送する。実際に彼女たちが眠りにつくのは月曜へと日付が変わるその瞬間だ。
来週には、沢西はもう眠りに就いている。
そう考えると、テストなどどうでもいいことのように感じられた。
あの日、彼女に聖女をやめさせられなかったのは、こんなテストで間違えるよりももっと重大で、間違えてはいけない問題だったのではないか。そんな後悔だけが僕の中で渦巻いていた。
「沢西の事で話がある。直接会いたい」白沢からそんな連絡があったのは、聖女が眠りにつく2日前の金曜だった。

沢西を助けだせなかったあの日以降、僕は白沢と会っていなかった。元々教会とは縁の無かった僕とは違い、彼は神学校の生徒だ。そんな彼を、教会を敵に回す立場にしてしまった事に責任を感じていた。今回の僕のわがままのせいで、学校で不利な立場に立たされていないかと不安だった。
金曜日、学校が終わってから僕は駅へと急いだ。待ち合わせ場所は立岩のコーヒーショップだった。金曜日の夕方、店内は賑わっていた。僕が店に着いたとき、すでに白沢は待っていた。
「悪いな、待たせたか」
アイスカフェオレを持って、白沢の向かい側に座る。彼は前に駅前で見たような白の制服ではなく、私服だった。

「いや、俺が早く着きすぎただけだ」
そういって彼は自分の飲み物を飲んだ。
「で、話したいことって何だ？新たな情報か？」
「そうだな。…確かに情報と言えば、情報だ」
白沢にしては珍しく、言いよどんでいる。僕は無言で話の続きを促した。
「話っていうのは、沢西の事だ。お前も知っているだろうけど、明後日には儀式が行われる。俺たち神学校の生徒は、日曜も登校して全員でテレビ中継される儀式を見るんだ。まぁ、大半の生徒が寮生活をしているからそんなに苦労じゃないんだけどな。っと、これはお前には関係の無い話だ」
お前に関係のある話はここからなんだ。そういって、白沢はカップに口をつける。飲み物を飲んだその様子は、余計なことを口に出さないよう、自分の心情も一緒に飲み込んだようにも見えた。
「藤川、お前は沢西が眠りに就くのが嫌なんだろう？」
「そうだな。あれからずっと考えていたんだけど、いくらあいつが自分の意思で聖女になるって言っても、本人がやっぱりやりたくないって感じているのならやらせるべきじゃないと思うんだ」
突然の核心を突く質問に驚きながらもはっきりと返事を返す。白沢も僕の答えは想定していたのだろう、間髪いれずに次の質問をしてくる。
「もう一つ聞きたい。これはむしろ、最初に聞くべきだったのかも知れないが。
お前は、沢西の事が好きなのか？」
この質問には、即答できなかった。白沢と付き合いが長いけれど、真顔で直接こんなことを聞かれたのは初めてだった。普段ならふざけた笑顔で「なにバカ言ってるんだよ」と返す事もできるけれど、彼の真剣な顔と、彼が僕にしてくれた協力を思うと、そんなことはできなかった。
「…あぁ、多分な」

「多分とは、曖昧な答えだな。はっきり言いにくいっていうのもわかるけど。あそこまで沢西のために必死になったんだ、逆に好きでもないって言われたほうが驚くぞ」
そうだよな、と答えつつ僕はカフェオレに逃げる。甘い。生まれて初めて、ブラックコーヒーが飲みたいと思った。
そうして考えながらぽつぽつと話す。あの時、何を考えていたのかを。
「中学の時にさ、理由も覚えてないんだけど。放課後の体育館で沢西と二人きりになった事があったんだ。そのときに、約束をしたんだよ。
あいつが物語を書いたら、最初に俺が読むって」
「それで沢西は、物語を書いたのか？」
「ああ。あいつ聖女になるってわかってから、急いで書き上げたらしい。物語っていっても、特別おもしろいわけじゃなかった。それでも、その話を通じて訴えたいことがあるっていう必死さは、伝わってきた」
「その物語が、お前を動かしていたのか？」
「それだけじゃないんだ。言っただろう、小笠原に渡すとき、沢西は泣きながら怖いって言っていたって」
その姿を想像して、僕は再び強い怒りを感じる。どうして何も悪くない沢西が怖いと泣かなければいけないのか。
「俺、嫌なんだよ。誰かの犠牲の上に成り立つ平和なんて。そんなのが本当の平和な訳が無いだろう。
沢西が好きか嫌いか、って聞かれれば多分好きなんだ。だけど今回の俺の行動は、自分のためだ。俺が、嫌だったから。誰か犠牲になるって言うのが嫌だったから。それが一番の理由だ」
僕のその言葉を、白沢は静かに聞いていた。
「誰かが犠牲になるのは嫌なんだな。じゃあ、自分が犠牲になるのはいいのか？」
「…え？」

「お前は他人が犠牲になるのは嫌なんだろう。それじゃあもし、お前が聖女の代わりに眠れと言われたら？」
そんな事を僕は、考えた事も無かった。
「そうだな。もしそれで本当に誰もが幸せになれるのなら…いいのかもしれない。けれど、それが教会の指揮下っていうのは嫌だな」
僕が眠る事で、誰もが幸せになれるのなら。不安や心配なんてどこにもないような世界が、本当に自分が眠りに着くことで叶えられるのなら、そしてそれがずっと続くのなら。それは僕の人生の一部を賭けるだけの価値があるように思えた。
自分を犠牲にして誰かの幸せを願う。この考え方が正しいのか間違っているのか、今の僕にはわからない。白沢にも分からないだろうし、これから先、その答えが見つかるかも分からない。
しばらく白沢は何も言わなかった。何かを考え込んでいるような沈黙だったから僕も何も言わず、自分のに入ったカフェオレを飲む。そして、僕のカップの中身が半分くらいになった所で、白沢も自分の飲み物に手を伸ばしながら、まるで独り言のように口を開いた。
「今週末、沢西は眠りに就く。いつごろ目が覚めるのか、半年か１年後か１０年後か、それは俺にもわからない。学校の中でも、情報は掴めなかった」
それは、富谷さんと高部さんに聖女の護衛をやめさせられても、白沢なりに情報収集を続けていたという事だった。そうして、彼はカップをテーブルに置き今までにないほど厳しい目をして僕を見る。
それはもはや見るというより睨むに近かった。
「沢西を聖女にしたくない、そういったお前に二つ道がある。
一つは、このまま沢西が起きるのを待つ事。
もう一つは、沢西と共に眠りに就く事。そうすれば、彼女が起きるのと同時にお前も目が覚める」
白沢の口から出てきた２つ目の選択肢は、瞬時には理解も判断も出来ないものだった。
「沢西と、眠りに就く？俺が？そんな事ができるわけがない…」

白沢の言葉が信じられなかった。
「それが出来るんだ。教会は聖女１２人分の他に、さらに１２人分のコールドスリープ装置を用意している。聖女一人につき、お供が一人ついていられるって事だ。その事実が公表されていない所を見ると、お供には『報酬』はつかないんだろうけどな」
「…そんな話、どこで聞いたんだ？まさか、学校の中で流れている噂じゃないだろうな？」
「そんなわけないだろ。富谷さんに聞いたんだよ」
「富谷に！？いつだ？」
「俺たちが沢西を救い出せずに教会を追い出された日。俺の家の前で、その話を聞いたんだ」

その日、白沢の家に着いたのはもう夜といっていい時間帯だった。空は曇っていて、星は見えない。今の自分の気分にはちょうどいい。そんな事を考えながら白沢は、車内から空を見ていた。
止まった車の中で、やはり口を開いたのは富谷だった。
「さっきも言ったとおり、残念だけど白沢君は今日で役目終了だ。これからは普通の学校生活に戻っていいよ。沢西様には別の護衛をつける。もっとも、今日の話を聞く限りでは護衛は必要なさそうだけどね」
完全に自分の意思で聖女になると言った沢西に、精神的な支えは必要ないだろう。もう、自分たちができる事は何も無い。白沢もそう感じていたし、そうわかっていた。
―あいつを聖女にしたくないんだ
それでも、藤川の言った言葉が忘れられない。
この数日間、藤川に振り回された。中学の時でもなかったほど、互いの気持ちをぶつけあった。
それがすべて無駄になってしまうのか。
「沢西は、本当に聖女になっていいんでしょうか」

特に考えて口にしたわけではない。ただ、今車から降りるとそこですべてが終わってしまう。だから、少しでも時間を稼ぐ。その先に何があるかわからないが、まだ車から降りるわけには行かなかった。
「良いとか悪いとか。それは沢西様本人が決める事だよ。君も今日聞いただろう、彼女自身が聖女になると決めたのなら、それを邪魔は出来ないだろう。それに、彼女だって彼女なりの目論見があっての事だしね。『仕事』か、確かにそのとおりだよ」
「聖女になる事が仕事。確かにあいつはそう言っていました。…けれど、それなら聖女計画って一体何なんです？」
「……そりゃ、大いなる主によってこの世に使わされた聖女を一度」
「もしかして、沢西のような環境にある人を救済するための計画だったんじゃないですか？」
富谷の言葉を遮るようにして、白沢は言った。車内の空気が変わる。それでも構わずに、彼は言葉を続ける。
「今、教会に対して不安、不満が高まっています。それを解消するために、教会は『不幸な人を救う必要』が出てきた。そしてそれを実行するための計画が聖女計画だった。
適正検査という名の下調べの後、全国から『恵まれない女の子』が集められた。彼女たちをある一定の期間眠らせる事で、目覚めた後の生活を保障する。それが本当の目的だったのではないですか？」
誰も何も言わない。白沢の発言は、禁句に近いものだった。そしてこの沈黙こそが、何よりも雄弁に自分の発言を肯定しているように、彼にはそう思えた。
「残念だけど、それは違う。聖女計画は大いなる主に対して聖女たちを送り返すための儀式だ。彼女たちの目覚めたあとの生活は、教会側は一切保障しない」
「けれど実際は、」
「実際どうであれ、教会は保障しないよ。眠りに就くことで彼女たちが利益を得ようと不利益を被ろうと、それは我々教会側は意図しない事だ。そこまで手は出せないし、面倒もみられない」

今度は富谷が白沢の言葉を遮る。その声には今までにない固い響きがあった。
「それにね、『眠りから目覚めた後の生活の保障』が目的ならば、彼女たちはそう遠くないうちに目覚めなければならない。そうだろう？」
「そうですね。だから、あまり眠りにつく期間については心配していません」
眠りから覚めた後の聖女たちの生活の保障が目的ならば、いつまでも眠らせておくはずが無い。だから、眠りに就く期間というのはそんなに長くないはずだ。おそらく1年か、長くても2年程度だろうと白沢は思っていた。
だが、富谷は首を振る。
「それは大きな間違いだよ。いいかい、これだけは言っておくけど、彼女達が近い将来に目覚めるというのは在り得ない。ある程度の年数は眠ってもらう事になるだろう」
その言葉を聞いて、白沢の中で言いようのない不安が広がる。
「ある程度っていうのは、どれくらいの年数になるんです？」
「さぁ、それは解らないよ。神が許されるまで、だね。何しろ２００年以上前からずっと人類を見守っていてくださった方だ。時間の感覚は我々とは違うだろうな」
「でも、実際に彼女たちの眠る期間を決めるのは人間だ。大司教や司教たちでしょう。それとも、彼らがご神託を受けるとでも？なんの根拠も無くサイコロでも振るんですか？彼女たちだって人間だ、それを何の根拠も無く数年間も眠らせていいと本気で」
「白沢君、ちょっと冷静になりな。君も数日前までは白服を着ていたし、これからも着続けるんだろう？」
富谷のその言葉で白沢は我に返る。すいません、と小さく謝った後、彼女たちの睡眠期間はそう長いはずはないはずだ、と言った。
そう言い続けたのは、不安になったからだ。自分よりずっと教会の内側に近い立場の富谷が、近いうちには目覚めないと言っている。

どれくらい眠るのか、１０年か？２０年か？
自分が生きている間に、彼女ともう一度会えるのだろうか？
その不安が白沢の全身に染み渡ると同時に、手足の感覚が鈍くなり、体に力が入らず、思わず背もたれに体を預けてしまう。もしかしたら、今日自分達は、本当に力ずくでも彼女を教会から連れ出すべきだったのではないか。
そんな白沢の絶望が伝わったのか、それとも水掛け論になると思ったのか。
「とにかく、それについては今言い争っても仕方が無いね。彼女たちの睡眠期間については後でわかるだろう。聖女計画の目的も、法王様の発表のとおりだ。他意は無いよ」
富谷にそこまで言い切られたら何も言い返せないし、話すことがなくなったのならおとなしく車を降りるしかない。
そうすれば、この数日間の出来事がすべて終わる。
聖女の護衛に抜擢された事。久しぶりに沢西と会った事。
卒業してから始めて藤川と再開した事。そんな彼と駅前でケンカ騒ぎを起こした事。
藤川は中学の頃からは想像できないくらい、必死に沢西を助けようとしていた事。
「藤川、あいつはどうなるんでしょう」
「今回の件で教会が彼に対して何かしらのペナルティーを科す、といった事を心配しているのならそれは杞憂だよ。別に犯罪行為をしたわけでもないしね」
「いえ、そういうことではなくて。
…あいつ、中学の頃は何も考えてない、状況に流されているだけの奴だったんです。
そんなあいつが、ここまで必死になるっていうのは中学の頃を知っている俺にとっては驚きでした」
「……」富谷は何も答えない。
「でも、その結果が助けたかった本人からの拒絶だった。だからあ

いつ、相当ショックだとおもうんです。今まで俺がしてきたことはなんだったんだろう、って」
「……いまいち話が要領を得ないね。何が言いたいんだい？」
「藤川は、よく頑張ったって事です。努力して、傷ついて傷つけられて。そして、得た結果が拒絶じゃ、あいつが報われないじゃないですか」
「頑張った者が必ず報われるなんて、それは子供の絵空事、綺麗事の最上級だよ。それくらい白沢君だって分かっているだろう」
「絵空事でも奇麗事でも空想でも幻でも。俺は嫌なんです。それに、教会は人を幸せにするところでしょう。それなら、藤川を幸せにしてやれるんじゃないですか」
「彼は我々に敵対したんだよ？さすがに刃向かう者まで救えるほど、懐は広くない」
「本当にそうですか？」
「どういう意味だい？」
それは、白沢が感じていた小さな疑問だった。
「ちょっと気になっていたんです。今日、俺たち二人を沢西に会わせてくれたじゃないですか。
警護の観点から言えば、わざわざ俺たちを会わせる必要は無いですよね。いや、むしろ会わせない方がいい。あの場で力づくで連れて行く可能性だって、可能不可能は別にして、あったわけですから。
実際、藤川はそう考えていたはずです。
どうして、俺たちを沢西と会わせたのですか？」
「警護の観点から言えば会わせる必要は無い、ね。
君はそういったけど、僕はそんな風には考えてない。むしろ今日君たちを会わせたのは警護のためだよ」
富谷の言うことは、白沢の考えている事の反対だった。
「たとえば、君たちを沢西様と会わせなかったとする。そうするとどうなるか。
君たちは彼女の口から直接意思を聞くことができない。すると『彼

女を助ける』といって必ず何か行動を起こす。行動の中身までは予想できないが、何かしら行動を起こす事は絶対だ。１００％と言い切っていい。
では逆に、君たちを沢西様と会わせた場合はどうか。もう説明するまでも無いだろう、それが今の君たちだよ。いまさら沢西様を連れ出そうという気にはならないだろう？
『我々の眼の届く範囲で沢西様と接触させ、その後の行動を起こさせない』か、
『接触はさせずに、いつか起こる相手の行動を阻止する』
どちらが簡単か、わかるだろう？」
つまり、白沢、藤川、沢西を会わせたのは警護上の事で、それ以上の意図は無いという。
そしてそれを隠さずに話すという事は、今は本当に自分たちを脅威としてみていないという事なんだと白沢は思った。
「それは俺たちを過大評価していませんか？教会が誇る警護を、たかが高校生２人が突破できるとは思えませんよ」
「それは君が自分たちを過小評価しているんだよ。決して僕は、君たちを『たかが高校生２人』などとは思っていないからね」
富谷は本当に彼らを甘く見てはいなかった。それは、体育館の外で白沢たちを待ち伏せしていた事からも分かる。
「それでも、結果として何も出来ませんでした。沢西自身が聖女になりたいって言ったのなら、もう俺たちに出来る事は何もありません。悔しいくらい富谷さんの言うとおりです」
「そう気を落とさない事だ。人を一人救うっていうのはとても大変な事だからね、そんな簡単にはいかないさ。その歳でそれが経験できたってのはすごいことだよ」
「それじゃあ、何か努力賞でもくださいよ」
もちろん、冗談のつもりだった。自分たちは何もできない、もう何もする事もない。そんな状態で、少し皮肉を込めて言ってみただけ。
―ははは、残念だけどそんな物は無いよ。君たちだって何か賞がほ

しくてやった訳じゃないだろう。
そういう類の返事が来ると予想していた。
だが、富谷の口から出てきたのは全く予想していなかった言葉。
「聖女様達は眠りに就いて、大いなる主の元へ向かわれるわけだ」
それは、教会が立てた聖女計画のストーリーだ。だが、なぜ今そんな話をするのだろうか。突然始まった話に白沢は、どこで口を挟んで良いのかわからずただ黙って聞くしかない。
「その途中、何も無いとは限らないだろう？もしかしたら、悪魔が聖女を誘惑するかもしれない。昔からその手の話はたくさんあるからね。
だから、聖女様を守る警護が、『騎士』が必要だとは思わないか？」
「聖女の警護なら、あなたたちがやっているじゃないですか」
「僕たちがやっているのは『眠りに就くまでの身辺警護』に過ぎないよ。問題は、『眠りに就いた後』だ。もちろん眠りに就いた聖女様達の御身体は、我々教会が責任を持って警護する。けれど大いなる主の元に向かわれた彼女たちの心は、守りようがない。わかるかい？」
言っている事は分かるが、言いたい事は解らなかった。だから、何も答えず黙って話を聞く。
富谷は続けた。
「ではどうすればいいのか？簡単だ、誰かが一緒についていってあげればいい。聖女様に危機が迫った時、それを解決できるような強い心を持った騎士が、ね」
白沢の頭が回転を始める。富谷が何を言っているのか、その先に何を言いたいのか。
「もちろん、どんな者でもいいというわけじゃない。悪意ある者、怠惰な者、心が弱い者。そういった者では、聖女を守ることはできないだろう。
決して揺るがぬ意思、聖女様に対する忠誠心、自己に対する厳しさ。
そして何より、『聖女様を本当に大切に思っている者』そして『聖

女様が信頼している者』。そういった条件に見合う者が、騎士となれる」
騎士。初めて聞く役職名だった。教会が行っている聖女計画の説明の中にもそんな名前は出てこなかったはずだ。白沢の疑問を感じたのか、彼が口を開く前に、
「騎士の存在は聖女様以上に秘密なんだ。教会の内部でも、本当に一握りしかしらない。そういう意味では、僕たちと同じだよ」
そう言って富谷は少し笑った。そして一番大事なのは、と前置きしてから
「眠りに就いた聖女を守るという事は、聖女様と一緒に眠りに就いてもらう。当然目覚めるときも同時だ」
白沢は黙って、今聞かされた情報について考える。
騎士。眠りに就いた聖女を守る者。聖女と共に眠りに就く者。
「聖女たち本人は、そのことを知っているんですか？」
「騎士が正式に決定したら伝える事になっている。だから沢西様は、まだ『騎士』の存在を知らないよ」
そこで富谷はいったん言葉を切った。
「多分白沢君は、『俺か藤川のどちらかが騎士になれば』と考えていると思うけど、騎士は大変だよ。さっきも言った通り、その存在は極秘だ。対外的に発表している聖女とは全く違う。白沢君なら、その意味が分かるだろう？」
つまり、眠りに就いた後の聖女に対する『報酬』が、騎士にはないという事だ。
「騎士に選ばれた者は『教会の手配で海外留学』へ行くという建前になる。もちろん家族には本当の事を言うけどね。そして聖女と共に眠る。つまり、それまでの生活、学校だったり会社だったり、そういうものはすべて捨ててもらう。
聖女と同等の対価を払って本人には何も得る物が無い。それが騎士だ。
それでも、君は、君か、君の親友を、騎士にしたいと思うかい？」

今までの生活との決別。その条件は聖女と同じだ。だがその後が大きく違う。
この世を代表して眠りに就く聖女と、突然教会の都合で「海外留学」することになる騎士。
失う物は多く、そして得られる物はない。
「……なぜ騎士の存在は極秘なんですか？別に悪い事をするわけじゃないでしょう」
白沢はまだ、騎士というものが信じられなかった。そして、富谷は白沢が言いたいことを正確に読み取った。
「確かに、すぐに信じろと言っても無理な話だろうね。
騎士が極秘の理由。それは、とても現実的な話だよ。人を一人コールドスリープにかけるのに、とんでもないお金がかかるからだ。聖女様１２人の時点で、かなりの出費なんだ。そこで騎士を募集してたくさんの応募があったら困るんだ。聖女様と違い、騎士は人数の限定ができないし、聖女様自身が騎士を２人にしたいと仰られた場合、我々ではそれを断れない。だから、騎士の存在は聖女様にも一般的にも極秘なんだ。
それにね、こちらが公開してからやってくるような者では騎士になれない。聖女を守ろうと自発的に行動を開始する者。そういう人物が、騎士に相応しいんだ」
富谷は前を向いているというのに、なぜか白沢は彼と向かい合って話しをしているような錯覚を覚えた。
「俺たちが、騎士に相応しいと？」
「少なくとも僕は、沢西様の騎士に君たち以上に相応しい人物を知らない。いたら教えてほしいくらいだよ」
「……今すぐ返事はできません。一度、藤川と話し合わないと」

そうして、白沢の説明は終わった。
初めて聞く、騎士という役目。決して世間には公開されない、失う

ものばかりで得るものがない、分の悪い職務。仕事ではない、ボランティアですらない、収容と形容されても仕方がないような役目だった。
白沢の話しを聞く間僕は、一言も口を挟まずに黙って耳を傾けていたけれど、最初に感じた疑問を口にした。
「騎士の存在を信じさせる事で、俺たちの行動を封じようとしているという事は？」
「それはないだろう。富谷さんは俺たちをすでに敵として見ていない。お前だって今さら沢西をさらおうとは思わないだろ？」
私は聖女になる。そう言い切った彼女の、決意と不安に満ちた瞳を今も覚えている。一瀬は、自分のためなら他人の感情なんて気にするな、自分の好きなようにやれと言った。僕もその通りだと思って、白沢を巻き込んで沢西を助け出す計画を立てた。
沢西自身が聖女になりたいと言うなんて、全く考えていなかった。一瀬ならば、それでも沢西を聖女にはさせないだろう。僕には、それが出来なかった。
「沢西を救い出す事ができなかった。そしてそれを後悔しているのなら、お前が騎士になれ。彼女がこっちの世界に残れないのなら、お前が彼女と一緒に行くしかないだろう」
白沢のその言葉で、僕の心に少しだけ光が射した。
沢西を救い出せなかった事。車を降りて感じた悔しさと悲しさ。背中から伝わるアスファルトの冷たさと、滲んだ夜空。
失うものばかりで得られるものが無い騎士という役目。けれど、今の僕に彼女以上に大切だと思えるものは、あるのだろうか―？
少し考えてから、
「そうだな。あいつが聖女になるのをやめないなら、後は俺がついていくしかないか。騎士の役目、俺が引き受けよう」
はっきりと、白沢の目を見て宣言する。それを聞いて白沢は、そうかと短く答えた。
もう残り少ない自分の飲み物に視線を落とし、なかなか顔を上げな

い。そんな彼に、僕は一つだけどうしても聞いておかなければいけない事があった。
「白沢、お前は騎士になりたくないのか？」

「……今すぐ返事はできません。一度、藤川と話し合わないと」
そう答える白沢に、富谷は大きなため息を就く。
「もし白沢君が今すぐ『僕が騎士になります』と言えば、君は沢西様の騎士となれる。それは分かっているだろう。もし本当に沢西様の騎士になりたければ、これは大きなアドバンテージだと思うけど？」
「藤川を裏切れということですか？」
「いや、そうは言っていないよ。ただ、君にとって大きなアドバンテージなのは確かだ。それを使わないという事は、…もしかして白沢君は、沢西様の騎士にはなりたくないのかい？」
「……」
車内に、今までとは違う沈黙がおりる。
やがて富谷は、もう一度大きなため息をついた。
「まぁ、白沢君ならここですぐに返事をしないだろうと思っていたけどね。答えはまた今度でいいよ」
そういう富谷に、白沢はうつむいたまま答えを告げる。
色々と考えた。ここ数日の出来事で、この人たちが自分達に何をしたのか。そして分かった。ここで、このタイミングで騎士の話をしてくるこの人は、最初から自分たちの味方だったのだという事に。
「この物語の主人公は、きっと藤川なんです」
どうして自分がここで騎士になると即断しないのか。富谷達に、彼らだけに自分の気持ちを教える。
「この数日間、俺はあいつに振り回されるだけの立場でした。あいつの沢西を助けたいという強い思いに、少し手を貸していただけです。だから、最後の騎士という役目はあいつが相応しいと思ってい

ます。もちろん藤川が騎士にならないと言った場合は、俺がやります」
そうして一度言葉を区切る。自分で口にして、自分の気持ちに気がついた。
藤川に花を持たせるわけじゃない。でも、きっと沢西の騎士は藤川が一番相応しい。それに、
「それに、俺には俺のやるべきことがあります。藤川と違って、俺は白服を着られますから」
前の座席はしばらく沈黙した後、そうか、と短く言った。
「それじゃあ、今日はこれで。今度藤川と会って騎士の話をしてやります」
そういって、ドアノブに手をかける。
車のシートが名残惜しいと思う事はなかった。
これから、やることがある。そう思い、強くアスファルトを踏みしめる。
低く、分厚く空を覆う雲。だが、その隙間から星が見えはじめていた。

白沢は顔を上げる。その顔は納得したように、薄く笑っていた。
「…何も沢西と一緒に眠りに就くことだけが、彼女の為に出来る事じゃない。俺には俺にしかできない事がある」
俺は白服だから。お前たちは眠りに就いている間、俺は眠らずにやることがある。
その、決意に満ちた彼の顔と言葉に、僕は言いようのない感情に包まれる。
お前と親友でよかった。
馬鹿正直にそう言うのは照れくさかった。だから僕は何も言えず、彼と同じようにただ笑うことしかできなかった。
白沢はカップを掲げる。

「約束しよう。お前は沢西と眠りに就いてくれ。その間、俺は俺の出来ることをやる。
そして、お前たちが眠りから覚めたときには、必ず迎えてやる」
僕もカップを掲げる。
「あぁ、お前が見守っていてくれるなら安心だ。沢西のことは任せろ、目が覚めたら、神様がどういう姿をしていたのか、いろいろ教えてやるよ」
これ以上話をすると、この胸の温かさが涙となって出てきてしまいそうだった。
僕達はお互いに笑いあって、もうほとんど中身の無いカップで乾杯する。
目が覚めた時白沢は、この中身がアルコールになっているような年齢になるかもしれない。だけど、何年後でも、僕は彼となら今日のような笑顔を浮かべて、同じように乾杯できるだろうと、そう思った。

17 ― 彼女の別れ

翌日から聖女になる沢西は、最後の夕食を家族と取った。
「午後１０時に、お迎えにあがります」と、午前中に教会から連絡があった。
覚悟はしていた。教会からあなたが聖女です、と告げられた時から、この日が来るのは分かっていた。それでも、家族に囲まれて普通に暮らしていると忘れそうになる。
「実はあなたは、聖女ではありませんでした」という連絡が来る事を願った事もあった。いや、それは今でも心のどこかで望んでいる。藤川や白沢には、これは仕事で聖女になるのは自分の意思だと伝えた。その言葉に嘘はない。だが、それでも聖女になるという恐怖は消えない。
藤川に今の自分の気持ちを、聖女になりたくないという自分の気持ちを伝えれば、もしかしたら助けに来てくれるかもしれない。そう考えて、沢西は物語を作り上げた。自分には助かるつもりは無い、だけど藤川に助けに来てほしい。それは悲劇のヒロインを演じたいという、沢西のエゴ。そのために彼女は物語を作り、藤川を巻き込んだ。
彼が来ても来なくても、結局は自分の悲しみに酔うだけ。それは、沢西自身が気がついている。そうして同時に、自分は本当は聖女とは程遠い人物だという事も分かっている。彼女はこの世を憂いて眠りに就くのではない。あくまで自分のため、自分達のためだった。
沢西には中学2年になる弟がいる。弟には、明日から沢西は長い旅行へ行くという事にしてある。自分の姉が聖女だ、という事はまだ伏せてあった。
この日の夕食は豪華だった。赤飯とお頭付きの鯛、本物の松茸を使ったお吸い物。冷凍食品ではなく手作りのグラタンと刺身、シーザ

ーサラダ、エビチリとロールキャベツという、豪華を通り越して無秩序なメニューだった。
このご馳走に弟は素直に喜んだ。明日からいなくなるお姉ちゃんのために今日は豪華な夕食にしたの、と母親が言うと、
「これが食べられるなら、お姉ちゃんは時々旅行に行けばいいのに」
と弟が笑顔で言った。
食事は終始にぎやかだった。ご馳走を目の前にご機嫌な弟と、そんな弟に調子を合わせている母親。
夕食後、「今夜、お迎えが来るんでしょ。もう休んだら？」という母親の薦めを断り、いつものように母親と台所へと立って後片付けを始める。
沢西は、今日が特別な日だと意識したくなかった。昨日と同じような今日で、明日も今日と同じような日が続くのだと思いたかった。
食事中はあれほど雄弁だった母親が、今は押し黙っている。台所には皿を打つ水の音と食器同士が触れる音だけが響き、ラジオは聖女をたたえる原稿を読み上げていた。
そうして沈黙のうちに全ての片付けが終わった。時刻は夜９時を少し回った所だった。
弟は風呂へ入っている。中学生の男の子が、喜んで家事の手伝いをするはずがない。だからいつも、彼は食後の片付けのタイミングで風呂に入る。
「明日から、大変だね」
沢西はそれを『明日からは私がいなくなって、片付けをする人がいなくなっちゃうね』という意味で言った。
だが、母親は違う意味で受け取ったらしい。
さっきまで夕食を取っていた椅子に座り、両手で頭を抱えてしまった。そんな普段ではめったに見せないような母親の姿に多少驚きながらもそれを表情に出さないように気をつける。何か言いたい事があるのだろう。
「お茶、飲む？」という沢西の問いに母親は、お願いとうつむきな

がら答える。どうやら泣いているわけではないようだ。
母親の涙を見るなんて、できることなら避けたかった。
大丈夫だよ、私は少しの間眠るだけ。一生のお別れじゃないんだから。
だから、そんなに特別な事だと思わないで。
だから、そんなに特別な事だと思わせないで。
二人分のお茶を入れて、沢西も母親の正面に座った。
しばらくして、
「……あなたが聖女だって聞いたとき、うれしかった。だって自慢の娘だもの。どこへ出しても恥ずかしくないと思っていたけど、神様もそれを認めてくれたんだって。だからお母さんは神様に感謝したの。ありがとうございます、今から娘が向かいますがよろしくお願いしますって」
「はは、なんか恥ずかしいな。そんな風に言われると」
映画ではよく親が子供に、お前は自慢の子供だと言うシーンがあるが、沢西は生まれて今までそんな場面を実際に見た事はない。自分にもそんな場面は起きないだろうと思っていた。
そこで母親は顔を上げる。目には涙こそ浮いていなかったが、真剣なまなざしで沢西のことを見ていた。
「あなた、本当に聖女になりたい？」
そう聞かれるだろうと思っていた。答えも準備していた。だから、何も考えずに答える事ができた。
「なりたいからなれるとか、そういうものじゃないでしょ聖女って。神様が、そしてこの世界が私を必要としているのなら私はその期待にこたえたいと思うわ」
母親の目をまっすぐに見返して、心にもないことを言う。
だってそうだろう。ここで聖女になんてなりたくないと言ったら。
そんな本当の事を言ったら。きっと、母親は悔やむ。娘を聖女にさせてしまったと、悔やむだろう。そんな気持ちでこれからの日々を送って欲しくなかった。そんな気持ちで、自分のいない毎日を過ご

して欲しくなかった。
だから沢西は、母親の目をまっすぐに見返して、堂々とやさしい嘘をついた。真面目な瞳で娘を凝視する母親と、穏やかな笑顔でそれを受ける娘。それは、探りあうような緊張を孕んでいた。
先に目をそらしたのは母親のほうだった。
「……そう。それなら、いいのよ」
そういって、再び額を抱えるように顔を伏せる。
「ほら、うちってお父さんがいないでしょ。もしかしたら、あなたはなりたくもないのに聖女になるのかなって思ったから」
そう言って母親は少し間を置いた。まるで何かを決心するかのような。
「でも、貴方は自分の意思で聖女になるのね。それなら…うん、安心。
もしも、本当は聖女になりたくないのに聖女になるなんて言ったら…もうお母さんにはどうする事も出来ないから。…一言、謝ろうと思ってたの」
額を抱え、机に肘を突いて語る母親は、懺悔をする人を思わせた。
「ごめんね、サユリ。…本当にごめんなさい。私が、お父さんと別れたりするから。
女手一つで子供を育てる人なんてたくさんいる。だから自分もひとりでやっていける。そう思っていたの。
でも、そんなに甘くなかった。あなたたち姉弟にはいろいろ大変な思いをさせている。そしてあなたを、聖女になんかさせちゃって。
こんな事になるんなら、お父さんと別れなければよかったんだよね。本当にごめんなさい」
聞こえてくる母親の声は掠れて、テーブルにはしずくがポタポタと落ちている。
沢西は分かった。やっぱり嘘はつけない、母親は全て見抜いている。言葉では自分の嘘にだまされている振りをしているが、全て分かっている。母親の本音と弱音を初めて聞きながら、そう思った。

「…大丈夫だよ。あのね、これは仕事なんだ。私が聖女として眠りにつく、その代わりに教会の人はいろいろと支援をしてくれるでしょ？ほら、世間で普通に行われている仕事と同じじゃない。ただ、ちょっと変わった仕事なだけ。
だから、そんなに泣かないで。悔やまないで。……これは、そんなに特別な事じゃないんだから」
沢西が眠りに就く事で、家族の将来は保障される。それは、仕事としては破格の報酬である。
「だから、私は聖女になれてうれしいんだよ。もし聖女になれなかったら自分からお願いしに行こうと思っていたんだから」
それでもまだ、母親は謝り続ける。自らの不甲斐なさを呪うように。
沢西は母親の隣に座り、肩を抱く。
「私なら大丈夫。だからもう泣かないで。立派に聖女の役目を果たすから。
お母さんが謝るような事は何もないんだよ。今まで私達を育ててくれたじゃない。だから、今度は私が恩返しをする番。決して、お母さんが自分を責めるようなことじゃないよ。子供が成長して、働いて親に恩返しをする。そんな、普通のどこにでもある事なんだから。
だから、仕事に行く前に最後のわがままを聞いて？」
その言葉で、母親は顔を上げ沢西を見る。
「ほら、この仕事って終わるのがいつになるか分からないじゃない。仕事が終わった私の、帰る場所を残しておいて。仕事が終わったら、また家族3人で一緒に暮らせるような、そんな場所を残しておいて。
……あはは、でも仕事はいつ終わるか分からないからね。ちょっと大変だね」
それは、今まで気丈に、笑顔で振舞ってきた沢西が、一度だけ見せた弱みだった。
その言葉にしばらく母親は何か言いたそうにしていた。やがて、自分の言いたいことが言葉になったのだろう。
「……何を言ってるの。戻ってくる場所、そんなのこの家に決まっ

てるじゃない。そんな事、約束するような事じゃないわ。
いい、貴方が聖女でも―聖女じゃなくても。大切なこの世界でたった一人の私の娘なんだから。お母さんは、絶対にこの家で待ってる。あなたが仕事を終わらせて帰ってくるまで、必ずここで待っているから。安心して、いってらっしゃい」
もう、母親は泣いていなかった。まだ潤んだ瞳には、強い光が宿っている。その光を灯した瞳こそ、沢西がよく知っている彼女の母親の瞳だった。

家の外で車が止まる音がした。次いで、チャイムが鳴らされる。
「東京大聖教会より参りました、富谷と申します。沢西サユリ様をお迎えにあがりました」
黒いスーツで全身を固めた男が丁寧口調で言う。心にもない敬語を使うとどこか不自然で馬鹿にしたような印象が残るが、彼の言葉にはそんな気配は皆無だった。それは、この男が本当に沢西を尊敬しているという事の証明でもあった。
玄関先に沢西と母親、そして弟が出て行くと、富谷は深々と頭を下げた。
「それじゃあ、いってくるね」
まるで学校に行くような気軽さを装って、沢西は母親に言った。
母親は何か答えようとして口を開きかけたが、結局何も言えないまま口を閉ざしてしまう。その瞳には、やはり後悔と悲しさの色が浮かんでいる。
そんな姉と母親のやり取りを見て、さすがに弟もこれはただの旅行ではないと気がついたようだ。だが、問いただせるような雰囲気ではない。沢西は、何か言いたそうな弟と目線を合わせて、お別れをする。
「それじゃあ、お姉ちゃんはちょっと家を空けることになるから。私が帰ってくるまで、ちゃんとお母さんの言うこと聞くんだよ？」
もうすぐ成長期に入るから、次に会うときは私より背が高くなって

いるかも知れない。今はまだ自分の肩くらいにある頭をくしゃくしゃと撫でながら、そんな事を思う。
「えー、嫌だよ、面倒だもん。俺の周りに家の手伝いをやっている友達なんていないぜー」
くすぐったそうにしながら弟は、そんな事を言う。
「みんな言わないだけで、お手伝いをしているものなの。
それに、あなたはどんどん背が高くなって、出来なかった事が出来るようになっていく。…そうなったらね、あなたがお母さんを助けてあげるんだよ？」
その一言に、何か特別なものを感じたのだろう。
「……うん、分かった。なるべく、お母さんのいう事を聞くようにする」
弟にしては素直に、言い分を聞いてくれた。
「でもさ、やっぱり面倒なのって嫌だよ。だから、お姉ちゃん、いつ頃帰ってくるの？」
一瞬空気が凍りつく。母親の口から、小さな嗚咽が漏れる。
沢西も返事に困ったが、それも一瞬。
「いつになるか、ちょっと分からないんだよ。でも、必ず帰ってくるから。だから、それまでお母さんの事お願いね」
そんな答えでも、弟は納得してくれたようだ。最後にもう一度頭を撫でてやる。
そうして、再び母親と向き合った。
そっぽを向いて、必死に涙をこらえようとしているがその努力が実る気配は無い。まるで駄々を捏ねる子供みたいだと思うと、少しおかしかった。
そんな母親をそっと抱きしめる。
「そんなに泣かないでよ、私の旅立ちなんだから。笑顔で送り出して欲しいな」
母親は何も答えない。腕の中で、嗚咽が激しくなった。
腕の中の母親よりも今は自分の方が背が高い。昔はもっと大きく力

強かったと思っていた人が、今は自分の腕の中で涙を流している。
まるで自分たち姉弟を育てるために、身を削ってきてしまったかのようだ、と思う。そしてそれは、決して間違いではないだろう。子供二人を育てるため、文字通り母親は身を削ってきたはずだ。
聖女となって、今度は自分が母親を助ける。腕の中に小さくなってしまった親を抱えると、その選択が正しかったと思えた。
腕にすこし、力を込める。
「お母さんは、私達にいろいろ苦労をかけたって自分を責めるかもしれないけど。私達は、お母さんの子供でよかったと思っているよ。だから、これ以上自分を責めないで」
ドラマで使いまわされた言葉だが、今の自分の気持ちを素直に口にした。
「―今まで育ててくれてありがとう。今度は私が、助けてあげるから」
そうして、そっと手を離し、今まで暮らしてきた家と家族に背を向ける。幸いな事に荷物は何もない。何しろこれから眠るだけなのだ。
「おまたせしました、行きましょう」
少し離れて沢西たちの別れを見ていた富谷に声をかける。
「分かりました。これより教会へとご案内いたします」
富谷はそう言って一礼した後、車の後部座席のドアを開く。その動きに不自然さは全くない。口調、物腰、態度。その全てが、一流の執事といってもいいくらいスマートだった。
そうして、車に乗り込む時に、玄関を振り向く。
そこには、月明かりに照らされて、今まで彼女を守って育ててくれたものと、これから彼女が守っていくべきものがいた。
距離にすればたった数メートルなのに、もうあの場所へは当分帰れない。
自分が帰ってきた時、この景色はどうなっているのだろうか。同じように、暖かく自分を迎えてくれるだろうか。
景色がゆがむ。何かが頬を伝う感覚。それが何か確認せずに、目を

ぬぐう。
そうして、最後にもう一度この景色を瞳に焼き付けて、彼女は車に乗り込んだ。

18 ―そうして、僕たちは

沢西は、教会の屋上にいた。
教会の屋上から見下ろす街は夕焼けに照らされ、綺麗だった。沢西にとって重大な日でも、世界はいつもと変わらず一日を終わらせようとしている。
何かが終わろうとしている様子はとても美しい。目の前に広がる風景も、一瞬だけ光る花火も、風に舞う桜吹雪も。それならば、今の自分たちも美しいのだろうか。
彼女はそんなことを思いながら街を見ていた。

午前中に、眠りに就く12人の聖女全員が東京大聖教会に集められた。午後からは予定通り式典が行われ、テレビカメラは全国にリアルタイムでその様子を伝えた。
彼女たちは皆、今の自分がもう昨日までの自分ではない、本当に聖女となった事を実感していた。全員が今更ながら自分の選択の重さに驚き、同時に後悔していた。
式典の後、教会の最上階にある巨大な応接室に集められた彼女達に教会の人が「7時までは自由行動をして構わない」と言うと、一人、また一人と部屋を出て行った。
沢西が選んだ場所は、屋上だった。目の前に広がる夕日を見て、終わろうとしているものの美しさを考えてしまう自分にため息をつく。
今はネガティブな考えしか浮かばない。
自分はもう覚悟を決めたはずだ。藤川と白沢の救いを断ったあの日に。
藤川は自分の本当の気持ちに気がついて、助けに来てくれた。そして、それを断った沢西に、聖女ではなく一人の人間として見ていると言ってくれた。それだけで、十分に奇跡と呼べる。
だが、彼女が眠りに就き、そして起きてからは、藤川もそんな事は

言えないだろう。何しろ、生きている時間が違うのだから。
何年先に目が覚めるのか分からない。けれど、その時藤川は自分より年上になっている。そんな、視覚化された時間の差を見せ付けられてまで、藤川は同じ対応は出来ない。いや、彼だけじゃない。今自分の周りにいる人は、今日までの接し方をしてくれないだろう。
たとえそれが、沢西を傷つけると分かっていても。
起きた時にいる人はいい。けれど、もし。今日まで彼女が会っていた人が、いなくなっていたら。それは、考えただけで恐ろしい事だった。人は思っているよりも簡単な事で死んでしまう。
家に残っている家族。お母さん、過労で倒れたりしないかな。弟は、事故とか怪我とかしないかな。小笠原マキちゃん、白沢君。次会うときまで元気でいるかな。
そして、最後に藤川の事を考えようとする。けれど、出来なかった。どうしてか、もう会えないという気がした。
もし事故にあったら？もし病気をしたら？もし遠くに行ってしまったら？助けを断ったから、自分の事が嫌いになっていたら―。
夕焼けのまぶしさから目をそむけることなく、まっすぐ見つめる。ビルの谷間の鮮やかな橙色がゆがむ。知らずに握り締めていた柵から手を離し、涙をぬぐう。
それでも夕日を睨むのをやめない。まぶしさで目がくらみ、視界が濃いオレンジにそまる。
構わない、これから自分は眠りに就くのだから。夢の中でこの綺麗な景色を思い出せるのなら。この目の痛いほどの現実が思い出せるのなら―。
その時、キィ、と屋上の扉が開く音が聞こえた。

僕と白沢と小笠原、３人が高部さんの運転する車で教会についたのは、式典が終わった後だった。
昨日の夜、僕は家族に騎士になる事を伝えた。

僕以外にも、それぞれ聖女一人に一人ずつ騎士がいると、教会に向かう車の中で富谷さんに教えられた。
「俺と小笠原は待っているから、お前は沢西と話しをしてこい」と白沢に言われて、僕は沢西を探していた。
応接室にも、休憩所にも、聖堂にも、沢西の姿は無かった。すれ違う教会の人に聞いても、誰一人として彼女の居場所を知らなかった。
僕は一秒でも早く彼女に会いたかった。会って伝えたかった。もう一人で泣かせない。僕が一緒に眠ることを許してくれるか。そして、喜んでくれるか。
最後に着いたのは屋上だった。キィ、という軽い音を立てながらドアを開くと、眼下の街も頭上の空も夕日に彩られて、空の端には夜の藍色が見えた。そんな景色にまるで立ち向かうように、街を見つめる一つの影があった。僕には一目で沢西だと分かった。
かける言葉を思いつかないまま、まるで吸い寄せられるように足だけが勝手に動いた。言いたい事はたくさんあるけれど何を言ったらいいのか分からなかった。それでも、沢西の傍に行きたかった。
そうして少し離れた所まで近づいたとき、沢西は涙を拭ってから「もう、時間ですか？」と振り向いた。きっと僕を教会の関係者と勘違いしたのだろう。逆光だったけれど、僕には彼女の目が赤く潤んでいるのが分かったし、その声は無理に明るく振舞っているとわかった。そして、その様子がたまらなく辛かった。聖女になって眠るのが怖いと思っているのに、それを決して表に出そうとしない。いくら仕事で、家族のためだと言っても、沢西自身がそれを望んでいない事がはっきりわかった。
それをどうして他の人は分からないのか、それが僕には分からなかった。きっと、それが分かるから僕は騎士になれたのだろう。
もう一度声が聞けるとは思わなかった。また会えるとは思わなかった。そして、これからは、一緒だ―。
そんな言いたいことを、何一つ言えずに僕が最初に言った言葉は
「ここに、いたんだな」

それで沢西は、目の前にいるのが僕だと分かったようだ。その表情が固まり、顔には驚きと—そして拒絶の色が浮かぶ。そうして彼女は、

「……何しに、来たの？」

感情を押し殺した、低く冷たい声でそう言った。

その声は、沢西自身が驚くほど冷たい声になった。沢西はこの時、嬉しさと怒りを同時に感じていた。

藤川は助けてくれると言った。その誘いを断るのにどれだけの覚悟が必要だったか。それを断った後、どれだけの後悔が自分を襲ったか。今また藤川に「ここから逃げよう」と言われたら、今の自分はそれを断れるのか、沢西は分からなかった。藤川に会いたくて、同時に会いたくはなかった。彼女にできる事は、自分の中で荒れ狂う感情に耐えることだけだった。藤川には何も言ってほしくはなかった。

二人の距離はそのままで、ゆっくりと藤川が、まるで何かを確認するように語りだす。

「俺は、嫌だったんだよ。誰かの犠牲の上に成り立つ平和が。そもそもこの教会の計画では、平和なんて訪れない。この計画で救われるのは、教会だけだ。だから沢西が聖女なんて役目を引き受けなくてもいいと思っていた。

けれどあの日、沢西は自分の意思で聖女になるって言ったよな。俺には自分で決めた道を変えさせるなんて出来なかった」

そこで藤川は少し寂しそうに笑った。

「昨日、白沢から連絡があってさ。騎士にならないかって言われた。騎士っていうのは、眠りについた後の聖女の護衛者なんだ。だから聖女と一緒に眠りに就いて、聖女と一緒に目覚める。白沢は俺にその騎士を勧めるんだ。沢西の騎士にはお前が一番相応しいって。俺、その時考えてみたんだ。自分が本当にしたかった事は何なのか。

何のために教会の計画を邪魔するなんて事を考えていたのか」
そうして、藤川は一歩、沢西へ近づく。その顔にはもう笑みは浮かんでいない。決意を決めた、一人の大人の顔だった。
「誰かの上に成り立つ平和が嫌だ。これは本心だ。そして、沢西を犠牲に成り立つ平和なんて、俺にとっては無意味だったんだ。お前が眠りに就かないと得られない平和には、価値なんて無いよ。たとえ会えなくても、この世界のどこかでお前が生きている。俺は、そんな世界にいたいんだ。それでもお前は自分の意思で聖女になるって決めた。それは誰にも曲げられないと思う。
だから、お前が決めたように、俺も決めた。これから先、俺が沢西を守るよ。だから許して欲しい。俺が、騎士となってこれから先共に眠りに就く事を」
沢西は戸惑っていた。騎士なんて役目は初めて聞いた。藤川がその騎士になり、自分と共に眠るという。
沢西は目を逸らしながら「それはだめだよ。藤川君はこっちの世界で生きて」そう言った。その声は小さく震えていた。
藤川はまた一歩、沢西に近づく。沢西は目を逸らしたまま、それでも藤川の視線を感じていた。
「藤川君も、私と一緒に眠るなんて―」そんな事はだめ、と言いたかった。
けれどそれは、藤川の「沢西」という一言にさえぎられる。
思わず顔を正面に向けると、目の前に藤川は立っていた。
「俺は、沢西と同じように自分の意思で騎士になるって決めたんだ。それを否定するのなら、しっかりと俺の目を見て言ってくれ」
沢西もそうしようと思った。藤川の顔を見て息を吸い口を開いて、だが言葉は出なかった。
そこで気がつく。自分はどうしようもなく、藤川と一緒にいたいのだ。
でも、それはさせてはいけないと思う。彼が大切ならば、なおさら自分と一緒に眠らせるなんてことはできない。藤川には、こちらの

世界で生きていて欲しい。生きて、自分の分まで幸せになって欲しい。自分の望んだ道を、時々悩みながらも歩き続けて欲しい。彼だけが持つ優しさで、周りの人を幸せにして欲しい。そうして大人になって、誰か素敵な人を見つけて、穏やかで幸せな家族を持って欲しい。

だけど。こう考えずにはいられない。時々悩みながら歩く藤川のすぐそばに自分がいられたら、それはどんなに素敵なことだろうかと。また一歩、藤川は沢西に近づく。お互い見つめあったまま、やはり沢西は何もいえなかった。藤川の目は、中学時代の雨の日と同じように優しくて、でも強い意志を秘めている。

それで沢西は悟った。自分がここで騎士になるなと言っても、藤川は聞かないだろう。自分が聖女を止めないのと同じように。

藤川と一緒に眠りに就く。つまり、自分が起きたときに藤川は必ず今のまま傍にいてくれる。それを実感したとき、沢西の目からとめどなく涙がこぼれる。沢西は聖女になると決まってからたくさんの涙を流したが、それとは全く違う涙だった。

うつむき、嗚咽を漏らす沢西を、そっと藤川が抱きしめる。こうすると沢西は聖女なんかではなく、家族思いの一人の少女だった。その彼女は今日この瞬間までにどれほどの孤独や不安、絶望を味わったのだろう。それを全てこの小さな肩が耐えてきたと思うと、藤川は腕の中の存在がいとおしかった。

そして彼は思う。何もできないと思っていた自分でも、彼女の不安を取り除く事はできた。そんな自分を、誇っていこう。こうして自分を頼りにして涙を流している彼女の為にも。

００ー最後に（２）

これが、今日までの僕達の物語だ。今、僕はこれを教会の応接室で書いている。
さっき４人で、僕と白沢と沢西と小笠原で、写真を撮った。
それはまるで、中学の卒業式のようだった。僕達４人がそうやって集まれたことが、嬉しかった。

写真を撮った時に、僕達は約束をした。

『藤川と沢西が起きたとき、また４人で集まろう』

その幸せな約束を胸に、僕と沢西はこれから眠りにつく。

明日からは僕達４人が会えなくなる生活が、また新しい物語が始まる。
僕と沢西は、そこから少し離れるけれど、途切れるわけじゃない。
それに、たとえ会えなくても変わらないものがあると分かったし、
僕達を起こしてくれる、頼りになる友達もいる。
だから、必ず僕達は再会できる。その時は、今日のように笑いあうことができるだろう。

１９ー エピローグ

その日は朝からよく晴れていた。初夏を思わせる雲ひとつない青空と、涼しくて過ごしやすい気温。そんな外の空気が入るように、窓を開け放ってある部屋があった。

その部屋の中にある物、絨毯や棚、置物は全て高級品だが、それらを見せ付けるような嫌味は全く感じさせない。その中で、デスクに座ってじっと目を閉じる一人の男がいた。その顔は静かで厳しく、まるで阿修羅像が目をつぶるとこんな顔になるのではないかと思わせる。

しかし、彼が着ている服を見れば仏教徒ではない事は明白だ。その服は黒の神父服で、そして羽織っている肩掛けの刺繍から、大神父の役職についていることが読み取れた。

普通ならば大神父になるのは早くても４０歳。だがこの男はそんな歳には見えない。せいぜい２０代後半といったところだ。

そして、彼の実年齢は２５歳。見た目が実年齢よりも高いのは、滲み出す雰囲気と貫禄によるものだった。それは、今の地位をコネや買収などを使わずに実力で手に入れたことを暗に示している。

２５歳で大神父。それは驚くべきというよりも、本来ありえない出世だった。

黙って座っていた彼が目を開ける。

それと同時に部屋のドアがノックされ、２人の男が入ってくる。

皺一つない黒いスーツに身を包んだ男達は彼の正面に立ち

「蘇生班、警護班、報道班、会場班、指令班、全て異常ありません」

彼から見て左側の男が、そう報告をした。長めの髪をしっかりと整えていて、白衣を着ればどこかの研究員で通用する雰囲気を持っていた。

もう一人の男は、年齢不詳だった。身長は１８０センチを優に超え、

全身の肉付きもいい。さらに坊主頭にサングラスと、特徴的な風貌をしていた。
この2人は、教会の特別警護の任務についている。決して表には出ないその部隊に何年も在籍し、なお第一線で働く彼等の名を、富谷と高部と言った。
富谷の報告を受けて、目を閉じている部屋の主はそうか、と短く答える。やがて大きく息をはきだし、深く背もたれに身体を預けた。
それを見て、直立不動だった2人の男達も少し姿勢を楽にする。
富谷は見て分かるほど。高部は見た目では分からないほど。
3人がそれぞれ、今日という日に特別な感情を抱いているようだった。
やがて、姿勢を崩した富谷が言う。
「いよいよ、今日だね」
それは決して高部に対して向けられた言葉ではなく、椅子に深く座り目を閉じている男に向かってかけられた言葉。先ほどは敬語で報告をした相手に、今度は躊躇う事なく普通の口調で話しかける。その口調の変化が、彼らの微妙な関係を示していた。
「そうですね。ここまで長かったのか短かったのか。今となってはよく分かりません」
そんな富谷の口調の変化に合わせるように、部屋の主も口調を改める。
「長い短いで言えば、間違いなく短かったと思うけど。何しろ教会としてはもっと長く眠らせておくつもりだったじゃないのかい？」
「ええ、彼女達は眠らせておくだけで大きなアドバンテージになりますから」
「それをわざわざ起こすのだから、君も物好きだね。もっとも、あの日の様子を見ていたからこうなる事は想像していたけど…。まさかこんな早くに実現させるとは思わなかったよ」
最後の一言は、素直な賛辞だった。
それは25歳という若さで大神父へと上り詰めるという奇跡と暴挙

を成し遂げた事と、今日という日を今日というタイミングで迎えることができた彼への言葉。
「短いとはいえ、８年もかかってしまいました」
「８年しか、だよ。本当なら３０年くらいはこのままのはずだったんだ」
８年前。
この国の教会は一つの大きなプロジェクトを行った。
通称「聖女計画」。全国より１２人の女の子を選び出し、眠りに就かせるというその計画は、表向きには天がこの世界に遣わせた聖女たちを眠らせる事で一度大いなる主の下に帰し、この国の平和を願う、という事になっている。
だが、その計画の本当の目的は別にあった。
当時、国民は国を覆う暗い気配と、それを打破できない教会に不満を募らせていた。そんな不満を回避するのに、教会は国民に対する免罪符が必要だった。
聖女と呼ばれる１２人の少女は、いわば人質だったのだ。
まだ若い少女を眠りに就かせる事に、国民は心のどこかに抵抗があった。それは聖女に対する負い目となり、やがて教会に対する負い目となった。負い目のある相手に、強くは出られない。
「教会は聖女を確保して神の元へ遣わせております」
「若い女の子をコールドスリープにかけて眠らせております」
「それは酷くないか？―いえいえ、全ては民を導くため。彼女達が犠牲となっているのは、あなた方のせいなのです」
という教会の言い分のための、人質。
だから教会は、彼女たちを起こす必要は全くなかった。

そんな聖女達を今日、眠りから覚まさせるという。
教会側にすれば何の得もないその行動を起こさせた仕掛け人こそ、若干２５歳で大神父へと上り詰めた彼だった。
「だけど、まさか本当に聖女を起こさせるとはね」という富谷の言

葉に
「きっと司教の誰かが、私と同じ意見だったのでしょう。決して私の力だけではありませんよ」部屋の主はそう答えた。
いくら彼が史上最年少で大神父になろうと、それだけで教会の計画を曲げられるはずもない。結局、もっと上の地位にいる誰かが計画の終了を決めたのだろう。たまたまそれが、彼が志す所と同じだったというだけの話。
「教会内には、君が司教を動かしたなんていう見方もあるけど」
これだけ大きな計画が、当初の予定よりずっと早く終わった。その計画の変更を、若干２５歳の若者が仕組んだとしたら。
それは、一つの流れとなるだろう。彼は将来大物になる。そう考える者が、彼を後押しするのは想像に難しくない。
だが、一つの流れは周りに乱れを与える。別の流れとぶつかることもあるだろう。自らの意思をもって世界の厳しさを実感するように。
そんな流れの中央に、彼がいる。それはどうしようも無い事実だ。
だが、
「そうですか。それならばそれすらも利用するまでです」
特に気負う様子もなく彼は言い切る。
乱れや抵抗など気にしない。抵抗なら叩く、後押しなら最大限に利用する。
そうやってここにたどり着いた彼は、これからもそのスタンスを貫くと言い切った。その言葉には、もうすでに貫禄がついている。
「君は教会内部の権力争いを知らないからそんな平気な顔をしていられるんだよ。そうだね、来年の今も同じ事を言えたなら、その時は君に対する口調を改めさせてもらうよ」
そうは言うが、富谷はわかっていた。彼ならどんな権力争いに巻き込まれても、自分を貫けるだろう。
そして、なぜ彼がここまでの、年齢不相応の強さを身に付けたのか。その過去を知る富谷だから、少しだけ心配だった。
２５歳で大神父。その裏には、もちろん訳がある。

親や親戚が教会の関係者ならばコネを使えるが、彼の場合はそれも無かった。だから、彼は唯一の武器を最大限に利用した。
自分の友人が聖女と騎士であり、現在眠りに就いている。その事実こそが、彼が持つ唯一の武器だった。
その武器は強力だった。国民が教会に対して負い目を感じるのと同じ様に、教会の上層部は聖女に対して負い目を感じている。そうして教会の上層部に足掛かりを作り、彼は２５歳で大神父になった。
彼と同期、もしくは先輩に当たる教会関係者の中には彼の出世を卑怯だと言う声もあった。「俺も友人に聖女と騎士がいれば今頃大神父だ」と。それを聞くたびに富谷は、表には出さないが強い怒りを感じた。例え友人が聖女と騎士でも、それは簡単な事ではない。
彼が今の地位にいるのは、紛れも無く実力によるものだ。大きな組織の中で、重要な事、重要な人。それを探り出し見極める才能が彼には備わっていた。
少しして、若き大神父は口を開いた。
「……8年前のあの日、2人に約束したんです。お前達が起きる時には、この世界を素晴らしい世界に変えてみせる。それが、この世界に残された俺に出来る事だからって。どうです、少しはいい世界になりましたかね？」
その約束が、彼にとって何よりも大切である事を富谷も高部も知っていた。
「たった8年で変わるほど、世界は軽くないと思うよ。だけど、そうだね。それでも少しはよくなったんじゃないかな？」
そう言って富谷は、今まで全く口を挟まなかった相方―高部を見る。
「…少なくとも、悪くはなっていないと思います」
姿勢を崩して楽にしている富谷に対して、高部は直立不動のまま答える。
「ですが、世界の変化なんて8年程度では分かりません。先ほど富谷が言ったとおり、世界は軽くありませんから」
高部がここまではっきり自分の意見を言うのは珍しい。そしてそれ

は、彼なりの励ましにも聞こえた。
「あなたは今日という日を迎えるのに全力を尽くしてきました。いや、全力以上の力を出してきていました。そんなあなたが作ってきたこの世界が、悪くなっているはずはありません。少なくとも自分の力の範囲で出来る事をやっているのですから、今はそれでいいじゃないですか。
それとも本当に8年程度で世界が変えられると思ったら、それは大きな間違いです。いくら最年少で大神父になったからといって、その程度では世界は変えられません。
世界を変えたいのなら、少なくとも大司教にはなってもらわないと」
大司教。それは、この国の教会のトップ。
「……大司教、か」
それもいいかもしれない。
自らの時間を犠牲にして、この国の為に―いや、教会のために眠りについてくれた彼らの為にも、大神父程度で足を止めるわけにはいかなかった。
そんなことを思いながら、机の上におかれた写真立てを見る。そこには2枚の写真が入っていた。
1枚は、中学の卒業式なのだろう。丸い筒を片手に4人の少年少女が校門前でそれぞれ泣き顔と笑顔を見せている。
そしてもう1枚、写っているのは少し大人になった4人の少年少女で、場所は教会の応接室だった。
時間も場所も違う2枚の写真。けれど、そこに写っている彼らの空気は、何も変わっていない。
それを見つめる彼の目に、優しい光がともる。

少し日が高くなってきたが、湿度は高くない。よく晴れてすごしやすい天気だ。
写真を見て物思いにふけっている彼と、それをやさしく見守る2人。
それぞれがこの8年を思い返している沈黙は、机の上にある電話機

の呼び出し音に破られた。電話をとる彼の顔は、すでに大神父のそれになっていた。
「はい。……はい、分かりました」
短くそれだけ言うと受話器を置く。
もう一度写真を見て、大神父は椅子から立ち上がった。
「もう行きますか」
自然と敬語になる富谷に
「ああ、お呼びがかかった。そろそろ会場へ向かわねばなるまい」
自らの法衣に袖を通しそう答える。それ以外の準備は、この８年で済ませてきた。後は結果を見届けるだけ。
そうして、部屋を出て行こうとする彼の後ろに、自然と富谷と高部が並ぶ。
部屋の扉の前で一度だけ立ち止まって、大神父は振り向かずに
「そういえば、カメラは持ったか？」
とたずねる。
「もちろんです」
前を向いたままの彼に見えるはずは無いが、富谷は１台のカメラを取り出した。
それは、旧式と呼んでも差し支えないようなモデル。大きな傷は無いが、年季が入っている事をうかがわせる。
「もちろんちゃんと使えますよ、８年前のようにね」
それを聞いて小さく頷くと、２５歳になった白沢は扉を開ける。
「それじゃあ、２人を迎えに行きましょう」
彼のその言葉で、３人は歩き始める。

今日は聖女を眠りから覚まさせる日。
そして、白沢にとっては８年振りに友達と再会する日。部屋を出て歩き出したその背中を見て、富谷は思う。
目を覚ました聖女と騎士を前に、彼が一体なんと言うのか。
豪華なベッドの上で目を覚ます沢西と藤川。

そのすぐそばで、彼は目が覚めるのを待っている。きっと頭の中では最初にかけるべき言葉が用意されているはずだ。
だが、実際に騎士や聖女が目を覚ますと、そんな言葉は出てこないだろう。８年ぶりの再会、そこには言葉が入り込む余地など無い。
その瞬間は、２５歳となってしまった彼も１７歳に戻るだろう。
目に涙を浮かべ、無事を喜ぶ白沢の姿を想像して、内ポケットの中のカメラにそっと手をやる。
８年の月日を越えて今日、このカメラにはどんな絵が残るのだろうか。
どんなものかは想像も出来ないけれど、それは絶対に幸せなものになる。
そんな確信を持って、富谷も歩き出した。

19－エピローグ（後書き）

これで、この物語はお終いです。

この物語は私自身にとって、特別なものです。
最初にも書いた通り、ある映画に対する私からの『回答』でもありますし、この物語を書いている時に、書くことの難しさと面白さを感じることができました。

作中のセリフではないのですが、改めて読み直してみると「本当に公開してもよかったのか？」と思ってしまう箇所もたくさんあります。
その後悔は、次の物語の糧にしたいと思います。

最後になりましたが、最後まで読んでいただき、本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3951e/

物語、彼女との約束

2010年10月23日13時30分発行